

欧州医学史探訪



杉田克生

千葉大学子ども心の発達教育研究センター

欧州医学史探訪

杉田克生

千葉大学こどものこころの発達教育研究センター

欧州医学史探訪

文芸評論家小林秀雄の言に、歴史を知るとは「古の手ぶり口ぶりが、見えたり聞こえたりするような、想像上の経験をいう」と述べた。ある事象が起きた過去と、我々の記憶や知識で特徴づけられる現在との間に、時間の流れだけではなく何らかの因果関係や想像上の経験が想起されてくる。これは時間の長短は別にして、医師が患者を診療する際必ず働かせている脳機能であり、その意味では医師は誰もが歴史家である。さらに「歴史とは混濁性や全体性において成り立つものであり、そこに含まれる多元的要素については物質の「分子」を扱うように慎重に個別解析すると同時に、全体模型を俯瞰する視点を併せもつ必要がある」（山内昌之「歴史は何か」PHP 文庫）点は、まさに医学も然りというところである。

著者は大学の講義や講演の際に、可能な限り新知見に至った経過を話すことを心がけている。それは明治時代に西洋の学芸を取り入れる際に、「それを生み出した思想的・文化的基盤に思いを致すことなく、技術的な導入・模倣に終始した」とするポンペの批判を常に心すべきと考えるからである。それを大義名分にして、西洋の文化的基盤の一部でも知るべく、欧州へ海外出張の際に各国の医学の歴史を訪ねている。また全国公私病院連盟主催の医学史を巡る旅に参加した際に見聞した施設も紹介した。読者が今後欧州の医学施設を巡る際のガイドブックとして活用いただければ幸いである。

本書は主に千葉大学医学部同門会である会報で連載した「欧州医学史を巡る旅」や日本医学切手研究会誌「ステトスコープ」に寄稿した医学施設訪問記その他の既報をまとめ、ガイドブックとして書き改めたものである。なお本書に加え、みのはな同窓会オンライン会報では記載した歴史施設の紹介動画も閲覧可能であり、ご覧いただきたい。本誌の記載に関しては、日本医学切手会、日本医史学会、千葉大学みのはな同窓会の先生方から多くの医学史情報をご紹介いただいたことに、深く感謝致す所である。

杉田克生

目次

1.	英国 -----	p.4
2.	イタリア -----	p.31
3.	フランス -----	p.63
4.	ドイツ -----	p.84
5.	オーストリア -----	p.96
6.	スイス -----	p.101
7.	オランダ -----	p.102
8.	スペイン・ポルトガル -----	p.108
9.	ハンガリー、チェコ -----	p.120
10.	ギリシア -----	p.124
11.	トルコ -----	p.135

1. 英国—イングランド、スコットランド

ロンドン

ロンドンは英国首都だけあって、医学史施設は豊富である。以下筆者自体訪問した施設の一部を簡単に紹介する。王立内科医協会(The Royal College of Physicians)は地下鉄 Great Portland Street 駅北に位置し、ヘンリー 8 世の狩猟場であった Regent 公園南東部にある。血液循環を発見したの William Harvey(以下ハーヴェイ)を記念する博物館はロンドン市内にいくつかある。ハーヴェイが所属した王立内科医協会もその一つである。玄関ホール正面の壁には、ハーヴェイを顕彰する像が架けられている。また 1666 年のロンドン大火の際に何とか持ち出しえた 2 枚の肖像画のひとつが、2 階の会議室の中央に架けられていた。ハーヴェイは内科医協会でも最も重要視されていることの反映であろう。ハーヴェイがラムリー講座の解剖学講義で体の各部を指し示すのに用いた指し棒が展示されており、館内を案内してくれたガイドが「この館内で展示する中で最も重要なものの一つ」と話していた。ハーヴェイの胸像が展示された玄関ロビーを通り過ぎると 1 階ホール壁面には英国で活躍した内科医の面々の肖像画が架けられている。2 階の回廊にはハーヴェイ関連の品々が展示されており、循環器を志す先生方には必見の施設である。



内科医協会正面玄関案内 (左)、館内内ハーヴェイ像 (右)

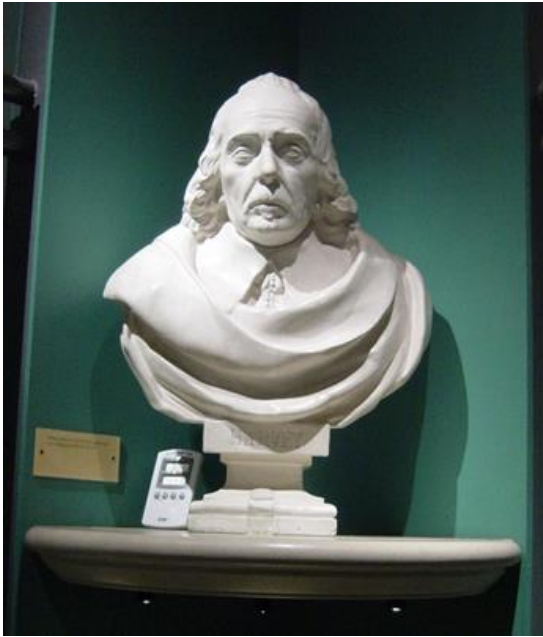


会館ホールをかざる内科医肖像画（左）、書籍（上）は血液循環に関する初版本、指し棒（下）はラムリー講座の解剖学講義で体の各部を指し示すのに用いた（右）

ロンドンには医学史関連資料館が数多く存在する。欧州では一般的に言えることだが、歴史的事象の積み重ねで今日があり、未来につながることを重視している反映であろう。ロンドン市内にある聖バーソロミュー病院は、1123年にヘンリー1世の寵臣（宮廷道化師）だったラーヘレによって設立された。彼は聖なるアスクレピオスの蛇がローマテベレ川に浮かぶ島に上陸し、奇跡的に疫病（前292年）が終結したことから、その後この島はセント・バルトロマイ島と知られる。その故事から設立した病院を聖バーソロミュー病院と名付けた。英国で現在も医療を提供している医療施設として最古のものである。その後ウィリアム・ハーヴェイが実際勤務した病院でもあり、病院開設当時の病院の歴史、その後の医療の進歩を示す器具や写真などが多く展示されている。ハーヴェイの肖像や彼に関する資料なども多数館内で見ることができる。聖バーソロミュー病院博物館にもハーヴェイも含め医学史関連の展示物を一般開放した博物館がある。ポット氏病のパーシバル・ポット(1714-1788)、心疾患とリウマチとの関係を発見したダビッド・ビトカイン(1749-1809)らがいた。



旧聖バーソロミュー病院玄関門、中段中央にヘンリー8世の立像がある



聖バーソロミュー病院博物館内のウィリアム・ハーヴェイ胸像

ハーヴェイはイングランド南東部ドーバーから数マイル離れた小さな町フォークストンで生まれた。小さい頃から利発で、ケンブリッジ大学で学士号を得たが、その後イタリアパドヴァに留学し、静脈弁を記載したジロラモ・ファブリチウスに師事した。24歳でロンドンに戻り、父親がエリザベス女王の侍医である女性と結婚し、岳父のお蔭かすぐに王立医師会の会員になっている。1604年王立内科医協会の一員として許可され、ロンドン市内で開業した。開業して数年は十分な稼ぎがなかったためか、1609年に聖バーソロミュー病院内科医に応募し雇われた。まもなく聖バーソロミュー病院づきの医師として働き、ジェームズ1世の侍医の一員となった。1615年にはラムリー講座の講師に任命された。この講座は1581年ラムリー卿が設立した外科講座である。外科医が一人助手として解剖役を務め、講師は解剖部分について教科書に書かれている解説を読み上げた。

ハーヴェイの講義ノートからは、定められた外科学講義にとどまらず、恩師ファブリチウスがしたような生物学の研究を行う場として、一連の講座を位置づけた。先人たちにならい他の動物を使った比較解剖もし、人体解剖で足りない生きた生理解剖を行った。この実証的研究の結果として、旧来の医学理論では十分に説明できない謎を解き明かした。特に心臓と脈管系の機能解剖を熱心に研究し、後にハーヴェイが提唱した「血液循環」説に至った。生理学者橋田邦彦は学生実験の教科書「生理学小実験」で「教科書又は講義によって得た先人の研究の結果の総括的な知識が如何なる実験によって得られたかを会得すると同時に、結論と実際との間に如何様な連絡と隔たりがあるかを見極めて生理学的判断力の基礎を得る事が最も重要なるものである」と述べている。

ロンドンブリッジ駅のそばには、有名なガイ病院がある。博物館には、歴史的に病名の由来ともなっている Thomas Addison (以下アジソン)、Thomas Hodgkin (以下ホジキン)、Richard Bright (以下ブライト) らのオリジナル病理標本が展示されている。その一部は拙著 (日本醫事新報 2013, No4651, p76-78) に紹介した。病院名は創設者 Thomas Guy にちなみ、ロンドンの名の知れた病院の中では比較的新しい。「ガイ病院の 3 人」と知られているブライト病のブライト(1789-1858)、アジソン病のアジソン (1793-1860)、ホジキン病のホジキン(1798-1866)など有名医師を輩出した。医学校が併設したのは、1725 年である。病院内には、Gordon 医学博物館があり、これら 3 名の医学業績が展示されている。ここは臓器別に膨大な病理標本が吹き抜けのホールの各階に展示されている。この施設は King's College London の医学部教育施設としても活用されており、圧倒的な標本数を誇っている。医学生なら誰もが習うアジソン、ホジキン、ブライト 3 偉人が働いた病院で、彼らの名前がついた疾患の病理標本が展示されている。なかでも印象に残ったのは、ホジキン病標本である。

ホジキンは、1798 年 8 月 17 日ロンドン郊外のペントンビルに住むクエーカー教徒の家に生まれた。21 歳で医師をめざしガイ病院にはいり、医学を学んだ。その後エジンバラ大学を経て、1821 年にはパリに留学した。当時はフランス医学の影響もあり、病理解剖から生前の臨床症状を説明する現代版“臨床病理”の創世記ではあった。3 偉人の一人であるホジキンもパリに留学し、病理医であるとともに内科医として働いた。彼は学生時代から病理解剖に興味があったこともあり、ガイ病院初代病理解剖の講師として勤務した。彼の精力的な病理標本収集が、今日の Gordon 博物館の母体となっている。

1832 年王立医師会の例会で“On some morbid appearance of the absorbent glands and spleen”を発表した。続いて機関紙「Medico-Chirurgical Transactions」に掲載されたが、反響は全くなかった。この発表の 24 年目の 1856 年同じく病理医で内科医のサミュエル・ウィルクスにより再発見された。ヴィクトリア女王の侍医でもあったウィルクスは最も忠実なホジキンの医学的擁護者となり、ホジキンの優先権を明確に示した。その後 1865 年にはホジキン病と呼ぶことが承認された。ホジキンは 1837 年ガイ病院準内科医への昇進が選挙で選ばれなかったことから、既にガイ病院を去っていた。その後病理学から手をひき、当時植民地で未開地であったカナダの原住民が近代文明に侵されることを危惧し、奴隷制に反対するなど人権保護や慈善事業に情熱をそそいだ。肉眼的解剖所見から“ホジキンリンパ腫”なる疾患に名を残したホジキンは、「社会的正義の眼」も有していたことを記憶しておきたい。



旧ガイ病院玄関



ゴードン博物館前景



ゴードン博物館内アジソン(Thomas Addison)胸像 (左)、クーパー(Astley Paston Cooper)胸像 (右)



ホジキン病関連展示棚

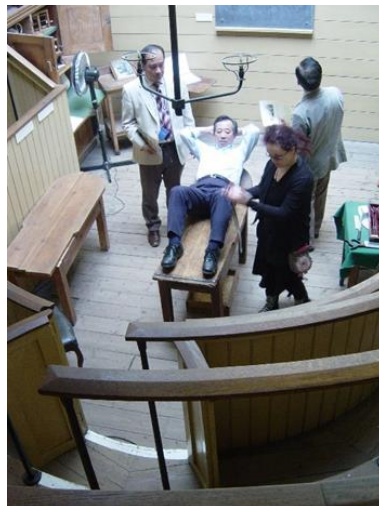


アジソン病関連展示棚



ブライト病関連展示棚

Guy's Hospital 向かいにある旧セント・トーマス病院内手術講堂（Operating Theatre）では、手術は塔状の建物最上階で実施され苦痛の叫び声が周囲に聞かれないようにした。ジョン・スノーが開業医をしていたヴィクトリア時代の人々にとり、麻酔のない外科手術は恐怖以外の何物でもなかった。外科医の腕には何よりもスピードが求められた。元来はセント・トーマス病院内の教会塔であった。手術講堂は初め病院の調剤室であったが、1821年より女性患者用の手術講堂となった。現在博物館になっているが、外科用具、産科用具、薬草などが展示されている。



旧セント・トーマス病院内手術講堂（左）と手術室（右）

1813年3月15日、John Snow（以下スノー）はヨークシャーの労働者の長男として生まれた。1827年、17歳でニューカッスル・アポン・タインの外科医の徒弟となった。ただし向上心が強く、名をあげるために大都会ロンドンに出てきたのである。ロンドンではソーホーに住み着き、ハンテリアン医学校に入学した。1843年にはロンドン大学で医学士の学位を取った。ロンドン市内ソーホー地区には、コレラで有名なジョン・スノーの井戸がある。



井戸からの取水を禁止し、コレラの蔓延を防いだジョン・スノーの顕彰板

麻酔法の始まりは、1846年10月米国ボストンのマサチューセッツ総合病院で、歯科医のウィリアム・モートンがエーテル麻酔を実施した公開治療が有名である。驚くことに12月には大西洋を越え、12月半ばにはロンドンの歯科医ジェームズ・ロビンソンがエーテルを使用している。それは数人の医学関係者の立会いの下で行われ、その中にジョン・スノーが混じっていた。現在それを示すブループラークが Gower Street の英国麻酔科協会玄関脇にある。大英博物館を過ぎて15分くらいの所にあるので、寄ってみることを勧めたい。スノーはロンドンでは1番人気の麻酔医となり、後の1853年ヴィクトリア女王にクロロホルムを処方し、無痛分娩（8人目のこどもであるレオポルド）を行った。



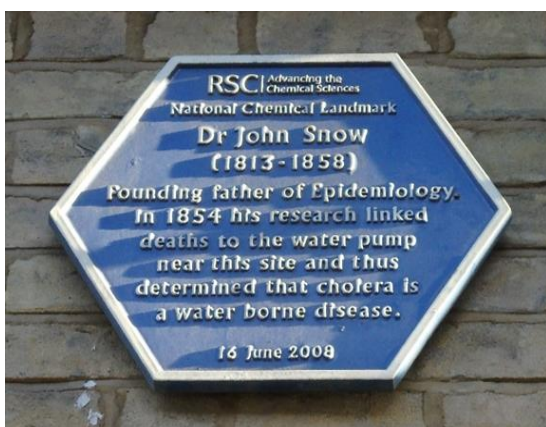
英国にて初めて麻酔剤投与を記念するブループラーク（銘版）

上記麻酔法が開発され始めた1948年～49年には英国でコレラが大規模な被害をもたらした。麻酔医としてだけで十分生活していたスノーであったが、ここで満足していたら後の「疫学の父」は生まれなかった。コレラ菌が発見される前であり、当時のコレラの原因は「ウイルスを含んだ悪臭」を指す瘴気説が主流であった。麻酔で気体の拡散効果を学んでいたスノーは、瘴気説に異を唱えるだけの観察眼を有していた。さらに、彼は Broad

Street（現在は Broadwick Street）周辺のコレラ患者集団発生の原因をその井戸水と提唱したのは、生活者の徹底的な観察による社会学者としての能力に負うところが大きい。Broad Street の井戸水を飲んだ者が統計的に発症し多くの死亡者を出した証拠を固め、最終的に井戸を閉鎖することでコレラ禍を鎮静させた。それを顕彰するブループラークがパブ（その名も John Snow）の2階窓の下にある。「疫学創設の父であり、コレラが水を介しての病気”water borne disease”であることを明らかにした」とある。



ブロードストリートの井戸（左）、背後の建物はパブ”John Snow”（右）



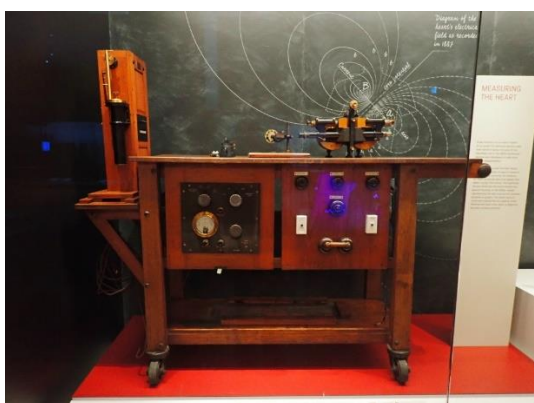
「疫学創設の父」を顕彰するブループラーク

ロンドンのサウスケンジントン地区には、科学博物館内で新装になったウェルカム医学ギャラリー（正式名は MEDICINE : The Wellcome Galleries）がある。改装されていたが、2019年11月16日にオープンとなった。博物館のホームページでは、“World’s largest medicine galleries”と紹介されているが、確かに広さ 3000m²に 3000 以上の医療展示物が公開されている。多くの医学関係展示品がある中に、Alexander Fleming（以下フレミング）が 1935 年友人 Douglas Macleod に渡したペニシリウムカビ標本がある。1928 年 9 月、彼

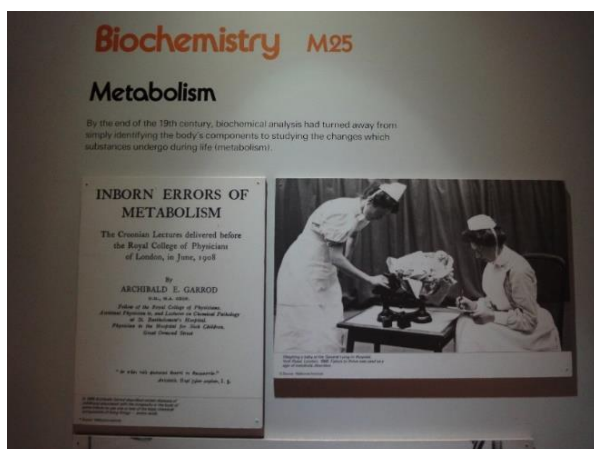
が開けたペトリ皿に偶然入ったカビである。培養液表面に成長しているカビに抗菌力があることを知った彼は、その後異なった種のアオカビを調べたが他では効果がなかった。このペニシリウム・ノターツム変異株は、彼の研究室の一つ階下の専門家が育てていたという幸運に恵まれたのである。当時は孢子が漂い出ることを防ぐ適当な手段がなかったために、軽い孢子がエレベーターか階段から昇って、習慣的に開け放してあったフレミングの研究室のドアから“闖入”したと考えられている。



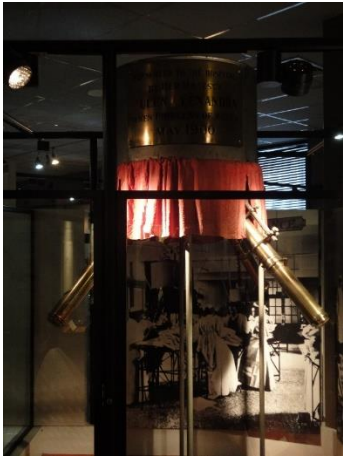
フレミングが友人に与えた変異ペニシリウム・ノターツム株



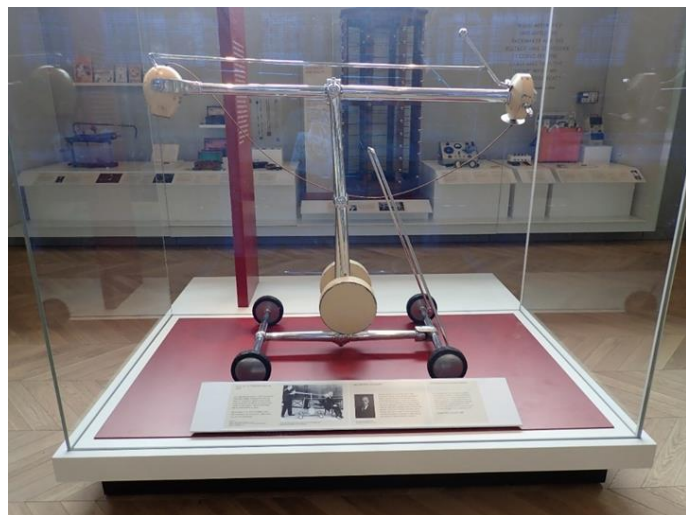
1930年の心電計、循環器科医 Thomas Lewis の考案（左）、細菌培養モデル（右）



Archibald E. Garrod による先天代謝異常解説パネル



Finsen Light、紫外線を発生させ結核治療に用いた（左）、たばこ蘇生器、おぼれた患者に、たばこの煙を肺、胃や直腸に送り蘇生を試みた、1520年代に欧州ではタバコは医療用に用いられた（右）



フランス人 Dr. Joseph Riviere は、パリで神経電気刺激装置を開発し実践した（左）、ラジウム治療器（右）

医学史ギャラリー検疫のコーナーでは、検疫船や検疫旗が展示されている。「電波通信が可能になる以前には、このような“simple”で“clear”な視覚的メッセージが必須であった」と検疫旗の説明がある。また“quarantine travel pass”なる「通行手形」も展示されている。1600年代のベネチアでのペスト流行中は、通行許可証が旅行者には要求されていた。同じ感染症コーナーには、現代版ペストたるエボラ出血熱に対する予防着も展示されていた。その説明ポスターには、“検疫実施”と称して、「感染に暴露された人間すべてを非暴露者から隔離することには問題がある。暴露された『健常者』を発病者と一緒に隔離することで感染が広がりうる」と説明している。



隔離用患者搬送トローリ (isolation trolley, 1976 年)

ロンドン市内のパディントン駅から歩いてすぐのセント・メアリー病院には、フレミングがペニシリン株を発見したのフレミング研究室博物館(正式名は Alexander Fleming Laboratory Museum)がある。セント・メアリー病院は 1845 年に創設された貧しい病人のための慈善病院で、1851 年に最初の患者が入院した。1854 年に医学校が付設され、1948 年より国立になった。病院内の博物館の案内板には、ペニシリウム・ノターツムのコロニーが描かれた標識がある。この博物館は大変狭い小部屋であり、フレミングが培養実験をしていた研究室が当時のままで公開されている。研究室内には、フレミングがアオカビの抗菌作用を見出した培養シャーレ標本が残されている。1928 年 9 月、彼が開けたペトリ皿に偶然入ったカビである。

フレミングは 2 週間の夏休みのために、ブドウ球菌が過剰増殖しないために培養器でなく室温に培養皿を置いたが、これがペニシリン抗菌作用発見に幸いした。摂氏 38 度の培養器では発見に至ったアオカビが増殖できなかったからである。さらに彼が培養シャーレに植え付けたのはブドウ球菌であるが、ペニシリンに抵抗性がある細菌であったら、抗菌作用は発見できなかった。フレミングには多くの偶然が幸いしたが、本質的にはブドウ球菌にあふれた培養シャーレの一部にブドウ球菌が消滅したアオカビ周囲の透明部分を見出し、その抗菌作用を「発見」した科学者の目は称賛されるべきである。パスツールは「幸運は備えある人だけに訪れる」と言っている。

フレミングの幸運はアオカビの闖入だけにとどまらない。抗菌ペニシリンを作り出したのは、標準的なペニシリウム・ノターツムではなく、フレミングの変異型のみであったこともある。広辞苑ではセレンディピティとは「思わぬものを偶然に発見する能力。幸運を招きよせる力」とある。「発見」とは今まで「分かっていたのに気がつかなかったことが明示化されること」であり、「これまでの結びつきではない、別の結びつきを見つけること」なのであろう。同じような透明部分を見出したある日本人研究者は「カビが栄養分をとってしまうため細菌が増殖できない」と判断し抗菌作用の発見に至らなかった。現象を解釈する際、「別の結びつき」に思い及ばなかったからである。ただフレミング自身は、体内細菌感染症を薬剤注射で抑える可能性に思いいたらなかった。1935 年にゲハルト・ド

マークはプロントジルが全身連鎖球菌感染症に効果的だとする報告したが、これが10年弱早ければ1928年にフレミングがペニシリン研究を中止することはなかったであろう。

ただしこの変異型を保管し続けたことで、オックスフォードのサー・ウィリアム・ダン病理学教室教授ジョージ・ドレイヤーがフレミングから変異株を譲り受けた。そのドレイヤーの後任がハワード・ウォルター・フローリーである。彼は物理学者で病理学者かつ内科専門医であった。指導者として立派な資質と生来のユーモアのセンスがあり、病変の原因を探究し、その治療開発にチームで努めた。そのチームの一人が、生化学者で才能ある音楽家でもあったエルンスト・ボリス・チェーンである。彼の協力を得て、その後オックスフォードグループによるペニシリン大量生産につながった。

紹介してくれた館員に培養シャーレ標本が当時フレミングの使ったものかどうか聞いたところ、実物だと言っていた。筆者が30年ほど前訪問した大英博物館には、フレミングがペニシリンを発見した際の培養シャーレ標本が展示されていたが、その後同博物館を訪れても見つけられないでいる。なおフレミングがペニシリンを発見したことを記念するプレート“Discovered Penicillin”は研究室建物外壁にある。



セント・メアリー病院



フレミングのペニシリン発見を示したプレート（左）、フレミング博物館玄関にある表示（右）

ロンドン地下鉄 Holborn 駅から歩いて 5 分ほど南には、Lincoln's Inn Fields に面して王立外科医協会(The Royal College of Surgens)がある。ヘンリー8世が外科医組合と床屋協会を統合し、1540年に床屋 - 外科医組合が結成されたことに始まる。1階大ホール周囲には歴代の英国外科医の肖像画が掛けられているが、最も目立つ中央には英国で初めて Sir の称号を与えられた外科医リスター卿 (Joseph Lister, 1st Baron Lister) の肖像画が架けられている。2階には図書室もあるが、古典医籍も多数蔵されている。また外科医 John Hunter (以下ハンター) の収集した膨大な解剖標本も、政府が援助して収集管理され現在のハンター博物館になっている。ハンター博物館は、一般人入館自由であり、しかも入館料は要らない。解剖標本、病理標本などが主体の中規模な博物館である。本人の意思を無視して作成されたチャールズ・バーンの巨人症骨格標本もこの中にある。身長は 249 センチだったとのことであるが、確かに大柄であった。

この The main College building の 3 階にはウェルカム解剖病理博物館がある。こちらは医療関係者限定であり、時折 London University College 医学生の解剖や病理の実習や口答試験に利用されている。筆者はあらかじめ許可をとって内部を見学させていただいたが、日本ではアトラスでしかお目にかかれない稀有な病理標本が数多く展示されていた。日本も実物標本を保存展示することは、医学専門教育上重要である。ただし、情報公開の世とて、専門性のない一般市民が見るべきものではない。授業用に写真を撮りたかったのであるが、3階は当然だが2階の Hunter 博物館も撮影禁止であった。

外科医協会が運営する宿舎である The Nuffield College building 1 階の朝食食堂には、英国で始めて麻酔を行ったことを示す盾がある。ここには、かかわった Henry Hill Hickman、James Young Simpson、John Snow、Joseph Thomas Clover の 4 名の医師が列記されていた。前記したように (11 頁)、John Snow はコレラの原因が空気だとする瘴気説を否定し、ポンプの井戸水にあることを疫学的に証明した。スノーは本来外科医であり、その延長で麻酔医も兼ねていたが、本来こちらが本職なのであろう。スノーこそ英国人が選ぶ有能な医師のトップ 10 の一人で、しかもその中で一番とされている。



王立外科医協会 The main College building



王立外科医協会受付ホールにあるリスター卿レリーフ（左）、Wellcome 解剖病理博物館正面入り口（右）

Lincoln's Inn Fields から歩いて10分ぐらいでハンターが暮らしていた Leicester square（レスタースクエアと読む）がある。このスクエア内は公園になっており、四隅のゲートの一つにハンターの像がある。ちなみにこの公園は中央にイルカに囲まれた William Shakespeare の銅像があり、他の4隅のゲート近くには、Sir Isaac Newton、Sir Joshua Reynolds、William Hogarth の胸像があるが、この3名もこのスクエア周辺に住んでいたとのことである。Sir Joshua Reynolds はハンターの肖像画も描いており、また William Hogarth は捨て子などの施設へ多大な寄付を行っており、英国小児病院の代表である The Great Ormond Hospital の設立にも多大な貢献をしている。



Leicester square 内にあるハンター胸像

Lincoln's Inn Fields から歩いて 10 分ほどには、大英博物館がある。数は少ないが、医療関係の展示品がある。



古代ギリシア、ローマ医療関連



アスクレピオスとヒゲイア（テラコッタ、ローマ紀元1世紀）（左）、紅玉髓封印石 Sard sealstone（アスクレオイオス、内科医、ヒゲイア）（右）



テラコッタモデル（ローマ紀元前3世紀から1世紀） 目、耳、乳房、小腸

市内中央には、ハイドパークが広がっている。そこには Edward Jenner（以下ジェンナー）像がある。1853年には「ワクチン接種義務法」が施行されたが、多くの反対者がいた。本来ジェンナー像はトラファルガー広場の4番目の礎石におかれていたが、ワクチン接種反対運動の高まりの中で、ジェンナーは「守銭奴の藪医者」として愚弄され、1862年にこちらに移された（多くの報告書にはケンジントンパークと記載されているが、ハイドパークとの境にあり、地図上はハイドパーク側と筆者は認識している）。ロンドン科学博物館を訪れた際には、公園内を散策がてら一見することを勧める。



ハイドパーク内ジェンナー像

エジンバラ

最近独立運動で話題となったスコットランドの首都エジンバラは、スコットランドの政治だけではなく文化、教育の中心である。歴史的にはイングランドのオックスフォード（1167年創立）やケンブリッジ（1209年創立）が英国では古い大学であるが、独自のカレッジ制度での教養重点主義を第1義としたため技術蔑視がみられ、その結果近世の医学

教育ではフランスやドイツに後れを取った。真の医学教育はロンドンやエジンバラで行なわれ、アメリカからも多く留学した。

エジンバラ大学自体は Tounis College として 1583 年にスコットランドでは 2 番目に創設された。ちなみにスコットランドで最古の大学は 1411 年創立のセント・アンドリュース大学である。エジンバラ中央駅を南に 5 分ほど South Bridge Street を歩くと旧大学 (Old College) に到着する。中庭がある由緒ある建物 (1789 年創建) であり、その受付で大学史の資料などが配布されている。その裏にはスコットランド王立博物館があり、クローン羊のドリーにお目にかかれる。ただし博物館だけあって、近代の蒸気機関など科学技術の成果が展示されている一方、太古のスコットランドの地質学的特性や先住のピクト人の粘土板なども紹介されている。



スコットランド王立博物館



世界初のクローン羊ドリー

スコットランド王立博物館よりさらに西には、エジンバラ大学のキャンパスが広がっている。その一角に、旧医学部本館がある。玄関前ホールには、この医学部で学んだ医学者のプレートがはめ込まれている。有名人をあげると、ジョセフ・リスター、ジェイムズ・ヤング・シンプソン、リチャード・ブライト、トーマス・アジソン、トーマス・ホジキンなどである。壊血病の予防に功績のあったジェームズ・リンドも卒業生であり、「海洋医学のヒポクラテス」として賞賛してある。リンドは 10 年にわたる研究結果、1757 年にレモンとオレンジの汁が壊血病に最も有効であることを発見した。不勉強で知らなかったジョン・ヒュージ・ベネットなる内科教授は、1845 年白血病を明らかにした(“identify”と記載)ことが顕彰されている。



旧エジンバラ大学

エジンバラ中央駅を南に 10 分ほど South Bridge Street を歩くと堂々たるエジンバラ王立外科医ホール（Royal Infirmary）の建物がある。元は外科病院も含めた旧王立病院があった所で、現在は王立外科医協会やその博物館がある。後者は最近改修が終了したばかりで、玄関前には外科手術を象徴する大きな手がついたモニュメントがある。博物館内には、3 階の医学史関連の展示物に加え、4 階には臓器別の病理標本が整然と展示されている。医学史関連の展示物に加え、臓器別の病理標本が展示されている。日本では病理学教室に保管されているのが常であるが、こちらでは一般にも公開されている。

Sir Arthur Ignatius Conan Doyle（以下コナン・ドイル）の恩師でシャーロックホームズのモデルであるジョセフ・ベル教授が紹介されたコーナーもある（ベル麻痺のチャールズ・ベルとは別人）。彼は患者を見ると職業や生地などをもの見事に言いあて、彼に学んだコナン・ドイルはその推理法に感銘を受けた。祖父ベンジャミン・ベルは「科学レベルで外科医療を最初に実践した外科医」と称され、エジンバラ大学外科学講座の創設者である。孫のジョセフ・ベル教授も外科医であり、ジョセフ・リスター卿と一緒に研究生活をした。エジンバラ医学校の伝統である患者を詳しく観察する技術を学び、一生涯実践した。医学生には、常に“Use your eyes, use your eyes”と指導したとのことである。ただし、ベル博士の口癖の一つに「ただ見る(see)だけではなく観察(observe)せよ」も付記すべきであろう。これは「ボヘミアの醜聞」でホームズがワトスンに言った言葉である。

なお外科医協会から 10 分ほど西に歩くと旧医学部本館がある。その玄関前ホールには、この医学部で学んだ医学者のプレートがはめ込まれている。その中に、“Sir Arthur Conan Doyle 1859-1930 Medical Graduate of the University, Author and Creator of Sherlock Holmes”としてコナン・ドイルも記念されている。一方、エジンバラ中央駅から北へ 5 分ほどの所に王立内科医協会(Queen Street)がある。建物の玄関屋根の上には、2 体の男性立像がある。左側は、蛇が巻き付いた杖を持つ医神アスクレピオスである。2 階ホールには功績のあった医師の肖像画や胸像が多く置かれている。隣には会員が利用できる図書館があり、1682 年以来収集された図書が所狭しと置かれている。

Sir James Young Simpson（以下シンプソン）が初めてクロロホルム麻酔を使用した記録簿や、エジンバラ生まれのアレキサンダー・モンロー二世が、1783年モンロー孔の存在を記載した書籍「Observations on the Structure and Functions of the Nervous System」も閲覧できる。モンロー家は3代126年間エジンバラの解剖学講座を主催したが、初代と二代は神経解剖学に大いに貢献した。モンロー一世はライデンのブールハーフェの弟子であり、神経解剖の研究を始めた。その業績は息子のアレキサンダー・モンロー二世の多くの出版物の中にまとめられている。モンロー孔は二世にちなんで名がつけられたが、それ以前にダ・ヴィンチやベレンガリウスによって図解され、記載されている。モンロー自身は彼以前の他の人々の貢献を認識していたので、この発見のプライオリティは主張しなかった。ちなみに同じ Queen Street には、麻酔医シンプソンの家が大変小規模であるが博物館として公開されている。



エジンバラ王立外科医ホール



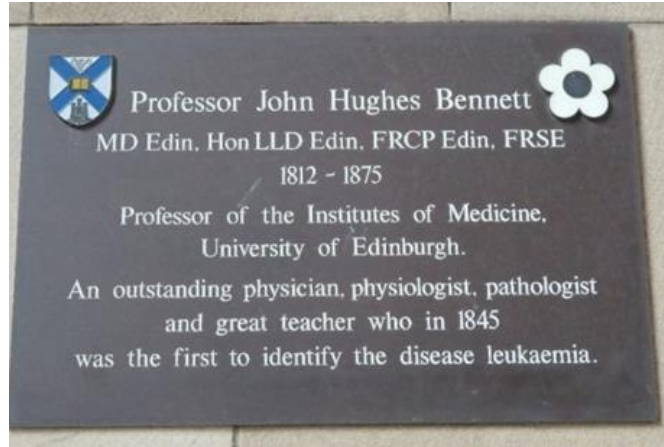
外科医協会前モニュメント



旧医学部本館正面



旧医学部本館玄関ホールにある著名人のプレート



シンプソン（左図上）とリスター（左図下）の記念碑、旧医学部本館中庭のジョン・ヒューズ・ベネット顕彰碑（右）



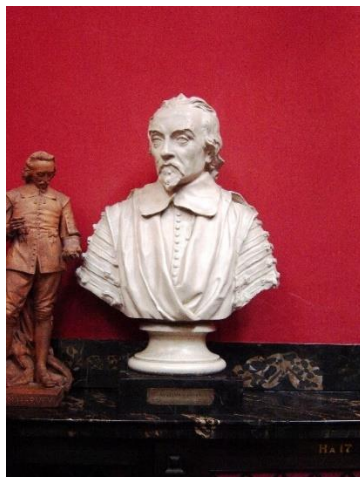
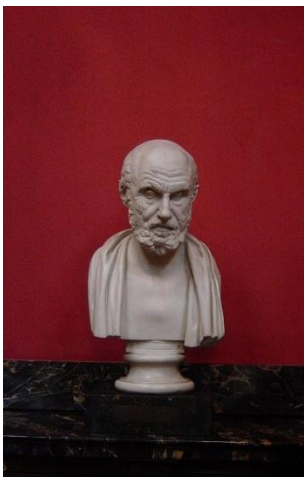
旧医学部本館中庭のリンダ顕彰碑



王立内科医協会



王立内科医協会内ホール（左）と図書館（右）



館内のヒポクラテス像（左）、ハーヴェイ像（右）



エジンバラ大学小児病院(Royal Hospital for Sick Children)

バークレー

天然痘を世界から根絶させた男として名を残すジェンナーはイングランド中西部のバークレーで 1749 年に教区牧師の子として生まれた（英国ではジェナーと言っているが、本書では日本での通称ジェンナーと記す）。どこまでも丘の連なるこの一帯は、乳牛の放牧が盛んな酪農地帯である。12 歳の時ブリストルに近いソドバリーの開業医ダニエル・ラドローに弟子入りし、9 年間医学を学んだ。その際診察に来た農村の女性が、「牛痘にかかったので天然痘にはかからない」と言った言葉を心にとどめた。博物学が大好きで、その才能を活かすため 1770 年ロンドンにて解剖医ジョン・ハンターのもとで住み込み修業し、人体のはたらきつまりは生理機能を学んだ。牛痘について何度もハンターに質問した際、ハンターが述べた「あまり考えることはやめて、とにかく実験してみることだ、辛抱強く、そして正確に」は有名である。

1773 年、ジェンナーは故郷バークレーに帰り開業した。種痘を発明するまでの 25 年間、この地方で鳥類や哺乳類にも興味をもって研究し、論文も書いている。バークレーは戸数 100 程度の寒村である。ジェンナーの診療所は夏期のみ博物館として公開されている。1796 年、牛痘に感染した牛の乳絞りサラ・メルネスの膿を少年ジェームズ・フィップスへ植えつけた。感染を確認後治療したが、この後少年は天然痘を接種しても感染しなかった。これが世界最初の牛痘種痘例であった。博物館の外は広い庭園があり、その隅に“The Temple of Vaccinia”（一般的にはジェンナーの小屋：Jenner’s hut）がある。貧困者に無料で種痘を施した小屋である。



ジェンナー博物館



“The Temple of Vaccinia”



セント・メアリー教会、主祭壇左手の床にジェンナー家の墓がある

リーズ

リーズ大学の医学教育には、教育病院である Leeds General Infirmary (LGI)ならびに St. James University Hospital(SJUH)がある。後者のキャンパス内には、医学教育に活用されている Thackray Medical Museum がある。博物館は 1902 年リーズに設立された医療サービス会社チャス・F・サックレイ株式会社が起源である。会社の保存資料として医療機器や書籍、文献などのコレクションを所蔵していた。博物館の開館は 1997 年で、当時の SUJH キャンパス内のリーズユニオン会館に展示された。本博物館のホームページでは、「工業事業主のポール・サックレイと内科医のモンティ・ロゾウスキ教授の共同出資で設立された」とある。2019 年 5 月に改修のため閉館されたが、2021 年 5 月に再公開された。

館内は主にヴィクトリア朝以降の医学史関連が展示されている。特に印象的なのは、産業革命華やかかなりし中部イングランドでは、如何に劣悪な労働環境であり、成人の長時間労働に加え子どもの労働が日常茶飯事であったかを等身大のモデルで提示されている。日本の明治時代の殖産興業時代での労働哀史を思い起こさせる。当時は多くの労働者が狭い住居環境で生活し、上下水道が整備されておらず、ロンドン同様コレラなどが流行した。ばい煙などのため子どもの気道疾患の増加も多かった。産業革命時代の結核などの感染症の増加、貧富による捨て子や孤児院の増加、医療機関にかかれない状況など、国民皆保険

制度前の問題はその後日本と同様であることを想起させる。日本の国民にも知らせたい歴史である。一方、麻酔や外科手技など医療の進歩などが分かりやすく機械や器具の展示に沿って開示されている。医療機器会社として発展したので、館内には整形外科用補助具などが多く展示されていたのが印象に残っている。



Thackray Medical Musium 前景



博物館内整形外科用手術装具



博物館内 Broad Street Pump 展示パネル

フォークストン

ハーヴェイは1578年4月1日イギリス南部の港町フォークストンに生まれた。そこから歩いて5分ぐらいの所に、ドーバー海峡を見下ろす丘公園がある。その丘には、海岸を向いて立つハーヴェイの銅像がある。右手を左胸に当て、左手に心臓を持っている。1588年カンタベリーのキングス・グラマースクールに通い、ラテン語の読み書きを身につけ、古典ラテン語で流暢に弁論をこなせるようになった。ここを卒業した者でケント州出身者はケンブリッジ大学医学部のマシュー・バーカー奨学金を受け取れた。ハーヴェイは1593年に奨学金貸与者に選ばれ、ケンブリッジ大学のゴンビル・キーズ・カレッジに在籍し、6

年間授業料や食費などまったく不自由なく過ごせた。1597年 Bachelor of Arts(BA)を取得し、その後1598年秋にパドヴァ大学に入学した。

ハーヴェイは1602年4月25日医学・哲学博士の学位を得て、イングランドへ帰国した。当時カトリック教会はハーヴェイのようなプロテスタントには博士号は授与しなかったが、大学は正式な授与式とは別にシグムント伯の宮殿で授与式を行い、神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ2世ではなく伯爵の署名でハーヴェイに免状が与えられた。1602年に医学と哲学の学位をとり、帰国後ケンブリッジ大学でも学位を受けた。フォークストン図書館内の博物館には、ハーヴェイゆかりの展示物がある。



ハーヴェイ生誕の家



フォークストン図書館（博物館を兼ねる）



フォークストン図書館内ハーヴェイ胸像（左）、「海を眺める」ハーヴェイ像（右）

カンタベリー

カンタベリーには英国で最も古いカンタベリー大聖堂が6世紀終わりころに建てられ、その関連で市内には歴史的なホスピタルの遺構が残されている。博物館として公開されて

いる一つが、カンタベリー巡礼者ホスピタル（正式名は、The Cantabury Pilgrims Hospital of Saint Thomas）である。入り口奥の丸天井の半地下室は、巡礼者宿泊用の大部屋であり、50人ほどを収容した。2階には食堂があり、巡礼者らに食事を提供した。その南にはカンタベリー歴史博物館がある。この救貧院は13世紀に創設された。その南向かいには、メイナルド救貧院(Maynard's Spital)がある。メイナルドは1317年に信者仲間の困窮した老人のために、この救貧院を創設した。約20戸からなる平屋の長屋で、カンタベリー市参事会会員で、この救貧院の長であったジョセフ・コルフにより、1617年に改修された。



キングス・グラマースクール校門（左）、カンタベリー巡礼者ホスピタル(Pilgrim Hospital)正面（右）



旧貧乏な聖職者のホスピタル（現カンタベリー歴史博物館）（左）、メイナルド救貧院（右）



ジョセフ・コルフ顕彰記念碑

2. イタリア

イタリアの医学の歴史への貢献は、古代ローマ時代の治療医学とルネサンスの解剖学、19世紀以後の近代医学に分けられる。医学史関連で訪れたい博物館は多々ある。

ローマ

ローマ人は道路が国土の動脈と考え、2300年も昔からローマを中心とする道路網の建設に努めた。その中で最も古いのが via Salaria (塩街道) である。街道の起点は Corso d'italia の Piazza fiume のすぐそばにある。各街道には多くの門があるが、その一つにヤーヌスの四面門がある。大理石の大きな門で、有名な「真実の口」のある S.Maria della Cosmedian 教会のそばにある。ローマ神話のヤーヌスは頭の前と後ろの両面が顔であり、門の内外を見張る守り神となっている。門は入り口であり出口でもあるので、「初めと終わり」を意味する。英語の January は一年の最初の月として "Januarius" と名づけたことに由来する。イタリアを旅すると、各所にラテン由来の用語が英語に取り入れられていることに気づかされる。



ヤーヌス門

ローマ観光で多くの人を訪れるのがトレビ(Trevi)の泉である。Trevi とは三叉路の意であるが、確かに市内三方向からの道が合わさったところの広場にある。中央は海神ポセイドン、左は豊穡の女神デーメーテル、右は健康の女神で医神アスクレピオスの娘のヒュゲイアである。なお日本人にはあまり知られていないが、ローマ発祥の地であるカピトリーニの丘に、カピトリーニ美術館がある。ちなみに首都 capital の語源はラテン語 capitalis である（ラテン語 capus 「頭」から派生）。館内には有名なオオカミに育てられたロムルスとレムスの銅像があるが、アスクレピオスの立像やメビウス像もあり、医療関係者にも一見の価値ある美術館である。



トレビ(Trevi)の泉



カピトリーニ美術館内のアスクレピオス像（左）、メビウスの像（右）

バチカン広場から歩いて 5 分ほどの近くに、外見上古めかしく大きなサン・スピリト病院がある。かつてはベッド数が 2000 を超えたとされる。現在も救急を中心に病院として使われている。病院の奥には解剖学教室の建物があり、その 2 階に医学歴史博物館がある。収蔵物はももとはサンタンジェロ城に収められていたが、1911 年のイタリア共和国創立 15 年周年記念の際に、この病院に移動した。サンタンジェロ城(聖天使城)は、この病院の近くにあるテヴェレ川沿いの有名な城塞である。なお、サンタンジェロ城の名称は、590

年のローマでのペスト大流行の際に、時の法王グレゴリウス 1 世が、城の頂上で剣を鞘に収める大天使ミカエルをもってペスト流行の終焉を祈念したことに由来する。



サン・スピリト病院医学博物館 1 階の解剖学教室講堂と 2 階の博物館入口（左）、
サン・スピリト病院医学博物館内（右）

館内に入ると、まず広いホールがある。Alexandrine Hall と呼ばれ、「傷病者のための小さな病院」ともいわれる。このホールは、Aura Magna 大講堂として 1971 年より使われていて 200 席入る。このホールを含めて建物自体はもっと古い時代のものである。大講堂から 2 階へと導く階段には、医師たちの胸像があり、中央にはヒポクラテス像が置かれて講堂を睥睨している。また、コレクション展示はいくつかの部屋に分かれている。最初の部屋(Sala Flajani)は、ろう製の産科解剖モデルがぎっしりと展示され、解剖用具も収蔵されている。この部屋の中心に大変きれいな大きな円筒形の家具が置かれているが、これは cassapanca あるいは tempietto（小さな寺）と呼ばれる装置で、マラリアに処方されるキニーネを調合するためとされる。次の Capparoni の部屋は、20 世紀の Capparoni 教授の寄付によるコレクションで、ローマ時代、エトルリア時代の、供物として奉納された。また、ローマ時代、中世、ルネッサンス時代の一連の外科器具が展示され、薬を保存するためのガラス、陶器の容器のコレクションなども置かれている。



解剖臓器のワックスモデル（左）

骨格標本（右）



キニーネの調合装置



薬壺、ガラス器具のコレクション



外科器具のコレクション

次の大部屋は Carbonelli Hall で、外科器具のさまざまなコレクションが多数展示されている。ドリル、検鏡類、歯科の義歯まで展示されている。これらの器具をみると、現在使われているものと基本的には変わらない。17世紀から19世紀にかけてのさまざまなタイプの顕微鏡、麻酔器もあった。ホール中央には Sistine 病棟の木製の複製が置かれ、これは、サン・スピリト病院の初期のモデルである。壁には、博士号の終了証書、17世紀から現代までの医学的な絵、有名な医師の肖像画がかかっている。また、Giovanni Maria Lancisi とその後継者が、病院のスタッフの医学講義に用いた「移動できる演壇」がある。この部屋の奥には17世紀の薬局が再現されている。薬壺はどれもきれいな物で、当時薬は非常に高価で富裕層のものであったことがうかがえる。

薬局の横に、やはり17世紀の錬金術の部屋が再現されている。錬金術とは一般の物質を「完全な」物質に変化・精錬しようとする技術で、当時は医師と錬金術師を兼ねていることが多かった。ルネサンス期、16世紀の有名な医師パラケルススも錬金術師で、アリストテレスの4元素説を引き継ぎ、アラビアの3原質(硫黄、水銀、塩)の結合により、完全な物質であるアルカナ(エリクサー)が生成されるとした。現在では多くの間違った術であったが、副産物として近代化学への端緒となった。なお、この部屋の壁にローマの遺跡に

ある門の一部を模刻したものが再現されているが、本来、惑星記号として“金星”と“火星”を意味し、錬金術や化学の領域で“銅”と“鉄”の元素記号として用いられた。

博物館内には、16世紀のクルミ製の美しい伝統的な本棚があり、医療に関する書籍、パンフレット類、雑誌、印刷物が1万冊も収納されている。博物館見学の後、隣接した古い建物で病院としては使われていない館内をガードマンが案内してくれた。ローマに数ある美術館とまったく変わらない、内装が美しい立派な建物であった。この建物を出ると、道路沿の建物の壁の一部に、行き所のない乳児を受け取るルオータ、日本でいう「赤ちゃんポスト」があった。この病院が1200年頃に捨て子を救済するために教皇イノセント3世によって建てられたものであることの証左である。歴史的なものであり、現在は幸か不幸か使われていない。



医学講義用の演壇、移動用の車付き（左）、“Culla per la vita”(命のゆりかご)（右）

ローマ大学ローマ大学サピエンツァは、テルミニ駅から10分ほどの所にある。このキャンパス内に大学所属の医学史博物館がある。イタリアの医学教育では医学史は必修であり、ローマ大学医学史博物館には多くの展示品がある。



ローマ大学サピエンツァ正門



文学、哲学学部 (Faculta di Lettere e Filosofia) (左)、ローマ大学医学史博物館正面玄関 (右)

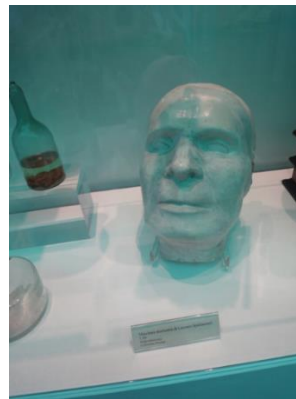
紀元前1世紀のデモクリトスの原子説に基づき、ビスニア(Bythnia)のアスクレピオス教団は、身体の穴(pore, イタリア語 poroi)を通して流入する原子説を提唱した。病気は、この小粒子が体内で不規則な運動をすることに起因するとした。この教団の説が、ヒポクラテス・ガレノスのミアズマ説に発展した。大航海時代には、戦争や航海などにより増幅された人類の交流増に伴い、感染症が蔓延した。ヨーロッパでは「新たな病」として梅毒があった。病名は、フラカストロ(Girolamo Fracastori 1478-1553)による詞“Syphilis sive de morbo gallico”からとられた。フラカストロはいくつかの病気は、直接、間接あるいは媒介物により移される小粒子が原因と唱えた。頭痛治療“guarigione della cefalea”としては、司祭が頭の上に装着した鉄製の冠から体内に「聖なる施し」“santo guaritore”がもたらされる装置が展示されている。近年の話題としては、R. Levi. Montalcini (1909-)が神経成長因子を S.N. Cohen と P.U. Angeletti との共同で、初めはセントルイス、その後ローマで分離し報告したことがパネルで示されている。神経細胞は分裂、分化し、成長因子、受容体、遺伝子発現調節因子を介して免疫細胞など種々の細胞とネットワークを形成する。この結果、分子・細胞レベルと個体機能を連関する研究へ導いた。



Fidene の少年、1995 年 Fidene にて埋葬された 29 体が見つかった。その 26 墓は、5 歳から 6 歳の少年で、頭蓋穿孔術を施されていたことが判明し、その後数週生存したことが確認された (左)、4 体液説の解説展示 (右)



頭痛治療用装着冠”Corona di imposizione”（左）、電気ショック治療（右）、電気ショック療法は、てんかんならびに実験てんかんの病態生理から発展した。



電気治療(electroterapia)装置（左）、Lazzaro Spallanzani のデスマスク（右）、長期の動物実験の一連の研究の後、チェルレッティ(U. Cerletti 1877-1963)が搬送された混迷患者にショック療法を実施した。その後いくつかのクリニックでうつ病や躁鬱病に有効性が示された。



精神神経診療棟(Clinica della Malattie e Mentali)



小児科診療棟（左）、小児科診療のローマでの創始者 Luigi Concetti（右）

パリのセーヌ川の中州 シテ島がパリ発祥の地であるのと同様に、ローマのテヴェレ川の中州ティベリーナ島 (Isola Tiberina) は、ローマ発祥の地である。紀元前3世紀、ローマは恐ろしい疫病に襲われ多くの市民が次々に感染して死亡した。伝説ではこの疫病はペストとされているが、当時のローマの医師たちの力ではどうにもできなかった。市民は神の力にすがる他なく、ギリシアの医師アポロンの神託を受けるため、使者をギリシアのデルフィに送った。そして、蛇の姿に変えたアスクレピオスをエビダウロスから船で連れてきたとされる。聖蛇はテヴェレ川の河口に着いてから、ローマ市民の大歓迎を受け、中洲の島であるティベリーナ島に上陸した。やがてアスクレピオスの診療のお陰で、ローマの疫病も収束した。ローマ人は、アスクレピオスの来訪を記念して、島に船の形をした神殿を291年建立し、エジプトのオベリスクをマストに見立てた。

キリスト教の普及に伴い神殿跡などは破壊、撤去されたため、神殿を偲ばせるメモリアルは乏しい。唯一島の護岸の石垣に破損が大きいのが、アスクレピオスの胸像と蛇が巻き付いたアスクレピオスの杖の痕跡が残っている。筆者は石壁に通じる階段を下り、アスクレピオス像を直に触れてきた。現在神殿跡には聖バルトロメオ教会がある。中にはアスクレピオス神殿当時治療のひとつであった、沐浴のための聖なる井戸がある。教会向かいにはファテベネフラッテリ修道会病院がある。1584年に聖ジョヴァンニ（聖ヨハネ）修道会により、サン・ジョヴァンニ・カリビータ・ファテベネフラッテリ病院 (Ospedale San Giovanni Calibita Fatebenefratelli) が建てられた。最初は島の中央部分にだけこぢんまりと建てられ、貧者、乞食、巡礼者、病人を収容し世話をしたとされる。現在病院は島全体の3分の2を占めるまでに拡張された大きな病院である。病院に入ると立派な中庭があり、周囲は修道院風の建築であり内部は古代から中世にかけての芸術品が飾られている。なお市内のボルゲーゼ公園内には、池の奥にアスクレピオス像がある。



アスクレピオスの胸像と蛇が巻き付いたアスクレピオスの杖（左）、サン・ジョヴァンニ・カリビータ・ファーテベネフラテッリ病院（右）



病院内中庭



院内祭壇



聖バルトロメオ教会（左）と教会内の聖なる井戸（右）





ボルゲーゼ公園内のアスクレピオス像

パドヴァ

パドヴァ大学は、駅から Popolo 通りを南にまっすぐ歩いて 10 分ぐらいのところにある。パドヴァは古い城壁に囲まれた美しい城郭都市であるが、中世には学術都市としてもさかえた。パドヴァ大学の封印には「すべての人にパドヴァの自由 *universa universis patavia libertas*」と刻まれている。大学前の旅籠 Albergo del Bo にちなみ、大学本部は Il Bo（牡牛館）と呼ばれる。1222 年最古の医科大学ボローニャから逃れてきた学生や教師たちが自ら築き上げた。ダンテ、ガリレオ、コペルニクス、ウィリアム・ハーヴェ、コペルニクスらもこの大学で学んだ。中世まで命脈を保ってきたガレノス由来の古典医学理論から脱皮し、自分の目で見て自分の手でやってみる医学教育が実施されていた。アリストテレスの論理学（論証法）を改編し、構成成分から原因の論理的分析を解剖学にも取り入れた。その結果見出された原因が事実と合うか確かめる手法は、現代の「仮説検証法」の魁と言える。

その代表が「解剖学の祖」Andreas Vesalius（以下ベザリウス）である。それまでは古典的教科書を医学生に解説しつつ、教授の指示に従い身分の低い助手が解剖（腑分け）を実施していた。ルネッサンス以降の医学教育は神が作りたもうた人体を、医学者自らが精査し、古典的教科書の誤りを正していった。大学内に解剖示説講堂 Il Teatro Anatomico ができた頃には、医学生の面前でベザリウス自ら人体解剖を行った。円形、すり鉢状の急な階段教室は Verona の円形劇場をまねて作ったとされる。中世時代は人体解剖を教会は禁止していたので、秘密で実施された。階段教室の部屋は秘密の構造があった。当時建物は水路につながっており、夜間ひそかに船で運ばれた遺体は床下に運ばれ、床上に設けられた板囲いで隠され、解剖室の床に設けられた隠し戸から遺体をつるしあげた。解剖台は回転するようになっており、官憲が急に現れた際には裏側に張り付けてあった豚の解剖体と入れ替えていた。

14 世紀広間という内科外科教授室には、肖像画が 10 数枚かけられている。「疾病の局在と原因の剖検による研究」なる大著で名高い Giovanni Battista Morgagni（以下モルガーニ）をはじめ、「人体構造論」のベザリウス、卵管を記載したファロッピオ、静脈弁について

書いたファブリチウスら有名な教授連の肖像画である。この部屋の一隅には8つの頭蓋骨がある。中でも有名なのは、「静的状態の医学」なる著書があるサントリオ・サントリーニのものである。解剖学者のガブリエレ・ファロッピオはフェラーラ大学・ピサ大学教授を経てパドヴァ大学の解剖学教授に就任した。1561年『解剖学観察 Observaciones anatomicae』を出版。卵管、側頭骨顔面神経管に名前を残した。ヴェサリウスを信奉し、ヴェサリウス、ユースタキと並び、解剖学3雄のひとりに数えられる。

パドヴァ大学の大講堂（コロナード）も一見の価値がある。かつてこの大学で学んだ各国の学生が残した記念盾（ステマータ, coat of arms）が壁にずらりと並べられている。ステマータの原意は「武器の衣」であり、むかし十字軍の兵士が剣や武器を紋章が描かれた上衣で覆ったことに由来している。この中には、ハーヴェイの名盾もある。大講堂の入口のSala del Quaranta（40人の部屋）には、ガリレオの教壇がある。若き頃医学をピサ大学で学んだが、途中で進路変更し1592年から18年間パドヴァ大学で数学を教授した。この部屋の周囲の壁には外国からの留学生40名の等身大の肖像画が並べられており、先のハーヴェイの像もある。

当時の医学博士号は、医学部の卒業証書と同一の資格であり、ヨーロッパで開業して診療してもよいとする大学発行の医師免許証であった。ハーヴェイもパドヴァ大学を卒業して1602年イングランドに戻り、ケンブリッジ大学でも医学博士号を取得後開業した。現在ドクターには医師と博士の両方の意味があるが、中世大学の医学博士号から由来しているのであろう。他には、オックスフォードでギリシア語を教え、ガレノスの著作のラテン語訳をした医師リナクル、デンマークのバルトリン、脾臓と膵管の見事な解剖図を描いたドイツのウィルスングらの肖像もある。



パドヴァ大学正面



パドヴァ大学 (IL Bo) の中庭回廊 (Cortile antico)



大講堂壁面の紋章



ガリレオの教壇（左）、ファブリチウス像（右）

ベネチア

ベネチアには医学史関連施設は多くない。サン・ジャコモ・デル・オーリオ教会の裏には、17世紀当時の医学校跡がある。大運河を下った河口付近に Santa Maria della Salute 教会があるが、“Salute”は「救済」の意である。ラテン語“salvare”からは、“salvage（海難救助）”，中米の国の“El Salvador”や梅毒薬の“Salvarsan”などが派生している。他に医学史的に特記すべき施設としては、サン・ロッコ同信会（Scuola Grande di San Rocco）がある。本来は伝染病患者に献身的な活動をした同心会の病院跡である。ベネチアには、トーマス・マンの「ヴェニスに死す」で名高いリド島やらい病者を救った聖者 Lazzaro の名を冠するサン・ラザロ島もある。



Corte de l'Anatomia（医学校跡の解剖教室）（左）、Ponte de L'Anatomia（解剖橋）（右）

カステリオーネ

赤十字記念博物館（正式名は International Museum of the Red Cross）は、1959年ソルフェリーノの戦いの100年記念として開館した。この戦いの際に用いられた建物ではないが、後に回復期患者のリハビリテーションの場として用いられ、第1次世界大戦の1918年春には、イタリア第5師団の司令官らが宿泊した。中には、アンリ・デュナンの肖像、患者輸送用車両、救急用品などの医療器具が展示されている。



赤十字記念博物館玄関（左）、救急搬送車（右）



人工呼吸器



赤十字記念碑

ボローニャ

ボローニャはローマ時代エミリア街道の要衝として栄え、現在はエミリア＝ロマーニャ州の州都として欧州の中で最も豊かな地域の一つである。食品産業が盛んで、パルミジャーノ・レッジャーノやバルサミコ酢、パルマハムやボローニャソーセージなどの産地である。駅から南下する *via dell'Indipendenza* 両脇は *portico* と呼ばれるアーケードが続いている。これは昔歩道にアーケードを作り、その上に部屋を増築して学生たちの下宿にした名残である。市庁舎があるマッジョレ広場には、ネプチューンの噴水があり、4人の海女セイレーンが水を吹き出すために乳房を抑えた像がある。この広場に面してグレゴリオ協会があり、マルピギーの墓がある。またマッジョレ広場近くのガルバーニ広場にはガルバーニ像があり、手に持っている本にはカエルが描出されている。

ボローニャ大学はヨーロッパ最古の大学で、1158年の創立とされる。法学部が最初にでき、その後間もなく医学部が創設され、広く欧州の学生が集まった。「神曲」の著者ダンテもこの大学で学んだ。日本では平安時代末期である。大学のもとになった *Universitas Scholarium* は、学生、研究者の同業者組合であり、教授も学長も学生によって選ばれた。モンディーノ・ルッツイー、マルチェロ・マルピギーら解剖学者が後世に名を残している。医学部では人体解剖が初めて行われ、1302年に実施された毒殺容疑者の法医学的剖検が記録として残されている。ボローニャは自由都市であり、教会の反対をものともせず人体解剖を実施した。

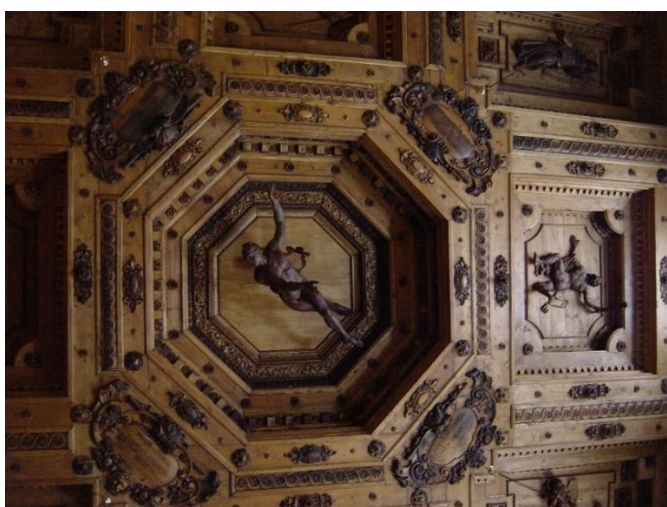
マッジョレ広場に面した旧大学本部アルキジナーズ館2階には、解剖学講堂がある。四角い教室の中央に解剖台があり、周囲を学生が立ったまま見学する席が三重に取り巻いている。解剖台の正面少し高いところに教授用の教壇がある。周囲の壁面には、ヒポクラテス、ガレノス、ベザリウス、モンディーノ、アランチオなど有名な解剖学者の像が飾られている。タリャコッティは鼻の形成手術を行った外科医である。マルピギー小体（腎小体）、マルピギー小節（脾小体）や表皮のマルピギー層などになお残すマルピギー（本名

Marcello Malpighi) も当地ボローニャ大学で学んだ。顕微鏡解剖学の創設者であり、ハーヴェイが明らかにできなかった毛細血管を通して動脈から静脈への血液循環を証明した。マルピギーは1691年にはローマ法王イノセント7世の侍医となり、ローマで余生を送った。マルピギーの遺体はボローニャの Santi Gregorio e Siro の教会に埋葬されている。

彼のボローニャ大学での弟子に、Antonio Maria Valsalva (以下ヴァルサルヴァ) がいる。耳を外耳、中耳、内耳に分け、最後部を迷路と呼んだのはヴァルサルヴァである。ユースタキに敬意を表して、耳管に”Eustachian”なる名称を冠した。ヴァルサルヴァ門下にジョランニ・モルガーニがいる。ボローニャで学んだ後29歳の若さでパドヴァ大学教授に招かれ、病理学と臨床医学を結び付けた。



旧ボローニャ大学本部 アルキジンナージ館 (左)、解剖学示説教室内解剖台 (右)



解剖学示説教室天井



ガレノス



タリヤコッツィ、左手には鼻を持っている



構内廊下壁面のヴァルサルヴァ像（左）、アルキジンナージ館内スターバト・マーテルの間（右）

解剖学教室があるアルキジンナージ館に面したガルバーニ広場には、電気生理学のガルバーニの像が立っている。



ガルバーニ像、手に持っている本にはカエルが描出

フィレンツェ

フィレンツェは美術家ならずとも有名なウフィッツィ美術館を想起するが、医学史的にも見どころ多き地である。まずはフィレンツェ大学付属のラ・スペコーラがある。ラファエロの「小椅子の聖母」があるピッティ宮のすぐそばにあるが、訪問する者はほぼいない。入館受付から展示室に入ると、鳥や哺乳類の剥製標本が数多く展示されている。この博物館の正式名は王立自然史博物館と称され、18世紀にハプスブルク家出身のトスカーナ公がイタリア国内の動物の剥製や医学標本を集めた。ラ・スペコーラとは「観測」の意であり、以前は天体観測所もおかれていたことに由来する。なおガリレオが用いた天体望遠鏡など当時の天体観測の展示品は、現在ガリレオ博物館にある。

多くの剥製展示品が各部屋に供覧されているが、その順路最終にお目当ての人体蠟人形室がある。等身大の端正な体つきの女性裸像が横たわっている。標本模型は解剖学の教科書そのままに精巧である。次の部屋には、生々しい全身「キン肉マン」の蠟人形がある。隣室は局所解剖の標本が数多く展示されているが、アートの先進国イタリアならではの。ちなみにアート“art”の語源は、ラテン語“ars”で「技術」の意である。ウィーンには医学史博物館があるが、その蠟人形もイタリアの職人が作成した。



フィレンツェ大学動物学博物館“La Specola”内のワックスモデル

フィレンツェには他にも数多く医学史関連施設がある。その一つに Chiesa di Santa Maria degli Innocenti 附属の捨て子養育院がある。聖ベルナルディーの説教から想像できるように、捨て子は15世紀フィレンツェでの悲惨な現実の一つだった。正面一階には大きなアーチと円柱をもった長い回廊があり、各円柱の上部にはスワドル(swaddling)を巻かれた幼児のテラコッタがついている。スワドルとは赤子の形をよくし傷害から守るためと称し体に包帯を巻く習慣で、産婦人科学の元祖エフェソスのソラヌス(Soranus)が提唱し、ローマ時代のガレヌスも推奨した。この悪習は中世を通じて広く行われ、19世紀初めまで続いたという。

捨て子養育院の一番左の奥には、母親が顔を見られずにこどもを捨てられた回転木戸（ルオータ）の跡が残っている（実際は回転式ではなかったとされている）。日本でも「赤ちゃんポスト」が以前話題となったが、その元祖である。当初は柱廊右わきの窓の下に盥（ピーラ）を置き、24時間体制で赤子の泣き声に聞き耳を立てていたとされる。開所は1445年で、最初の1年間で90人の捨て子を受け入れた。1660年にこれに代わってルオータが柱廊左端に据えられた。最終的には1875年に窓は閉じられ、その時に有名な歴史家イシドーロ・デル・ルンゴが書いた銘板が設置された。文面には、「この場所で4世紀にわたってインノチェンティ（罪なき幼子・捨て子）を受け入れてきた」と記されている。当時のフレスコ画がポストを囲むように残っている。

現在養育院は絵画館(Galleria dello Spedale degli innocenti)となっている。“innocenti”とはイタリア語で「捨て子」の意である。館内には聖書のテーマである「幼児を守る聖母マリア」などのフレスコ画も展示されている。養育院はこれら聖書の絵解きとなる聖画・聖像を必要とし、一流芸術家の絵画や彫刻が寄進された。15世紀末には市内で最も重要な記念碑的美術の殿堂となっていた。館内の片隅には、捨てる際に赤子と将来再開する時の目印に母親がつけたりボンやコインを半分に割ったものなども展示されている。18世紀後半には天然痘が猖獗し、1756年には実験的なワクチン接種が行われた。1822年には養育院内にはワクチン研究所が建設され、保健衛生にも寄与してきた。この養育院奥には「インノチェンティ」なる名のユニセフの研究所もおかれ、こどもの支援活動を現在もしている。



捨て子養育院



捨て子養育院研究所表札（左）、捨て子養育院の元祖「赤ちゃんポスト」ルオータ（右）

フィレンツェにはガリレオ所縁の施設がある。ガリレオが10歳のときにピサからフィレンツェへ移った。父親は生活の安定と社会的名声のある医師にするため、1581年医学部進学を希望する学生としてピサ大学学芸学部（Facoltà degli artisti）に入学させた。しかしガリレオは在学2年目の1583年数学者のオステリリオ・リッチの講義を聴講し、完全に魅せられてしまった。彼の数学講義は、ルネサンス期の芸術や技術の数学的基礎を明らかにするもので、芸術家・技術家と科学者との交流をはかるものであった。すなわち透視画法、解剖学、力学、建築学、道路、運河、橋梁の建設法など実践の理論的数学的研究であった。ガリレオは現実の問題に密接に結びついた物理的な数学に心を捉えられその後の生涯をたどることになる。

パドヴァ時代には「機械学」などを著していたが、その後1604年射手座に新星が出現したことで天文学の問題に入っていく、それが多くの人びとと論争する端緒となった。その後ガリレオの天文学総決算ともいえるべき「世界系対話」を完成させ、仮説としながらもコペルニクス説を紹介した。彼なりに注意を払った著書であったが、地動説を世の人びとに論じ教えたことには違いなく、法王庁の命令を無視したことから宗教裁判に付されてしまった。1633年6月2日ガリレオは言われるがままに、「断罪された地動説を取り扱い、有利な根拠をあげて書にした」罪を認め、異端誓絶を行った。その後釈放され、シエナに一時身柄をあずけられたが、トスカーナ大使のニコリーノの斡旋で同年12月アルチェトリの別荘に戻った。1641年11月には発熱や激しい腎臓の痛みなどで病に伏せ、翌年1月9日鬼籍に入った。享年78歳。ガリレオの遺体はサンタ・クロチェ教会の隅に横たえられたただけだったが、1783年になり立派な墓が建造された。市内の科学史博物館には彼の右手の中指がガラス容器に入っている。またガリレオが晩年を過ごした住まいもある。



アルチェトリのガリレオ別荘壁にあるガリレオ像



ガリレオ博物館（左）

ガリレオ博物館にあるガリレオの指（右）



ガリレオ博物館内のガリレオの望遠鏡（左）、サンタ・クロッチェ教会内ガリレオの墓（右）

なおミケランジェロは、芸術の現実主義的基礎を確立するため人体解剖を行った。場所は Santa Maria Nova 病院隣の教会地下室で、「ミケランジェロのバスタブ」と称する部屋が残されている。

パヴィア

パヴィアはミラノの南 35 km の程の所にあり、列車なら 30 分弱で行ける。現在は農業と軽工業の静かな町だが、ロンゴバルド王国およびカロリング王朝時代は首都がおかれ、ミラノをも凌いだと地である。中世にはロンバルディア地方の文化の中心地であり、1361 年創立されたパヴィア大学がある。パヴィア駅から徒歩で 10 分ぐらいの町の中心部に建てられ、中世の大学と言った風格の建物である。レオナルド・ダ・ヴィンチが 1490 年パヴィアに滞在した際大学のマルカントニオ・デラ・トーレと親しくなり、初めて人体解剖を行った。その際解剖学と生理学の本を作成準備したが、マルカントニオの死により完成をみず、レオナルドの美しい図入りのノートが残された。18 世紀末から 1934 年までは、San Matteo 病院と医学部の施設として使用された。

大学に入ると、中にはミラノの北コモ湖付近で生誕したヴォルタの銅像がある。中を巡りながら回廊の端に博物館がある。館内の展示室は、1783 年当時解剖学、外科学の教授であった Antonio Scarpa (1747-1832、以下スカルパ) の研究室だった。彼は外科医であり解剖学者だったが、1794 年 “Tablulae Neurologicae” を著して、神経解剖学に多くの貢献をした。内部は 3 つにわかれているが、その一つスカルパの部屋には、彼が作成した嗅覚および鼻口蓋神経標本や前庭神経節や聴覚器に関する業績資料が展示されている。彼の出版物は独創的で、ペン書きの素描による比類ない図解があり、広く模写された。前庭神経節は別名スカルパ神経節と称される。内耳の球形嚢と卵形嚢について報告し、骨迷路と膜迷路の中の液体は perilymph と endolymph であることを明らかにした。なおこの部屋の入口の戸の上に、スカルパの生首アルコール標本がある。筆者が訪問した際は閉じられていたが、案内してくれた係員が開いて見せてくれた。

この博物館には Camillo Golgi (以下ゴルジ) の部屋もあり、部屋の奥には彼が授与されたノーベル紀章 (1906 年)、顕微鏡に加え、彼が開発したゴルジ染色に染まった神経細胞とゴルジ装置の蛍光顕微鏡写真などが展示されている。腎臓に関する発生やマラリア研究の論文なども見られる。彼の弟子であり微生物学者で狂犬病のネグリ小体の発見者アデルキ・ネグリの遺品や標本も展示されている。筆者は知らなかったが、帝王切開術式開発に努めた産科医エドアルド・ポッロの業績なども紹介されている。ヘルニア手術の原点「バッシーニ法」に名を残すバッシーニもここで修業した。彼は従軍した際受けた鼠径部の銃創をパドヴァ大学外科教授ポルタに直してもらったことで弟子となり、その後手術の助手を務めながら鼠径部の局所解剖を極めた。思ってもいない所で医学知識の関連に気づかされることも、医学史を学ぶ楽しみである。



中庭のゴルジ石像



バヴィア大学博物館入口



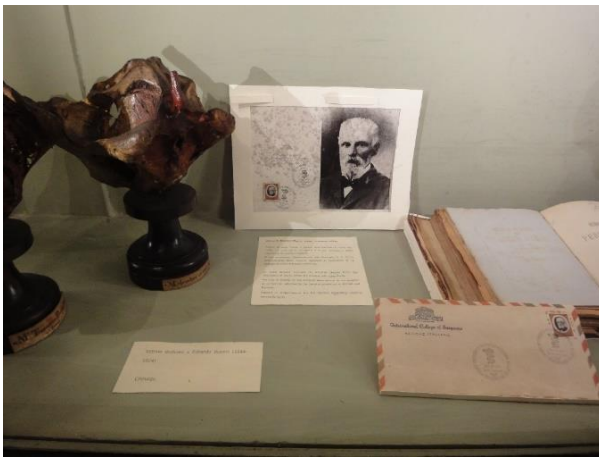
バヴィア大学博物館内



バヴィア大学博物館内スカルパの部屋、スカルパの生首標本がドアの上にある



パヴィア大学博物館内ゴルジの部屋にあるノーベル賞紀章（左）、ゴルジの部屋にあるゴルジ染色関連業績資料（右）



エドアルド・バッシーニ業績



Adelchi Negri 業績

ジェノヴァ

ジェノヴァはミラノの南 145 km に位置する。筆者が訪問した際には、ミラノからジェノヴァまでの車窓はロンバルディア平原特有の霧につつまれ鬱然としていた。特に途中にあるパヴィアあたりは霧が深く、冬は自動車が通れなくなることも多い。ネルヴィの近代美術館はジェノヴァブリニョーレ駅から各駅列車で東に2つほど行った所にある。ネルヴィ駅前には椰子や棕櫚の木が繁、駅前から高台のバスステーションに続くメインストリートは、きれいな家々が建ち並んでいる。ここが保養地として有名な所だと実感される。ジェンナーの大理石像は、ネルヴィの近代美術館（Galleria d'Arte Moderna）に置かれている。この大理石像には、「ジェンナーが息子に種痘をしている像」と書かれている。ジェンナーが初めて牛痘接種したのは1796年、8歳のジェームス・フィップスである。日本ではジェンナーを崇めるあまり、自分の息子を種痘実験に使ったという美談を捏造した。むかし日本の修身の時間には、ジェンナーが我が子に接種をする場面の挿絵にこの像が示されてきた。

実際にはジェンナーはフィッパスへの接種7年前の1789年に、自分の子エドワード（10ヵ月）と2人の少女の腕に当時“豚痘”と呼ばれた小痘瘡ウイルス（=variola minor virus）を接種している。その後この3人に対し、天然痘（=variola major virus）の膿をうえつけたが痘瘡ができず天然痘を予防できた。なおややこしい話であるが、当時“豚痘”と称した病気は豚とは関係なく、人の“小痘瘡”すなわち天然痘の軽症型であることが判明している。加藤四郎先生の著書では、ジェンナーは長男エドワードに引き続き、次男ロバートや娘キャサリンにも天然痘をうえている（トルコ式天然痘接種）。わが子に接種するジェンナーの顔は真剣で、ランセットを持つ右手の握りはリアルであり、見る者に訴えるものがある。



モンテヴェルディ作「わが子に種痘を施すジェンナー像」（左）、近代美術館外観（右）

ミラノ

ミラノはイタリアの経済・産業の中心であるとともに、デザインやファッションで有名である。ただし歴史的には絶えず科学技術を発信する地である。ミラノが誇る理工学博物館であるレオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学博物館を訪れると、そのことが痛感される。レオナルド・ダ・ヴィンチの生誕500年を記念して、1953年2月に創立された。万能の天才と言われたレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図譜、手稿のヘリコプターや戦車スケッチなど彼の仕事が紹介されている。医学史的には種々臓器の解剖図譜が有名だが、特に脳の矢状断や水平断の図からは、単なる外観ではなく解剖学者の目で洞察した彼の姿勢が垣間見える。彼以外では、電池の発明者アレッシンドロ・ヴォルタ、無線通信のパイオニアグリエルモ・マルコーニ、現代の原子物理学者エンリコ・フェルミらにいたるまで、多くの資料や業績が展示されている。筆者が特に興味深かった展示として、「電話より前にファックスを発明したイタリア人を知っていますか？」なる案内表示があり、関連機材が展示

されていたことである。博物館の元の建物は 16 世紀に建てられた修道院であり、館内の中庭に面した回廊はその面影を残している。



レオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学博物館正面



博物館内レオナルドの解剖図を展示する廊下（左）、回廊と中庭（右）

なおミラノのデュオモ近くにサン・ゴットアルド・イン・コルテ教会がある。現在は王宮と称される公爵宮殿の当時の主だったミラノ公爵アッツォーネ・ヴィスコンティの個人礼拝堂として 1330 年にできた。痛風に罹患していた君主が、痛風患者の守護聖人ゴットアルドの名を冠して教会になったのが 1336 年である。教会鐘楼の頂上には、天使の像がある。ミラノ市内には、旧マッジョレ病院跡や梅毒患者など感染者を収容するラザレットもある。



サン・ゴットアルド・イン・コルテ教会入口（左）、サン・ゴットアルド・イン・コルテ教会鐘楼（右）



旧マッジョレ病院外観（左）と中庭（右）



市内の旧ラザレット中央にあった S. Carlo al Lazzaretto 教会

モンテ・カッシーノ

ローマからナポリへの高速道路からは、遠くに笠松の並木道の旧街道が見られ、往時をしのぶことができる。529年頃、モンテ・カッシーノ(Monte Cassino)にベネディクト会の修道院が築かれた。古代から中世を通じてヨーロッパの学芸の中心という重責を担っていた。戦乱の中で度々破壊されたが、第二次世界大戦時は連合国軍と枢軸国軍とのイタリア

戦線の激戦地となり、米軍の爆撃で破壊された。この戦線で、米陸軍の日本人二世部隊が、甚大な被害を出しながら活躍したことが有名になり、戦後アメリカにおける日系アメリカ人の地位向上に貢献したという。



モンテ・カッシーノ(MonteCassino)修道院

ナポリ

社会の底辺で抑圧され続けた生活をしてきたナポリ人の気質、楽をして収入を求めようとする仕事ぶり、他人の物は我が物という生活態度、陽気で気さくでおおらかな気質が育まれたとされる。ナポリ市内には、中世主に梅毒患者の収容のため不治の病人の病院(Ospedaliero S.M.d.P Incurabili)が築かれた。1527年に開設された病院で、当時は梅毒に加え、結核など不治の病を小児も含め診ていたのが名前の由来である。現在はsclerodermaでは教育病院としても機能しているそうだが、外観の古さからは建物全体がアンティークと言った感がある。現在は何と救急も行っており、地域の中規模総合病院として機能している。

ナポリ市内には、見るべき博物館や美術館も数多くある。ナポリ考古学博物館にはアレキサンダー大王のモザイクがある。教科書では知っていたが、実際に予備知識なく見つけた体験は望外の喜びであった。この博物館には、2体のアスクレピオス像がある。カポディモンテ国立美術館には、ピーテル・ブリューゲルの「盲人の比喻」がある。実物は比較的大きな絵であり、眼球が陥没した盲人が実にリアルに描かれている。「先が見通せない」と危うい」ことを物語っているのだろうが、当時の「馬鹿の壁」の集団肖像画とでも言うべきであろう。市内にはピオ・モンテ・デラ・ミゼルコルディア教会がある。ここは1601年に建てられたバロック式教会であるが、現在は美術館として使用されている。主祭壇の宗教画『慈悲の7つの行い』が圧巻で、17世紀のバロック画家ミケランジェロ・カラヴァッジョの代表作に入れられている。



不治の病人の病院正面（左）と病院入口（Presidio Ospedalero S.M.d.P.Incurabili）（右）



ナポリ考古学博物館のアスクレピオス像(Anzio type)（左）、外科器具（右）

ポンペイ

ポンペイはナポリとサレルノの間にある。ポンペイ遺跡には、「外科医の家」がある。古代ポンペイ市街の北西端にある大きな診療所兼居宅跡で、病室を備えていた。ここから外科器具が発掘され、ナポリ考古学博物館に展示されている。



ポンペイ遺跡の外科医の家(Casa del chirurgo)

サレルノ

ビザンチンやイスラムなど東方から医学の知識、技術が伝えられたので、東方の窓口である南イタリアのサレルノに医学校が生まれたのは自然の成り行きではある。南部イタリアの西海岸に面する風光明媚の町サレルノには、以前から古代ギリシア・ローマ時代の医学が残っており、9世紀には早くも医学の中心地であった。ボローニャ、パドヴァ、モンペリエなどヨーロッパ最古の大学群が12世紀に創設されるまで、サレルノ医学校の栄光は続いた。11世紀にサレルノの修道士でアフリカ出身のコンスタンティヌス(1020-1087)が、最初のイスラム医学の翻訳者として重要な役割を果たした。サレルノ在住の俗人医師の協会コレギウム・ヒポクラテイクムを基礎として興った。ユダヤ人、ギリシア人、アラビア人、ラテン人の4医学教師が創設者で、それぞれがその同郷人に教えたとの伝承がある。ギリシア医学だけではなく、アラビア医学からも影響を受けており、実際イスラム圏のチュニジアとは近接した距離である。

アラブやペルシャの医学文献がラテン語に訳され、欧州諸国に伝えられた。1213年には大学に昇格し、サレルノは「ヒポクラテスの都」と尊称された。1811年にナポレオンにより大学が廃校となった。「12世紀には最盛期を迎えたが、15世紀には衰え始め、ナポレオン1世により1811年廃校となり、今では痕跡すら残っていない」と藤田尚男著「人体解剖のルネサンス：平凡社」にある。玄関脇のプレートには、1811年の日付のある記念プレートが張ってある。市内の医学博物館は、元教会であった所を医学展示用に改装した所であり、医学校の跡地とは関係ない。また他にもロベルト・パピ博物館 Collezione de Storia della Medicina e dello Strumentario Chirurgic なる建物もある。

現在は、地元の間でもサレルノ医学校跡は知られていない。筆者が住人何人か問い合わせ、最後に雑貨屋の主人が教えてくれた建物があつた。Largo Scuola Salernitana に面したこじんまりした建物で、現在の養老院（イタリア語で casa di riposo）として使用されている。この一帯は大聖堂もそばにある旧市街であり、剥がれたペンキや修復されない壁などが見られる住宅地でさびれた場所であつた。訪れた Largo scuola salernitana は、インターネットで検索すると“Largo Scuola Medica Salernitana”として紹介されている。知人の話では、当時サレルノには学校とされるのは医学校しかなかったため、“medica”の形容詞は不要であつたためと考えられるとのことである。また、「初めての学校の建物がどれで、どこにあつたか誰も知らず、時間がたつにつれて建物は変わった」と記載されている。

あるインターネット報告によると、「サレルノのいくつかの建物が医学の学校の建物になった。中で現在の Largo scuola medica salernitana という広場にある建物もあつた。そこで広場に名前を付けた。時に司祭の家も医学の学校の場所になり、例えば 1606 年にメテッログリッロという司祭の家が使われた」とある。学校のあつた場所のリストとして、「la reggia di Arechi o le sue adiacenze (Arechi 王宮あるいはその近辺)、la Cappella di S. Caterina nel Duomo, ossia le odierne Sala San Tommaso e Sala San Lazzaro (大聖堂内部の聖カテリーナ礼拝堂、あるいは現在のサントンマーゾの部屋とサンラッザーロの部屋)、

Palazzo dell'Antica Pretura (昔の法務宮裁判所の建物)、alcune aule del Seminario Arcivescovile (大司教神学校のいくつかの部屋)、alcune aule del Convitto Nazionale Tasso (国立タッソ寄宿学校のいくつかの教室)、la chiesa di S. Pietro a Corte (サン・ピエトロ・ア・コルテ教会)」などをあげられている。いずれにしる始めに開設されたサレルノ医学校の場所は歴史の闇の中であり、一部だがそれを記念するプレートや地名が残されている。



サレルノ医学校博物館 (左)、サレルノ医学校博物館の表示プレート (右)

「サレルノ医学校はモンペリエ医学校とともに
 中世とルネサンス期において
 地中海へ、イタリアの、ヨーロッパの、そして全世界の大学のために
 生命の息吹きを与えん
 この医学校は実験に優れた自らの人文主義を誇りとし
 この地にその数かずの栄光の冠を垂らさん
 キリスト暦 1811 年
 尽きることなき炎のごとく
 この医学校の思想が
 栄えある記憶されるべきこれらの文章に永遠に生き続かんことを
 主宰者 サレルノ市および第 28 回解剖学イタリア会議
 モンペリエーサレルノ姉妹都市締結 7 周年を祝賀しつつ」
 (上記プレート 上村清雄訳)



正面の建物の玄関右上にプレートがあり（左）、Largo Scuola Salernitana と表記されている（右、プレート拡大）



ロベルト・パピ博物館 Collezione de Storia della Medicina e dello Strumentario Chirurgico

シチリア

シチリア最大の都市パレルモは、良港をもち、古代から交通と商業の中心地として栄えた。海岸に近い場所にシチリア州立美術館がある。15世紀に建てられたアバテッリス宮殿内に美術館があり、作者不詳のフレスコ画「死の勝利」がある。中世のペストの大流行で、多数の市民が死亡したことを描いた大きな絵である。



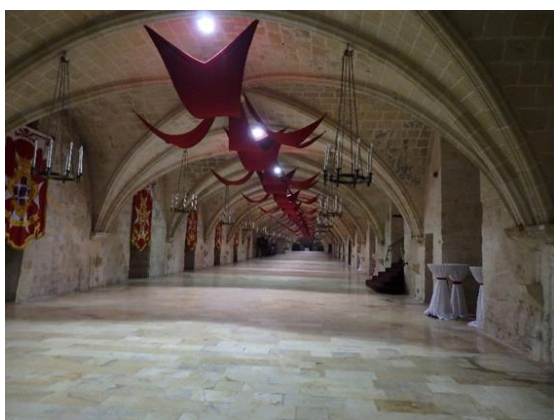
シチリア州立美術館の「死の勝利」

マルタ島

ヨハネ騎士団は 11 世紀にエルサレムで設立された。聖地への巡礼者を保護する病院活動を主としていたが、次第に対イスラムの軍事活動に重点が置かれた。エルサレム陥落後はキプロス島、ついでロードス島に拠点を移し、同島が 1522 年にオスマントルコにより陥落すると、1530 年からマルタ島を本拠とした。首都バレッタの一番奥まったところで、シベラス半島の先端の砦近くには当時「騎士団施療院」があった。700 人の病人を収容し、身分の上下にかかわりなく、パンと葡萄酒を供し、当時としては最高の医療水準を誇った。現在は地中海会議センターになっている。

先ず中に入ると長さ 150m を超える長い廊下に目を奪われた。両側が病室になっている。この病棟の構造は前に見学したロードス島の騎士団病棟に似ている。両側にある小部屋は水洗トイレになっており、これが約 7~8m 間隔に並んでいる。そこから地中海会議センターに入ると、それ程大きくはないが立派な階段式講堂がある。この一角に第二次世界大戦中戦火で被災したこの建物の写真が展示されているそこから階下に降りると、やはり長い病棟があり、天井には大きな赤い布製の 8 枚矢羽根紋章がずらりと並んで、これも壮観な眺めである。その病棟の一端に斜めに降りる細い廊下があるが、これは直接海岸から傷病兵を上病棟に運ぶための廊下で、この廊下を降りるとそこにも病棟があるが、精神科病室もあったという。

バレッタ市の海岸線道路をバスで走り、マヌエル島（現在は本島と橋で繋がっている）にあるラザレット（昔は聖ロクス伝染病院と呼ばれた）を遠望できる。このラザレットは 1534 年に造られ、ペストの 3 回の大流行時に使用され、後に検疫所を兼ねた。1893 年からハンセン病の隔離病棟を併設した。



聖ヨハネ騎士団施療院の 8 枚矢羽根紋章のある病棟（左）、マヌエル島にあるラザレットの遠景（右）

3. フランス

パリ

パリへは日本から直行便で12時間前後だが、深夜便もあり忙しい方でもパリ滞在を有効に使える。パリはフランスの首都だけあって、医学史施設は豊富である。現在パリには医学部が10あるが、市中の大病院で10の病院群を作り、それぞれに基礎の講堂や実習施設を作って分割したが、もとは一つであった。臨床教育は市中の大病院が主体であった。特にアンテルヌ (interne)制度は、選抜に合格した優秀な学生が学生時代から病棟配属になって専門医への道を歩み始め、将来の指導的地位を目指すエリート教育システムであった。基礎の部門は旧医学部館とサン・ペール通りの新医学部館が中心であった。

サン・ペール通りは以前シャリテ病院があった一帯となる。フランス王アンリ4世に嫁いだマリー・ド・メディシスの命で1601年建設された。「この病院は、慈愛の洗礼者ヨハネに捧げられたため、シャリテ病院とよばれる」と記されている。シャリテ病院は「パリ最高の病院」とされ、その後パリの「臨床医学教育の発祥地」となり、多数の医学生が育っている。特に有名なのは、グラーツのJosef Leopold Auenbrugger (以下アウエンブルガー)による打診法を世に知らしめたJean-Nicolas Corvisart-Desmarests (以下コルヴィサール)である。彼は鋭い観察眼の持ち主であり、シャーロックホームズのモデルであるエジンバラのジョセフ・ベル教授を思い起こさせる。18世紀以降ベッドサイドでの臨床教育はライデン、ゲッチンゲン、ウィーン、エジンバラなどで始められていたが、臨床教育の重要性を再認識させられる。

ここで学んだ内科医にRené-Théophile-Hyacinthe Laennec (以下ラエンネック)がいるが、彼はコルヴィサールに師事し、後に聴診器を開発した。

1935年にパリ大学に新医学部が建設されることになり、1608年から男性患者の外科治療を行っていたシャリテ病院(la Charité)自体は取り壊された。新医学部棟外壁には、1階上部にギリシア建築のメトープを思わせる種々の医学史関連の浮き彫りがある。聖王サン・ルイによるらい病を治す「王の手」など興味深い。シャリテ病院の一部であったサン・ピエール礼拝堂は現在も残されており、その玄関の上には蛇の杖を左手に、杯を右手に堂々と座すアスクレピオス像がある。

サン・ペール通りを北進し、サン・ジャコブ通りを右折すると、19番にはブローカーが、14番にはJoseph Jules Dejerine (以下デジャリン)が一時在住した家がある。デジャリンが住む前には、リヒャルト・ワグナーが居住した所で、それを記念プレートが壁に掲げられている。デジャリンはその後オーギュスタと結婚し、サン・ジェルマン通り168番に住んだが、それを示す史跡は残念ながらない。ちなみにオーギュスタのフルネームはAugusta Déjerine-Klumpkeであり、小児神経科医では知らねばならない「クルンプケの麻痺」の提唱者である。デジャリンは1901年51歳でパリ大学医学部教授(医学史)となり、1910年にはJean-Martin Charcot (以下シャルコー)が築いたサルペトリエール病院神経

病クリニックの第3代主任教授になった。

パリで有名なサン・ジェルマン大通り 217 番地にはシャルコー邸があった。シャルコーはサルペトリエール病院に赴任する前は、一般内科医としてリウマチ、痛風、感染症、肺疾患を研究していた。シャルコーの同期生である Alfred Vulpian (以下ヴェルピアン) も、時を同じくして同院の病理解剖学教室主任として赴任した。シャルコーは 1884 年からこちらに転居し、その後 1893 年亡くなるまでの終の棲家となった。建物の外壁のプレートには、"Fondatur L'Ecole de La Salpetriere"と記されている。



パリ大学新医学部正面（玄関の上には、UNIVERSITE DE PARIS FACULTE DE MEDICINE）と表記されている



聖王サン・ルイによるらい病を治す「王の手」、国王は十字軍の服装をしている（左）、サン・ピエール礼拝堂のアスクレピオス像（右）



サン・ジェルマン大通り 168 番のデジャリン夫妻の住居



旧シャルコー邸



旧シャルコー邸碑文

サン・ジェルマン大通りをそのまま東進すると、地下鉄オデオン駅の周辺で右手に医学
校通りが現れる。サン・ジェルマン大通と学校通りの間はパリ第5大学であり、別名ル
ネ・デカルト大学”Universite Rene Descartes”と称する。哲学者で科学者のデカルトは
「健康は第1の善である」と説いて医学にも並々ならぬ関心を示し、当時ハーヴェイが提
唱した「血液循環説」を支持した。「理性を正しく導いて真理を探究し、病気を予防し身
体を健康に保つ」とするデカルトの思想は、その後フランスのみならず世界的な科学と医
学の基本方針である。パリ大学自体は12世紀まで遡れる欧州最古の大学の一つである。
現在地に旧医学部が置かれたのは、1795年衛生学校エコール・ド・サンテが置かれたこと
に始まる。建物自体は1759年王立外科アカデミーのため建設された。王立外科アカデミ
ーが1774年講堂を立てたのが、パリ大学旧医学館（現パリ第5大学 Université Paris V
René-Descartes）である。当初外科医だけで建てたので、ギリシア風の円柱の間の5人の
レリーフはすべて外科医である。

その破風を支えるコリント風円柱の下には、ダヴィッド・ダンジェ作の Marie François Xavier Bichat（以下ビシャー）のブロンズ像がある。右手にメス、左にノートを持ち、解剖死体が足元に横たわっている。31歳でなくなる前年の冬に600体以上の解剖をしたとされる。ビシャーは「疾病の座は組織にある」と述べ、「記載病理学の父」と呼ばれ、病の座を組織だと唱え膜論を展開したが、結核のため31歳の若さで亡くなった。なお講堂の隣の医学部内1階ホールにはビシャーの治療にあたったコルヴィサールの胸像が置かれている。



RUE DE L'ECOLEDE MÉDECINE（医学校通り）（左）、旧医学部の正面、壁のレリーフは左からジャン・ビタール、マレシャル、アンブロワーズ・パレ、ラ・ペイロニー、プティ）（右）



正面レリーフのアンブロワーズ・パレ像（左）、正面ビシャー像（右）

この医学部博物館内は他の医学史博物館同様医療器具、医療に関する絵画、版画など種々歴史的展示品が供覧されている。ラエンネックが作成した聴診器もあり、また展示さ

れた尿路結石採取器を見て、ナポレオン 3 世もこれで治療されたのかと想像した。クロード・ベルナールは「医者はそれぞれ実験者である」と述べたが、展示された脳の電気刺激装置からフランス精神神経学の「生物学的人間観」の歴史を垣間見れる。なおベルナールのパリでの旧居は医学史博物館から少し離れたエコール通り 40 番にあり、記念のプレートがはめ込まれている。



1 階ホール



医学博物館内ラエンネックの聴診器



膀胱結石採取器



白内障手術器



エコール通り 40 番のベルナール旧居、記念プレートには、[Dans Cette Maison est mort le 10 février 1878 Claude Bernard Professeur de Médecine au Collège de France]とある

医学博物館は3階だが、階段を下りると2階にアンドレ・ブルネイ画「サルペトリエールでのシャルコーの臨床講義」がある。博物館から階段を下りると途中階に掲げられているので、昇ってきたエレベーターでそのまま1階に降りると「見残し」となる。また医学部を出て右方向に数分歩き、医学書店のあるアントワヌ・デュボア通りには、シャルコーの友人であるヴェルピアンの像がある。彼はパリ大学医学部病理解剖学教授であり、シャルコーの友人、デジャリンの恩師である。シャルコーとヴェルピアンの共同により、パーキンソン病や多発性硬化症の疾患概念が生まれた。多発性硬化症なる診断名はヴェルピアンの提唱であり、確かに神経病理学的命名である。

ちなみに米国から医学を学びに来たクルンプケ女史の入学に当初反対したのもヴェルピアンである。その後入学を許可されたクルンプケ女史がシャリテ病院研修中に会ったのが、当時病棟医長であったデジャリンである。新たな診断法や疾患概念などを提唱した偉人の背景を知るとは、それらの断片的医学知識に“humanité”を加味させ、己の乏しき認知を深化させてくれるものである。サン・ジェルマン大通り周辺は、まさに医療者のための「哲学の道」である。



アンドレ・ブルネイ「サルペトリエールでのシャルコーの臨床講義」(1887年)(左)
ヴェルピアンノの立像(右)

パリで代表的な病院の一つに、ノートルダム寺院隣のオテル・デューがある。「神の館」の意であり、病人に限らず貧困者、孤児、身寄りのない老人や旅人などを収容する福祉施設であった。セーヌ川の中州のシテ島にキリスト教会の中心地が築かれ、その後老病者の施設が発展した。ノートルダム寺院の隣ともいえる場所に 829 年創立されたが、現在は古色蒼然たる病院である。フランス医学の歴史でもあり、パレ、ピエール・ヨセフ・デソー(1744-1795)やギユイローム・デュピュイトラン(1774-1835)など卓絶した外科医を輩出した。クロード・ベルナールの師であるフランソア・マジャンディ(1783-1855)もこの病院の外科医であった。パリ市街の大改造がナポレオン 3 世によって行われ、その際シテ島の

南部から現在地の北部に移された。中に入ると、壮大な講堂が正面に広々とした芝生がひろがる中庭があり、自由に見学できる。処々にキリストやマリア像などがあり、教会の延長としての医療機関であると再認識させられる



ホテル・デュー中庭

病院教会としては、サルペトリエール病院がある。サルペトリエールと言う名は、硝石（サルベトル）すなわち火薬に由来する。ルイ 13 世の頃、それまでパリ市内にあった火薬庫がしばしば爆発や火災を繰り返す為、パリ城壁外に新火薬庫が建設された。フロンドの乱で荒廃したパリは、ルイ 14 世の代になり貧民、浮浪者、乞食などが多くたむろし、社会不安が高まった。18 歳の若き王は、1656 年勅命により 6000 人以上を収容できる救済病院設置を命じ、硝石庫跡に建設されたのがサルペトリエール病院である。現在の正式名は、Groupe Hospitalier de la Pitié-Salpêtrière である。

この病院で有名なのは、鉄格子がはめられた病棟に手足を鎖でしばられ、体も大きな鉄の輪で壁につながれた女性精神病患者を解放した Philippe Pinel（以下ピネル）のエピソードである。非行少女、売春婦、狂人なども収容され、非人間的扱いを受けていた。人間性回復の改革に着手し精神病患者の鎖を解き放ったことで有名なピネルの銅像を見学できる。右傍らには鎖が握りしめられ、解放された女性がその足元に座り、ピネルを見上げている。ちなみに 18 世紀最後の啓蒙主義的オピニオン・リーダーと称されるピネルは本来内科医であり、「従来の臨床医学が治療方法の発見にのみ専念してきたが、病気の本質を正確にとらえる必要性」を提唱し、疾病分類学を築き上げることに尽力した。

サルペトリエール病院では、神経病学者シャルコーの築いた神経病クリニックも有名である。内科医として出発し、1862 年、37 歳の時にサルペトリエール病院に赴任した。この病院には 5000 人以上もの見捨てられた患者が収容されていたが、特に神経患者が多かった。各々の疾患を多数見ることができ、今日の神経内科学（脳神経内科学）では常識とされている多くの事実を発掘した。彼の努力により、この病院は神経内科発祥の地としての名誉を得ている。



サルペトリエール病院正面のサン・ルイ礼拝堂（左）と病院の前に立つピネルの銅像（右）、台座には、「発狂者の恩人、フィリップ・ピネル医師 1745-1826 に捧ぐ、パリ医学心理学会」と刻まれている

パリ 15 区のセーブル通りには、ネッケール病院と小児病院が並んでいる。聴診法で有名なラエンネックのレリーフがネッケール小児病院外壁にある。ルイ 16 世の財務長官だったネッケールが「一つのベッドに一人の患者」をモットーに、その婦人シュザンヌ・ネッケールの努力によって 1778 年開設された。その後 10 年にわたり夫人の近代的な病院管理によってその基礎が築かれたため、この病院は彼女の名をとどめている。ラエンネックは 1806 年にネッケール病院に赴任した。聴診器による間接聴診法を開発し、剖検所見と聴診所見との対比を行った。「全ての病気の診断は、患者の身体所見にもとづいてなされなければならない」としたラエンネックの言葉を思い返す機会となる。

ちなみに 1761 年発表のモルガーニの臓器病理学を理論的武器とし、同年アウエンブルッガーが発表したがうずもれていた打診法を 1806 年に復活発展させたのは、ラエンネックの師コルヴィサルである。それまでの思弁的医学を排してベッドサイドにおける実践的・経験主義的医学を提供し、今日の診察法の先駆けとなっている。患者の観察を重視し、「純理論的な仮説や単なる個人的見解に従って重要なことをしてはならない」と警告している。



ネッケール小児病院外壁のラエンネック記念碑（左）、ネッケール病院（右）



ネッケール病院中庭

パリには医学史に加え科学史関連施設が数多くあり、そのひとつに Musée Curie（キュリー博物館）がある。マリー・キュリー（Marie Curie 以下キュリー、1867-1934）はポーランド、ワルシャワ生まれの物理学者・化学者であるが、日本ではキュリー夫人の名前で知られている。放射線の研究で 1903 年に女性としては世界で始めてノーベル賞を受賞（物理学）、その後 1911 年にノーベル化学賞も受賞し、パリ大学初の女性教授にも就任している。

地下鉄 Culuny La Sorbonne 駅から歩いて、途中ソルボンヌ大学、パンテオンを横目に見ながら、さらに南に 5 分ほどユルム通りを歩くと、右手にその名も Pierre et Marie Curie 通りがあらわれる。以前はラジウム研究所と称されキュリーが実験をした施設で、現在は博物館となっている。水曜から土曜午後 1 時から 5 時まで無料で公開されている。館内は A “The family with five Nobel Prizes”, B “Radium, between myth and reality”, C “The Curie Laboratory, between physics and chemistry”, D “The Foundation Cuie: treating cancer” の 4 部門に分けられ、それぞれ関連する写真やポスター、実験装置や試薬、医療用機材や治療用品などが展示され誰もが見学できる。

4 部門中 C 部門にはキュリー夫妻の研究も年代順に展示説明されている。夫ピエールが論文研究のために確保したパリ市立工業物理化学高等専門大学のラボラトリーは、倉庫兼機械室を利用した暖房もない粗末なものだった。そこに ピエールとマリーはさまざまな計測器などの機器を持ち込み、ウラン化合物の周囲に生じる電離を計測し、サンプルの放射現象がウラン含有量に左右され、光や 温度などの外的要因に影響を受けないという結論に達した。マリーは、この現象がウラン固有の特性かどうかを調べるために 既知の元素 80 以上を測定し、トリウムにも同様の放射があることを発見した。これらの結果から、マリーはこれらの放射に放射能（radioactivity）、そしてこのような現象を起こす元素を放射性元素（radioelement）と名づけたことが概説されている。

なおこの研究所で偉大な業績を残したマリーは 1934 年 7 月 4 日死亡し、ピエールが眠るソーの墓地に夫と並んで埋葬された。その 60 年後の 1995 年、フランス政府はキュリー

夫妻の業績を称え、二人の墓はパンテオンに移されフランスに貢献した偉人に加えられた。



キュリー博物館正面



キュリー夫人書齋跡

キュリー博物館のあるユルム通りをさらに歩いていくと、左手に高等師範学校がある。その壁には、「パストゥールの研究室ここにありき」と記された石碑がある。石碑には、彼の研究テーマとして、1857年の「発酵」から1885年の狂犬病予防までが年代順に列挙されている。なおパリ市内にはパスツール研究所もある。またルーブル美術館やオルセー美術館には、いくつか医学史関連の展示品がある。



高等師範学校壁面のパストゥールの記念石碑（左）、パスツール研究所（右）



ルーブル美術館、Esculape（ローマアルバニー邸より出土）（左）、アスクレピオスとヒゲイアのレリーフ Esculape et Hygieie）（右）



オルセー美術館、Henry Gervex, Avant l'opération ou Le docteur Péan enseignant à l'hôpital Saint-Louis sa découverte du pincement des vaisseaux 1887（左）、Albert Edelfelt, Louis Pasteur, 1885（右）

リヨン

フランス第2の都市リヨンには、リヨン大学の医学・薬学歴史博物館（Musée d'Histoire de la Médecine & de la Pharmacie de Lyon）がある。リヨン大学は第1から第3まであり、医学、薬学、理学、工学関係はリヨン第1大学（正式にはL'Université Claude Bernard Lyon 1）にあり、博物館は医学部校舎の一角にある。この博物館は、リヨン大学法医学教授、犯罪人類学の先駆者アレキサンドル・ラカサーニュが個人コレクションを基

に 1896 年に設立したものである。1914 年に 4 月 16 日当時のフランス大統領 Raymond Poincare によって、法令で博物館として指定された。1930 年、今も市内にある Edouard Herriot Hospital のオープンと同時に、Rockefeller 財団の寄付により、医学部がこの場所に移動し、博物館も今の場所に作られた。この博物館は、ヒポクラテスの誓いの中にある「すべての医師は、医術を極めようとする人にこれまでの医師が成し遂げた業績を伝える義務がある」という考えが基本にある。「1945 年 7 月 13 日法」とともに、博物館は「美術的、歴史的、考古学的に興味のある収集品を永続的に収納し、公開するもの」とされた。

パリ大学やモンペリエ大学に比して新しい大学なので古代からの資料は乏しい。リヨン大学関連の研究者が開発したシリンジや視力計測図などが多く展示されているが、およそ百年前に映画を発明した、ルミエール兄弟のオーギュスト・ルミエールはやけど用の包帯を発明し、ルイ・ルミエールは技術者で、いろいろな職業用の義手、義足を発明している。リヨンには兄弟を記念したルミエール博物館もある。現在でもリヨンは医療機器開発に大きな貢献をしてきている。異色な展示品として、1894 年 6 月 24 日イタリア人アナキストがカルノー仏大統領を暗殺した際のナイフと血痕スカーフがある。

博物館内は 5 部屋に分かれ、入口を入った最初の部屋には、歴代教授の肖像画、教授用の特別な場合にのみ着用する帽子やマントなどが展示されている。その他の部屋には動物磁気を提唱したメスメルのコナーや当時の法医学に影響を及ぼした骨相学の Gall の頭像と業績などがある。メスメルはウィーンで法学や医学を学び、1766 年に医学論文「惑星の人体に及ぼす影響力についての物理学的・医学的論考」を出した。この論文のなかでメスメルは、天体から生体に至るまで、あらゆる物質の内部に影響を及ぼす磁気流体を想定し、それを「動物磁気」と呼んだ。当時、ニュートンの万有引力の発見を受け、磁気や電気など新たな力に関心が向けられていたことが背景にある。

科学の新発見が人々を驚かせた時代にあつて、メスメルの磁気流体理論は諸手を挙げて迎え入れられた。動物磁気による治療はパリで大変な人気を博し、サロンに置かれた水桶の周りに参加者が集う様子は、当時の版画を通じて窺うことができる。手を取り合った婦人たちは若い男たちから背中、首、乳房を撫でまわされ、すすり泣き、絶叫、痙攣、失神などを引き起こした集団ヒステリー状態と考えられている。一方、イタリアの精神科医で犯罪人類学の創始者であるチェーザレ・ロンブローゾは骨相学、観相学、人類学、遺伝学、統計学、社会学などの手法を動員し、人間の身体的・精神的特徴と犯罪との相関性を検証したことも紹介されている。いずれも現在では科学的に根拠なき理論である。

歴史的に医学理論が色々と提唱されるが、多くは科学的に実証されず疑似科学として消えていく。1796 年ザムエル・ハーネマンが提唱したホメオパシー理論もその一つであるが、現在でも欧州に「信者」が多く存在する。ホメオパシー理論が歴史的に発達したのは当地リヨンであり、ホメオパシーの会社ヴォワロンの本社も現存している。ベルナールが中学卒業後に奉公に出た薬屋で、非科学的なのに呆れ絶望したというテリアカの大きな壺も博

物館に展示されていた。テリアカは紀元前 2 世紀から 18 世紀まで使われていた万能解毒薬だが、解毒だけではなく万能薬として使われ日本にも伝わっている。毒蛇の肉に何十種類の薬草、動物の成分が配合されているもので、蛇、動物の咬傷に用いられていたのだが、配合といっても適当なことが多かったらしい。なお、このテリアカは、アラブ社会、中国でも使われた。疑似科学を見抜くためにも医学史は欠かせない。



リヨン第 1 大学医学部正面



教授用のマントと赤のベール（左）、動物磁気発生装置（右）



19 世紀後半に発達した義肢の展示。中央のハサミ式義手が、時計職人のためにルイ・ルミエールの作成した（左）、カルノー仏大統領を暗殺した際のナイフ（右図右）と血痕スカーフ（右図左）



テリアカの壺



旧ホテル・デュー正面玄関と中庭を囲む回廊



旧ホテル・デュー壁面の Francois Rabelais 像

実験医学のパイオニア Claude Bernard（以下ベルナール）は、フランス南東部のワインの産地で有名なりヨン近郊ボジョレー地方のサンジュリアン村で生まれた。リヨンからは車で 30 分ほどのブドウ畑の中に、生家と隣接してベルナールが購入した屋敷が現在博物館となっている。ベルナールは葡萄の収穫期には定期的に帰省してここで過ごした。実験室も作り、滞在中にも実験を続けた。

館内にはベルナールに関する多くの資料が展示されている。ホールから続く廊下の壁には 10 年ごとに区切られた年表が貼られ、彼の業績が同時代の政治、科学、芸術、文学など主要なできごとと対比しながら提示されている。展示室は数部屋に分かれ、彼が使用したガラス器具、乳鉢などの実験器具に加え、彼が独自に作成した実験器具や手書きのラベル、フランス政府からのレジオンドヌール勲章などが展示されている。有り難いことにフランス語に加え英語での説明が全ての展示品にあり理解を高めてくれる。

彼はそれまでの観察によって生体の働きを推測するにとどまらず、血液の成分を計測し糖質源としての肝臓の働きを証明した。また膵液の消化機能や唾液腺の血管運動神経を解

明し、また神経電気刺激により運動を引き起こすなど実験医学により科学的真実を追究した。特に印象的だったのは、クラレが選択的に神経筋接合部に作用することを明らかにした実験器具であった。当然のことではあるが、何を明らかにするかにより実験装置を考案するのであり、研究の成否がそこにあるのは現代でも同様である。

博物館の周囲はブドウ畑が広がっており、葡萄の木は腰までの高さなのではるか遠くまで見通せた。1860年病を得て故郷に帰ったベルナールは、この地で療養に努めながら「実験医学序説」を著した。科学に機械論（メカニズム論）を持ち込んだのはデカルトだが、医学・生物学に持ち込んだのはベルナールと考えられる。彼は医学を志す前に劇作家を夢見ていたが、実験という道具立てで医学に因果推論の考え方を導入したベルナールを知りたければ是非訪れたい博物館である。



クロード・ベルナール博物館（左）、館内ベルナール像（右）



神経筋伝達実験



クロード・ベルナル博物館裏のブドウ畑



クロード・ベルナル生家

モンペリエ

フランス南部モンペリエは地中海から 10km ほど離れており、薬の集散地として活発な活動をしていた所である。モンペリエ大学医学部は 1220 年ローマ教皇ホノリウス 3 世の特使コンラード枢機卿により創設された。歴史的に欧州の大学はキリスト教社会において修道院の附属神学校として創設されたものが多い。大学の建物が教会に隣接あるいは教会や修道院の建物を利用していることが多いのは、そのためである。アラビア医学が自由に伝来したためか、医学は 13 世紀初めには教えられていた。当地はヨーロッパではボローニャとならぶ医学教育先がけの地である。モンペリエ大学医学部の建物はサン・ピエール教会の一部であり、14 世紀のアビニョン幽囚の時にできたベネディクト派に属した。100 年戦争時代は治安が悪く外国からの学生がモンペリエに来られなかったが、それだけ医学教育として当時から名をはせた大学である。

ルイ 14 世は、この大学を「ヨーロッパの医学校の母」と称した。この大学が中世の文化や医学の公道であった地中海に面しており、したがって古くはサレルノ大学、その後 12、13 世紀にはボローニャ大学とのつながりが密接であった。またこの町には、スペイン人、アラビア人、ユダヤ人が多数住み、サラセン的医術の伝統が長く温存されていたことから、この大学がヨーロッパ医学再生の拠点となった。大学の正門入り口には、この大学出身者でナポレオン時代最後の医学部長であるバルテスヤラ・ベイロニーの像が据えられている。モンペリエ医学と言うと生氣論があげられるが、その主人公がこのバルテ(Paul-Joseph Barthes)である。この大学はヒポクラテスが生きており、生体の統一性を保つ原因としての「生命力」があるとし、生命原理 (principle vital) なる概念を中心としたヒポクラテスへ回帰する説を唱えた。

医学部玄関ホールには、先人たちの立像やレリーフが置かれている。中庭の突き当りには解剖学講堂があるが、これは 19 世紀の新しいものである。医学部入り口を入ってすぐ左の扉を開けると、学部長室に通じる部屋がいくつかある。最初の部屋は以前司祭の居住区であったが、現在は更衣室となっておりロッカーが設置されている。壁には多くの医学

を教える教員の肖像画があるが、当時の学生には教員を知るための手段でもあった。面白いのは、内科医と外科医の違いであり、diploma をもたない外科医 Cabrol がただ一人、赤のガウンを着られないため黒のガウン姿で描かれている。ガウン自体本来は聖職者が着ていたものであり、大学の由来が教会や修道院であるヨーロッパの歴史を現している。現在でも欧米では、大学の学位授与式や専門医資格授与式などで目にするガウンである。

医学部 2 階には解剖学博物館がある。館内は生前と標本が展示されている。天井は教会さながら華麗な絵が描かれており、パレ、ベザリウス、ビシャー、モルガーニなど歴史的医学者、医療人も描かれている。展示品には今ではなかなかお目にかかれないワックスモデルやキュンストレーキ（紙製人体模型）に加え、実物浸潤病理標本や骨格標本が数多く展示されている。乾燥させた骨格モデルには筋肉が付着したものもあり生々しい。ヨーロッパではよく目にする胎児の奇形標本も多く展示されているが、先天性水頭症、シャム双生児、無脳児など実物を医学生に見せるのは教育上効果的と思われる。ガイドの方の話では、当時講義を担当していたランケレチヌスが解剖の遺体を得るために学生を墓場に行かせて掘り起こさせたとのことである。フランス革命後政府が衛生のための大学としてパリ、ストラスブール、モンペリエの 3 大学を認定したが、その一つがモンペリエ大学医学部である。



モンペリエ医学部 正面の塔がサン・ピエール教会のなごりを示す



モンペリエ大学医学部正面



玄関ホール内胸像（左ベザリウス、右カルダン）（左）、旧司祭の居住区、黒服姿は B. Cabrol（右）



解剖学博物館内（左）と館内展示標本（右）

アルル

アルル郊外サン・レミ・ド・プロバンスには、ゴッホが入院(1889-1890)していた旧サン・ポール・モゾール修道院に併設された精神病院がある。



旧サン・ポール・モゾール修道院



ゴッホが入院した病室

ラヴァル

ラヴァルと聞いてどこの国にあり、そこで生まれた著名な医師をあげられる方は少ないであろう。当地ラヴァルはパリから南西に 280 km ほどで、のどかで風光明媚なメーヌ県とサルト県にまたがっている。町の名前「ラヴァル」は、古フランス語で「溪谷」を意味し、この地域に流れるマイエンヌ川とその溪谷に由来している。市民もまた、「ラヴァロワ（溪谷の人）」と呼ばれている。「近代外科医の父」と称されるアンブロワーズ・パレはここで生まれた。城門をくぐって市役所前の「11月11日広場」の公園には、パレのブロンズ像があるが、彼の没後 250 年を記念して作られた。台座には有名な「私が処置し、神がこれを治し給うた」なる碑文が刻まれている。

床屋外科医の出身だったが、その後、四代の国王の外科医となった。銃創の処置に独自の軟膏を作って処置し、頭蓋骨に穴をあけるトレパンなる器具を考案し、血管結紮で止血するなど多数の業績を残した。市内には中世の古城ラヴァル城がそびえ、そこからマイエンヌ川の緑豊かな溪谷を見渡すことができる。現在は、ナイーヴアート美術館も併設されているが、その奥にはパレ関連の医療器具やパレのブロンズ像などが展示されている。残念ながら筆者が訪問した際には、お目当てのトレパンは他の博物館に貸し出されて見学できなかった。同行の外科の先生によると、昔脳外科が分化していなかった頃には、日本でも外科医が頭蓋骨の穿孔に使用していたとのことだった。

パレが書いた外科書はオランダ語に翻訳され日本にもたらされたが、初めての系統だった西洋医学書であった（1706年の榎林鎮山抄訳「紅夷外科宋伝」）。蘭学として受け止められたが、原著はラテン語ではなく俗語のフランス語でパレが記述した全集である。言葉の壁を乗り越えて、学術を伝えるには外科絵図は役立ったと思われる。抄訳を担当した榎林鎮山（長崎）をはじめ西玄哲（江戸）、伊良子光顕（京都）、吉雄耕牛（長崎）、花岡青洲（紀州）など錚々たる外科医らに受け継がれて免許皆伝書に取り入れられた。



「11月11日広場」前の公園にある没後 250 年に立てられたパレ立像



ナイーヴァート美術館内パレ像、医療器具

ボーン

ボーンは15世紀ブルゴーニュ公国時代に繁栄した古い街で、最高級赤ワイン産地として有名である。オテル・デューとは神の家の意でありフランス各地にあるが、ボーンのオテル・デューは見学者用に整備されており、特に訪れたい所である。本来慢性の消耗性の疾病に罹患した栄養障害の貧者を治療して治癒する施設ではなく、この時代の大部分を占めた貧者が人生の最後に神と共にある家として、神の御世へ渡る最後の時を過ごす施設であった。一般に欧州でのホスピスは巡礼者用に利用されたものが多いが、ボーンのオテル・デューはブルゴーニュ公国の高官ニコラ・ロランが住民のために貧困と飢餓と荒廃が著しいこの地に1443年起工し、8年後の1451年より開設し、翌年1月1日に最初の患者が受け入れられた。

開設時は100年戦争がやっと終了した時代で、地域には職を失った元兵士がうろつき、簡単な労働をして生き延びていた。治安は極めて悪かった。貧しい故に栄養障害をきたし、結果として、または慢性の消耗性疾患に罹患した故に栄養障害をきたす農民などの庶民が、それこそ溢れていた。死亡率は恐ろしく高く、地域の方ある人たちにはこれらの貧しい人々への援助の要請が押し寄せていた。これらの死を間近にした人たちに治療手段を持たない時代に、現在の我々が思い描くような病院は存在するはずはなかったと思われる。

見学者は外壁に囲まれた入口から中に入ると、華麗な色彩のゴシック様建築を目にする。特にカラフルな幾何学的な瓦模様は印象的である。院内はいくつかの部屋に分かれており、貧者の病室 (Salle des Pauvres) は両側壁に沿って深紅のカーテンに覆われたベッドが15床ある。奥にはスタンドグラスを備えた祭壇がある。隣接して、富裕者のための小病室があり、数床の屋根付きベッドがあり修道女が世話していた。祈りの空間としての祭壇画にかこまれ、「神の座」により近いことが示されている。今風に言えば、「差額ベッド方式の収容施設」であったことは、当時の低所得者向けのオテル・デューとしては例外的だったと思われる。院内には入所者用の調理室や調剤室があり、入浴もできたときれる。手術に

必要な器など種々の医療器具や解説パネルも陳列室に展示されている。1891年歴史記念建造物に指定され、現在は病院博物館として一般公開されている。



ホテル・デュー中庭



貧者の間



調剤室（左）ならびに給食室（右）

ルルド

1858年2月11日小さな水車小屋で生まれた14歳の少女ベルダデッタは、マッサビエル洞窟の前で薪拾いをしていた際に、聖母マリアが初めて姿を現した。その後9回目に会った際、聖母は洞窟の奥を指さし、「ここを掘りなさい」と言った。掘ったところから水が湧き出し、その水で体を清めると次から次に奇跡的に病人が治ったとされる。これが「ルルドの奇跡」であり、現在も多くの病者がルルドを訪れる。ルルド市内には、いくつか病人を受け入れる宿泊施設(Accuei)がある。「ルルドの奇跡」は1883年より医学的に検証されているが、実際に奇跡の認定を受けたのは67人である(2010年現在)。



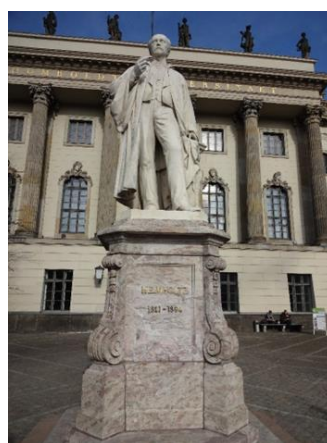
マッサビエル洞窟とマリア聖母像（左）、Accuei Notre-Dame（左）

4. ドイツ

ベルリン

歴史的な東西統一後、財政の問題によりベルリンの大学は統廃合や教員の定員削減が実施された。西ベルリンのベルリン自由大学医学部、東ベルリンのフンボルト大学医学部、それぞれの大学附属病院が「シャリテ・大学病院ベルリン」の名のもとに統合された。ベルリン最古の病院 Charité (フランス語で隣人愛、慈善の意味) は 1710 年に”Pesthaus”として設立された。1724 年にはベルリンに Collegium Medico-Chirurgicum が設立され、ブールハーヴェーの門下、ヨハン・テオドル・エレルが医学教育を実施した。1726 年 Friedrich I 世(1657-1713)はこれを陸軍病院(Garnisonlazaretto)にするように命じたが、同時に貧しい市民のためにも貧困者病棟(Armenhaus)としても利用され、400 床の病院となった。Friedrich I 世の子 Friedrich William I 世は、ここを医療教育施設として講義を提供する場とし、1727 年 Charité 病院と命名した。

Charité 病院は以来ベルリン大学附属病院として機能し、戦後は東ドイツに属しフンボルト大学の附属病院であった。統廃合により、Charité Universitätsmedizin Mitte の本部となり、基礎医学部門がここに集約されている。病院としては Charité(Mitte)と Benjamin-Franklin, Virchow, Buch が 4 つの拠点がある。なお東ドイツ地区にベルリン・フンボルト大学があるが、東西ドイツ統合後開放的になり、誰もが大学本部に入館可能である。出入りする者を監視していた玄関ホールの陰気な守衛室は撤去され、ホールから正面階段を見上げると、”Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu verändern”なる文章が壁に刻まれている。検眼鏡を開発した H.L.F. von Helmgolz(1821-1894)の銅像も本部建物前にある。



フンボルト大学本部階段、フンボルト大学本部前のヘルムホルツ像

Johann Lukas Schönlein は当大学でドイツ医学近代化の先鞭をつけた。1873 年回帰熱の病因であるらせん状の微生物スピロヘータをつきとめた Otto Obermeier や近代病理学の開祖 Rudolf Virchow (以下ウィルヒョウ) も勤めている。キャンパス内には、多くの人物

記念碑がある。ウィルヒョウに加え Albrecht von Gräfe、Robert Koch, Emile Fisher, Paul Langerhans など錚錚たる医学史上の偉人像が諸所に置かれている。内科医で神経科医であった Moriz Heinrich Romberg(1795-1873)は、この病院で多くの脳疾患の患者を診て、多くの剖検の機会を得た。彼の後任の Wilhelm Griesinger(1817-73)の信条は、"Geisteskrankheiten sind Gehirnkrankheiten"であった。精神医学と神経学が最後まで一体となっていたのが、ドイツ医学の特徴である。



Robert Koch 広場のコッホ記念像 (左)、ウィルヒョウ記念碑 (右)



キャンパス内の検眼鏡を右手に持つグラージェ(Albrecht von Gräfe)記念碑、左側は眼疾に悩み苦しむ人々、右側は疾病から回復して喜ぶ人々



フィッシャー記念像



グリーンジャー胸像



精神神経診療所(Psychiatrie und Nervenlinik)

シャリテキャンパス内には、ベルリン大学病理学研究所(Institut für Pathologie, Rudolf Virchow Haus)がある。病理学教授であったウィルヒョウのために研究所が初めて建てられた。研究所玄関前にはウィルヒョウの胸像があり、また研究所玄関ホール床には、ウィルヒョウの”Omnis cellula a cellula”と彫られたプレートがはめ込まれている。病理医のProf. Michael. Hummel に所内を案内してもらったが、特に印象に残ったのは病理解剖のための階段教室である。学生のみならず卒後教育として臨床医も参加する研修に現在も用いている。ベザリウス解剖学書の扉絵を見るようで、医学教育における歴史的背景の違いが痛感される。



病理学研究所玄関（左）、玄関前にある“Omnis cellula a cellula”プレート（右）



病理学研究所前庭のウィルヒョウ胸像（左）とランゲルハウス胸像（右）



ベルリン大学病理学講堂

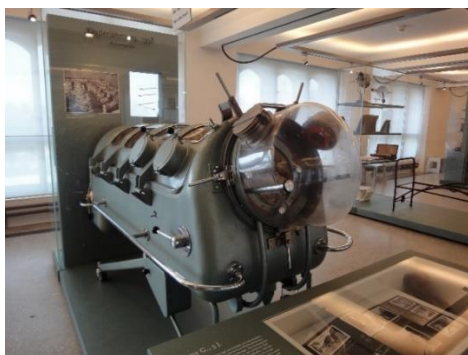
隣には新しくなったベルリン医史学博物館(Berlin Medizinhistorisches Museum)がある。1901年 Virchow の 80 歳を記念して”Das Pathologische Museum”が完成し、その年の終わりには 23,000 以上の標本が学生、医師、興味のある一般人に公開された。第二次世界大戦で博物館は大破されてしまったが、それを示す破壊された講堂跡が館内に残されている。標本展示棚では特に 32 歳で呼吸不全により死亡した巨大結腸症 (Hirschsprung’s disease) の標本が印象的であった。



巨大結腸症標本



エーベルト大統領の穿孔壊死性潰瘍性虫垂炎



鉄の肺



Hirnströme (脳波)



破壊された講堂跡



解剖学センターワルダイエル館（左）、館内講堂（右）



鷗外記念館

鷗外記念館入口

ドレスデン

ドレスデンには、鷗外が友人井上らと食事した場面を示す壁画があるアウエルバッハスケラーがある。



アウエルバッハスケラー内と食堂内の森鷗外らの壁画

ヴェルツブルク

メイン川の両岸に開け、中世からの建物が並ぶヴェルツブルクには、Wilhelm Conrad Röntgen（以下レントゲン）がX線を発見した研究室があった物理学研究所がある。現在レントゲン博物館として保存されている。博物館に入ると、エントランス正面にレントゲンの生涯をドイツ語、英語、フランス語、日本語で紹介するビデオが設置されている。その横には、1905年X線発見10周年記念とレントゲンの第60回の誕生日に贈られた記念銘板が掲げられている。大理石の板に金字で、「1895年この建物の中で彼の名前のついた放射線を発見した」と書かれている。ただし大戦時の被災の混乱後、裏板が化学実験機に使用された。“Ohne Röntgen, Keine Medizin”、医療に従事する者は、ゆめゆめ忘れてはならない。

博物館内の廊下には、レントゲン関連の資料としてノーベル賞の賞状やメダルやメダル類の写真、辞令のコピーなどが数多く展示資料されている。館内の奥まったところに、レントゲンがX線を発見した実験室がある。長崎大学原爆後障害医療研究所長の永山雄二所長から紹介していただいた放射線科医 Hahn 教授の案内で実験室に入れていただいた。当時を偲ばせる実験器具が机の上に並べられている。レントゲン愛用の記録機も残されており、その上にはデスマスクならぬデスハンドが置かれている。

レントゲンが研究に勤しんだ19世紀後半は、ニュートンの古典物理学の研究が隆盛し、身近な自然現象が多く解明されだしていた。1876年オイゲン・ゴールドシュタインは陰極から出る光を陰極線と名付けた。レナルトは陰極線があたるガラス管壁にごく薄いアルミ箔の窓をつけ（レナルト管）、わずか2cmではあるがその窓を通して陰極線を取り出すことに成功した。レントゲンはこの陰極線を外に取り出す実験に興味を持ち、クルックス管の真空度や電圧を上げて透過性を高めて実験を実施した。1895年11月8日、1m近く離れた所に置いてあった白金シアン化バリウムを塗った蛍光板が放電するたびに発光したことに気付いた。陰極線よりはるかに透過性が高い新しい放射線を発見し、X線と命名した。

なおヴェルツブルクはPhilipp Franz Balthasar von Siebold（以下シーボルト）生誕の地であり、市郊外にはその記念館がある。シーボルト家はドイツ医学の名門であり、現在でもシーボルトは当地では大切にされている。医学を専攻したが、当時ドイツ学界の一般的風潮で動植物、地質、鉱物を研究する博物学から、人文地理や民俗学などの学問領域に彼は興味を抱いた。1815年ヴェルツブルク大学を卒業し、近くのハイディングフェルトで開業した。ただし博物学を極めたいとする気持ちは抑えがたかった。その頃の世界は大航海時代が過ぎ去り、欧州では清や日本、その周辺の東アジアに人々は注目していた。そうした時代に多感な青春時代を過ごし、日本になみなみならぬ関心をいだいたシーボルトが日本在住を希望したのは自然の成り行きであった。父親の弟子でオランダ国王の侍医をしていた人物に頼み込み、オランダ領東インド会社陸軍病院外科少佐に任ぜられ、東洋行きが実現した。1822年8月11日に長崎につき、出島に上陸した。その時の彼の年齢は27歳であった。

市内にはヴェルツブルク大学の附属病院であったユリウスシュピタールの壮大なバロック建築がある。シュピタールは救貧院を意味する。名君ユリウス・エピテル・フォン・メスペルブルン侯により、1576年に創設された。1582年にはヴェルツブルク大学医学部が併設された。この救貧院も欧州の修道院由来の病院同様酒を醸造し、その利益で困窮者を救済する費用を捻出した。現在はレストランとなっており、フルーティなフランケンワインが味わえる。



レントゲン通り (Gedächtnisstätte Wilhelm Conrad Röntgen) のレントゲン博物館



X線を発見した実験室 (左)、ヴェルツブルク物理医学協会のX線発見の公開講演会 (1896年1月23日)を行った講堂 (右)



ヴェルツブルク大学本館そばのシーボルト像



ユリウスシュピタール



壁にあるユリウスシュピタール表札



ユリウスシュピタール中庭

補足：ローテンブルグからロマンチック街道を約 1 時間車で走ると、途中 Wallerstein に着く。市内街道沿いに、ペスト塔がある。稀なことに、この聖人サン・ロッコは左鼠径

部腺ペストのリンパ節を左指で指している。



ワーラーシュタイン市内街道中のペスト塔

レンネップ

レントゲンが生まれたレンネップ（1929年レムシャイド市に合併された）は、ケルン中央駅から列車で1時間ほどの所にある。刃物で有名なゾーリングゲン中央駅で乗り換え、2両のローカル線に乗りレムシャイト・レンネップ駅で下車する。途中「ドイツで一番高い鉄橋を渡る時しばらく見えるヴッパー(Wupper)川の溪谷美は一見に値する。駅からレントゲン博物館には、大通り(Kölnerstrasse)をゆっくり歩いても15分くらいで着ける。スレート屋根のこぎれいな家並みが続き、市中心部の教会を過ぎシュベルマー(Schwelmer)通りの坂を上ったあたりにレントゲンの生家やレントゲン博物館がある。

レントゲン博物館の正式名は“Deutsches Röntgen Museum”と称する。レムシャイド市はレントゲンの偉業を記念すべく、貴族オーベルマン家の館を博物館にして、1972年に公開した。旧館には、レントゲンにちなむ家具、写真、学位記、賞状、メダル類、辞令、愛用されたカメラ、狩猟用銃器、登山用品などが展示されている。当初はX線発生装置や付属機器が時代順に置かれていた。その後開発されたX線CTやX線解析装置など大型機器を展示するため、スペースを拡張する新館増築工事が行われた。なおX線発見直後からの美容・健康などへの誤った「X線便乗商品」、それに伴う放射線障害の事例などが一般市民向けに解説展示されている。

なおレントゲンの生家は、この博物館から歩いて数分の所にある。レントゲンは1845年裕福な家庭に一人っ子として生まれ、博物館での解説パンフレットでは“enjoyed a stress-free childhood”とある。世界で抜きん出た実験物理学者、後に“a master of the art of experiment”と称される人間の生い立ちである。パンフレットには、「レントゲンは研究のall-rounderであり、成功した研究者誰もが備えている特性すなわち好奇心(curiosity)、自制心(discipline)ならびに持続力(persistence)を保持していた」とある。良き研究者を育む

ためには、子ども時代のストレスなき環境が絶対条件ではないにしても、必要条件ではあろう。レントゲンに関心のある方は是非この地の訪問をお勧めする。



ドイツレントゲン博物館、左がエントランスで、博物館は右の館から後方の新館に続く（左）、館内 X 線発生管装置展示（右）



レントゲン生家

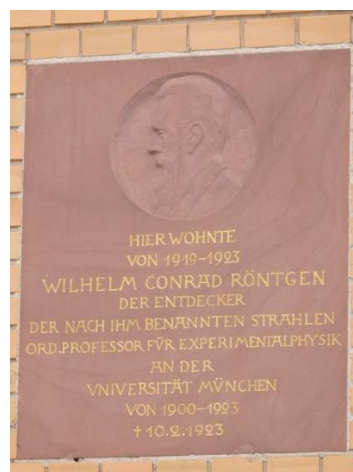
ミュンヘン

レントゲンは 1895 年ヴュルツブルク大学物理学研究室で X 線を発見したが、センセーショナルな発見であったため、マスコミに騒がれ生活が乱された。正確な理由は不明であるが、1900 年ミュンヘン大学物理学正教授ならびに物理学研究所長として赴任した。レントゲンがノーベル賞（物理学）を受賞したのは 1901 年 12 月 10 日であり、ミュンヘン時代である。か細い声で講義下手のレントゲンは、恒例の受賞講演をしないで翌 11 日帰国した。ストックホルムへ向かう前に講演の準備はしていなかったといわれているが、X 線発見者を巡っての論争を嫌ったとする説もある。

レントゲンはヴュルツブルクからミュンヘンのプリンツレグンテン外通り 1 番地に引っ越してきた。金色の翼をもつ平和の天使像を囲む円形の坂道を登りきったヨーロッパ広場のそばである。眼下のイーザル川の向かいには英国庭園、その先にはミュンヘン大学があ

り、レントゲンが毎日通った地である。家主の都合で 300 メートル離れたマリア・テレジア 11 番地に引っ越した。引っ越しの 1 週間後には、腎結石を病んでいたベルタ夫人が心不全、腎不全で亡くなったが、同館はレントゲン自身の終焉の住処となった。1920 年ミュンヘン大学を定年退職し、大学では小さな実験室を提供され、好きな実験を続けた。その後大腸がんを患い、1923 年 2 月 10 日同地で亡くなった。両親ならびにベルタ夫人の墓があるギーセン共同墓地に葬られた。

なおミュンヘンにはシーボルトの墓もある。1859 年、シーボルトは日蘭和親条約改正案を日本に届ける使命を受け、息子アレクサンドルと再来日した。その際、滝、イネに再会した。1862 年 4 月長崎を発ち、オランダに到着。1863 年にはオランダの官職を辞し、1864 年には故郷ヴェルツブルクに帰った。1866 年 10 月 18 日ミュンヘンにて死去し、古南教会墓地に埋葬された。70 年の生涯を閉じる際、妻ヘレーネに「私は美しく、平和な国へ行く」と言い残したとされる。



レントゲン終焉の家（左）、 右壁に記念銘板（右）



ミュンヘン市内のシーボルトの墓

5. オーストリア

ウィーン

日本からウィーンへはオーストリア航空でダイレクトに行けたが、最近日本からの直行便はない。18世紀中ごろオーストリア女帝マリア・テレジアがウィーンの医学を立て直すため、オランダのライデンから Gerard van Swieten (以下スウィーテン)を招請した。スウィーテンはウィーン大学医学部長となり人事を刷新した。彼の師である Herman Boerhaave (以下ブールハーヴェ) にならってウィーンの医師や学生に臨床講義を行い、解剖学教室、化学実験室、植物園などを開設した。ウィーンには多くの医師が集まったが、その中でも有名なのが打診法のアウエンブルガーである。

1784年トルコとの戦争の際に傷病兵と貧民を救う目的で、皇帝ヨーゼフ2世が2000床のウィーン大学附属病院である王立総合病院(Allgemeines Krankenhaus)を建てた。その際の陸軍軍医学校の建物が現在の医学史博物館である。王立総合病院の一角に円筒型の2人部屋139室の5階建て精神科病棟が建てられた。1861年まで精神科病棟として使用され、その後医師官舎などに使われ、現在は病理解剖学博物館になっている。医学部学生が案内してくれたが、各階環状の廊下の左右の部屋に標本が所狭しと展示されている。欧州では中世から病人が死亡すると解剖する伝統があり、その延長で病理解剖学が医学の基礎となってきた。1ヶ月から10ヶ月までの胎児から16歳までの全身骨格標本や頭蓋骨標本、ヤヌス奇形などの各種奇形標本などが展示されている。また Carl von Rokitansky (以下ロキタンスキー) が世界で最初の病理解剖学教授となった伝統からか、日本ではなかなかお目にかかれない病理標本やワックス皮膚病標本が豊富にある。



病理解剖学博物館 (中庭から撮影)

同じウィーン大学キャンパス内には、ウィーン大学医史学研究所 Josephinum (以下ヨセフィナム) と呼ばれる瀟洒な建物がある。玄関前には医神アスクレピオスの娘で「衛生: hygiene」の語源であるヒュゲイアの立像がある。この博物館の「至宝」といえるのは、Christian Albert Theodor Billroth (以下ビルロート) が世界で始めて行った胃がん手術の摘出標本と術後3か月で亡くなり剖検で得られた術後胃標本である。その当時までは幽門がん患者は手術不能で、幽門狭窄で食べることもできず最期を迎えていたのであろう。別室にはワックスで作った正常解剖標本が展示されている。200年以上前にフィレンツェの

職人に大金を出して作成された。家族連れなども見学でき、子どもの頃から人体に関心をもたせるには良い施設である。



ウィーン大学総合病院



ラントシュターナー記念碑



ビルロート石像



ウィーン大学構内ビルロート石像



医学史博物館とヒゲイア像



医学史博物館ロキタンスキー胸像



センメルワイスの消毒用樽



ビルロート手術標本



ウィーン市内のペスト塔

グラーツ

シュタイアーマルク州の州都グラーツはオーストリア第2の都市で、1999年グラーツ市歴史地区として世界遺産に登録されている。落ち着いた町並みで、中世の古都のたたずまいが今も現存している。筆者は2007年10月にグラーツを訪問したが、その際オーストリアでは2番目に大きいグラーツ大学（正式名はKarl-Franzens-Universität Graz）解剖学教室展示室を案内していただいた。解剖学教室はVorklinische Institute内にあるが、この名称は「臨床医学前」の基礎医学の「研究棟」の意味と解した。当時グラーツ大学医学部小児外科のHöllwarth教授の計らいで、解剖学教室Anderhuber教授から直々に解剖標本を解説していただいた。

展示室は整然と標本が並べられており、学生の教育にも供している。筆者の興味を引いたのは、胎児から小児の各年月の頭蓋骨、小児の水頭症（いわゆる日本での福助頭）など奇形の頭蓋骨標本、奇形児の骨格標本などで、日本ではまず目にできない物ばかり多数展示されていた。今ではこのような資料は当地でも入手し得ないとのことで、医学教育の観点からは大変貴重なサンプルであった。原則的には、解剖学教室の展示室であり、病理標本は比較的少ないが、いずれにしろ骨格標本だけではなく、あらゆる臓器の解剖標本が展示されていた。動脈、静脈、中にはリンパ管を末梢まで保存展示し得た標本があったが、技術的には標本作成は大変難しいとのことであった。

なお当地グラーツは、打診法で有名なアウエンブルガー所縁の地である。彼はグラーツ市内の粗末な宿屋に生まれ、父親が酒樽の酒量をたたいて判定するのにヒントを得て、後の打診法開発につながったと言われている。現在は3階建ての見栄えの良い建物となっており、いくつかの店が入っていた。アウエンブルガーは生来音楽好きで、後に喜歌劇「煙突掃除夫」を作詞している（作曲はサリエリ）。ウィーンの医学校を卒業し、病理解剖で鈍い音のした所に一致して病巣が見つかることに気づいた。1761年には論文「新しい考察—胸壁の叩打によって、腹腔内部に隠れた病気の特徴を見つけるために」を発表した。奇しくもモルガーニの病理解剖学書の出版された年であり、両書は18世紀の2大重要医学書といわれる。彼はウィーンでは開業医として生計をたてていたためか、郷里では研究者とは見なされていない。グラーツに勤務する医師でも、当地がアウエンブルガー生誕地などとは全く知らなかった。医学史の文献では「精神科医」としても頻繁に引用されているので、その多才な人物像は見直されるべきである。

ウィーン医学繁栄の一つにグラーツに関連のある医学者が大いに関係している事が知られている。小児科関連では、Clemens Peter Freiherr von Pirquet（以下ピルケー）がいる。ピルケーの業績については、ウィーンのヨセフィーヌムに展示されている。彼はウィーンで生まれ、グラーツ大学で医学博士を授与されている。彼の主な業績は免疫・アレルギー学であり、そもそも“アレルギー”なる言葉は彼が提唱した。ギリシア語で、“allos”（“other”の意）と“ergon”（reactionの意）を合成語であり、過敏性(hypersensitivity)をallergyと言い表した。馬血清や水痘ワクチンを以前受けていた者が再投与された際に見ら

れる過敏反応を示すために用いた。この観点は、その後コッホが開発したツベルクリン試薬にもあてはめられ、後に Charles Mantoux によるマンロー反応として結核感染の有無を知る検査に応用されることとなる。ちなみに彼の師匠は同じく小児科医である Theodor Escherich (大腸菌に名前が残る) である。ウィーン大学に移る前にグラーツのカール・フランツ大学で教授職を勤め、この間にピルケーらを指導している。



アウエンブルッガー生家跡 (左)、入り口周辺の壁には、「この家にて Leopold Auenbrugger が 1722 年 11 月 19 日生まれた」と記されたプレートが埋めこまれている (右)



グラーツ大学 Vorklinische Institute 正面、



グラーツ大学解剖学教室展覧、3 ヶ月の胎児から順に小児までの頭蓋骨 (左)、小児骨格標本 (右)



ハイリゲンクロイツ修道院のペスト塔

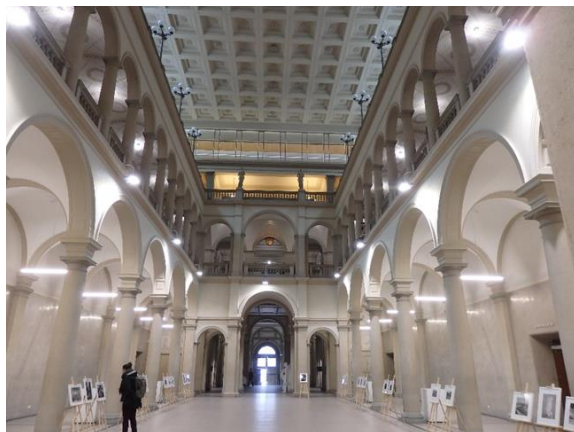
6. スイス

レントゲンは、17歳でユトレヒトの工芸学校(technical school)に入学し、2年間のコースの中で代数学、幾何学、物理学、化学、技術学などを学んだ。2年生の後期にある教師の似顔絵を描いたとの濡れ衣を着せられ、退学処分となった。現在ではこの事件は作り話であり、レントゲン家がユダヤ系であるための迫害ではと考えられている。その後ふとしたことで知り合ったトールマンから、大学入学資格がなくても受験できるチューリッヒのポリテクニクムの話を知ったことで、レントゲンの新たな将来が導かれた。ただしチューリッヒ出発前に、フリクテン性角膜炎にかかり試験が受けられなかったが、診断書を添えてポリテクニクムの校長宛に窮状を訴える手紙を出し、校長はレントゲンの無試験入学を許可した。レントゲンはそのおかげで、ポリテクニクム機械技術学科に入学した。

レントゲンが通ったポリテクニクムは現在スイス連邦工科大学となり、本館は当時のままである。州立チューリッヒ大学の隣に建てられ、1855年5つの学科（建築技術学科、機会技術学科、工業化学科、薬剤師養成科、林業技術者養成科）で発足している。アインシュタインも1896年入学している。本館中央通路は幅広く、両翼には講演会などが開催できるホールがそれぞれある。3階に上がると図書館があるが、欧州の図書館ではどこも同じくアカデミズムが飽和した雰囲気の中で、学生が熱心に勉学している。なお1階中央通路を奥まで進み本館外を出たところの広いテラスからは、チューリッヒ市街が一望できる。

大学がある丘のすぐ下にあるザイラーグラベン7番地に下宿した。建物正面にはレントゲンが住居としたとするプレートが掛けられている。大学と下宿の間には、レントゲンが学生間の集いなどに利用された喫茶レストラン緑杯軒（Zunftthaus zum Grünen Glas）がある。現在はレストランになっており、美味しいディナーを食せる。ここの主人の次女が後のレントゲン夫人であるベルタである。レントゲンがスイスに滞在した期間は短い、

彼の人生には多大な影響を及ぼした「運命の人」である。本来レントゲンは大学卒業後両親の待つオランダへ帰り、工芸学校の教師にでもなろうかと考えていたが、チューリッヒに留まったのは彼女の存在である。その後実験物理学のクント教授との運命的出会いとなり、その後彼とともにヴェルツブルクへ移りレントゲンの発見へと繋がった。



連邦チューリッヒ工科大学正面（左）、大学内正面ホール（右）



ザイラーグラーベン7番地のレントゲンの下宿（左）、レストラン緑杯軒（Zunftthaus zum Grünen Glas）（右）

7. オランダ

北イタリアで始まったルネッサンスの医学教育は、16世紀末に独立した新興国オランダのライデンに飛び火した。当時オランダはスペインからの独立戦争（1568-1648）の最中であつた。国家の独立が他国により承認される前の1577年、反乱軍の領袖オレンジ公ウィリアムによってライデン大学が創設された。オランダ最古のライデン大学は、ライデンを死守した市民らが、「免税よりも大学を」と望んで得た大学であると伝承されている。この大学の創設由来が明確であることは銘記しておくべきである。何故ならば欧州ではライデン大学より古い大学は多くあるが、本来キリスト教施設から創設されており、正確な創設年や創設者は史料からは証明できない例が多いからである。創設期の教員の多くは、

イタリアの大学で学び、学位を取得後帰国して教授になった。当地ライデンでは、ルネッサンスの医学・自然科学教育すなわち「自分の目で見て、自分の手でやってみて、自分の頭で考える」ことを実践した。ライデン大学の医学は、スウェーデンのウプサラ大学、スコットランドのエジンバラ大学とセント・アンドリュース大学に引き継がれた。

ライデン

ライデンは、「落ち着いた大学の街」と称される。医学史関連では、ベッドサイド教育を推進した Herman Boerhaave（以下ブールハーフェ）の名を冠したブールハーフェ博物館やシーボルトがオランダ帰国後 17 年間過ごしたシーボルトハウスなどがある。ライデン中央駅北口には、ライデン大学病院がある。病院東側には、19 世紀後半に医学部キャンパスがこの地域に移転してきた際建てられたレンガ造りの医学部棟が一棟だけ残されている。その東側の道路向かいの緑地には、ブールハーフェの銅像が建っている。

ブールハーフェ博物館は、オランダ最大の医学史科学史博物館で、展示品は科学器具、医学器具、顕微鏡、薬剤器具、キュンストレーキ（紙製の解剖模型、オランダ語で、「人工死体」の意）、肖像画、博物標本などがある。建物はオランダで初めて医学生に対してベッドサイドティーチングが行われた旧セシリア病院(St. Caecilia Hospitaal)であり、1991 年新装オープンした。病院が病人を収容し治療する施設に分化したのは 19 世紀後半からであり、それまでは困窮者全般を収容し世話する施設であった。男女各 6 床の専用病室をライデン大学が借り上げ、1636 年にベッドサイド教育が実施された。パドヴァ大学本館（イル・ボ＝牡牛館）の解剖講堂、植物園、臨床教育などがその後ライデン大学へ大きな影響を与えている。

博物館の目玉は、18 世紀に完成し 19 世紀初めに取り壊されたライデンの解剖講堂の再現展示である。解剖講堂はパドヴァ大学同様すり鉢状の構造で、解剖台がターンテーブルになっている。顕微鏡を世界で初めて考案した Antonie van Leeuwenhoek の顕微鏡が展示されている。顕微鏡とはいえマッチ箱程度の 2 枚の金属板の間に小さなレンズを取り付けたもので、どんな標本もネジでとめて観察した。また外科医コーネリス・ゾーリンゲンが改良を加えた外科器具、生理学者ヤコフ・ヨングロードが開発した人工心肺器やウィルム・ヨハン・コルフが設計した腎透析器など種々の医療機器が展示されている。腎透析器はその後日本にも導入され、慢性腎不全患者の治療に用いられた。なお同館は 2017 年新装され開館された。

国立民族学博物館は、新たな大学病院が駅北に移転した 19 世紀半ばまで大学病院として使用されていた建物である。1823 年から 1830 年まで日本に滞在したシーボルトが日本から持ち帰った品々を基に創設された。保存状態は良好で、数体の青銅製の仏像などもある。民族学博物館から南に下ると、ラーペンブルク運河があり、その両岸は 16 世紀から 17 世紀の立派な建物が並ぶ。その 12 番地は、ライデン大学法学教授フィッセリングの私邸だった所である。そこに津田真道と西周が日参し、直接オランダ法学を学んだ。それを

示すプレートが建物外壁にある。当時のオランダ法制はフランスの法律の影響を強く受けており、明治の医療法制である「医制」がフランスの医療法に類似している。

運河の西側にはシーボルトハウスがある。1830年7月7日に日本からオランダのフリッシンゲンに帰り着き、間もなくシーボルトが居住した大邸宅である。窓から運河が見える1階の部屋で、日本に残した妻「たき」への恋文をしたため「日本」を執筆したとされる。日蘭修交400周年（オランダ船リーフデ号が1600年豊後に漂着）を記念して日本政府が買い取り、2005年春にシーボルトに関する博物館として新装会館した。中にはシーボルトが日本から持ち帰った絵画、漆器、陶磁器、化石、植物標本、衣服、古地図などが展示されている。ハウス奥の庭には、晩年の髭をたくわえた恰幅の良いシーボルト胸像がある。シーボルトハウス前のラーベンプルフ通りを少し南下すると、旧ブルーハーフェ邸がある（その後シルビウスも居住）。

さらに運河沿いを南下すると、ライデン大学本館とその裏手に植物園がある。世界各地の植物を欧州の風土に慣らす目的でつくられたというこの植物園は1596年の開設で、世界で7番目に古い。ここにはシーボルトがオランダに持ち帰った日本の銀杏、榉、紅葉など15種が今でもこの植物園で立派に育っており、その見学コースもある。シーボルトが持ち帰った日本の植物のなかでも、カノコユリの美しさは欧州を魅了した。



旧医学部棟



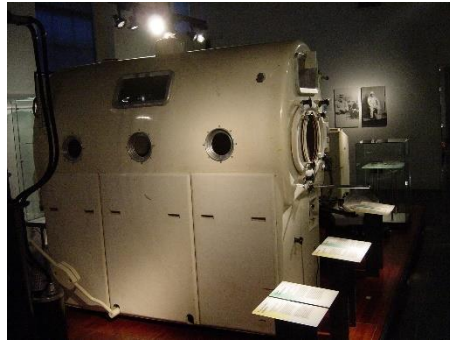
ブルーハーフェの銅像



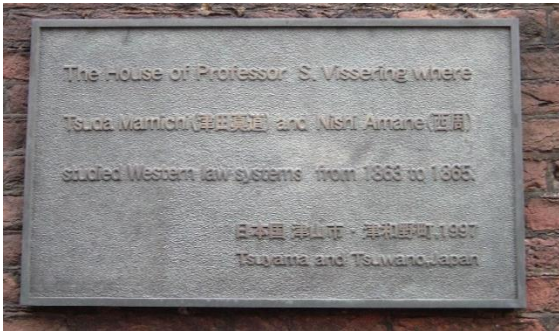
解剖学講堂



コルフの腎透析器



鉄の肺



津田真道と西周がオランダ法学を学んだことを記念したプレート



シーボルトハウス前景（左）、シーボルトハウスに置かれたシーボルト晩年の胸像（右）



ライデン大学附属植物園

ウトレヒト

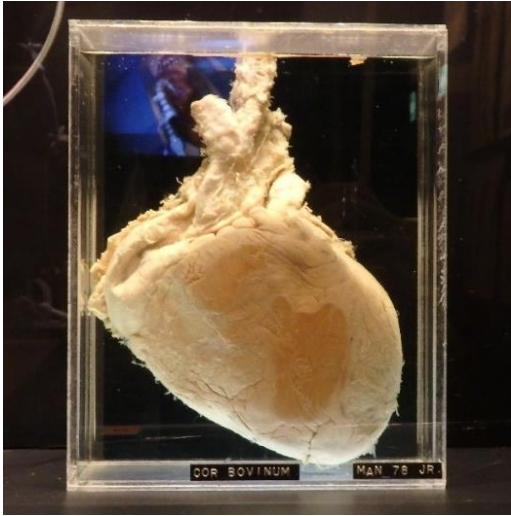
オランダの首都アムステルダムから列車で30分ぐらい南下した所にウトレヒト市がある。スペインからのオランダ独立戦争（1568 - 1648）の最中、北部7州が団結しウトレヒト条約が1579年に結ばれた所が、現在のウトレヒト大学本館内ホールである。そこから7,8分歩いた所に、ウトレヒト大学博物館がある。親子連れで科学実験コースも開かれており、地域に開かれた大学として努力している。博物館としては、大学と関係ある医療器具、化学器具が時代別に並べて展示され科学史が学べるようになっているとともに、ヒトや他の動物の解剖標本などが臓器別に展示されている。ジャワ島で脚気の原因を見つけたオランダ医師 Christiaan Eijkman のノーベル賞受賞証が展示されている。骨格標本（シャム双生児、水頭症、くる病他多数）、「うしの心臓」と称された人の肥大心臓、皮膚結核などの写真、こどもの全身 X 線像（1926 年撮影）など日本では一般公開されないと思われる展示物を親子で見学できる博物館である。ウトレヒト陸軍軍医学校の教官で、その後ウトレヒト大学教授となったドンデルスの眼科書なども展示されている。彼は来日したオランダ医で有名なボードイン（Anthonius Franciscus Bauduin）の先輩で、彼と共同でヘルムホルツの検眼鏡を改良した。その後 Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort（以下ポンペ）が1861年日本に持参している。



脚気の原因をつきとめた Cristian Eikman へのノーベル賞状

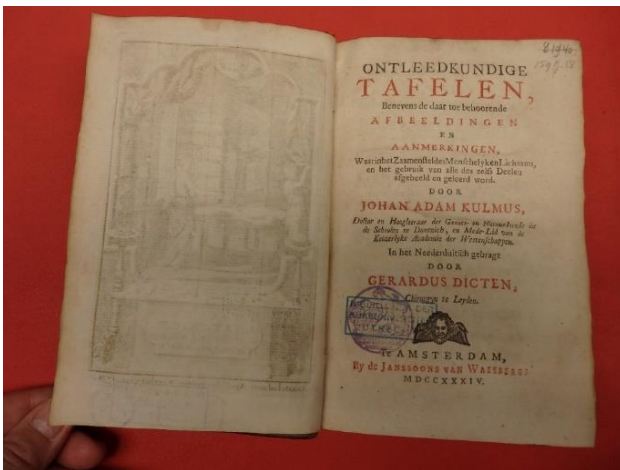


1926年 Dr. D.G.Mulder 撮影 X 線像（左）、側弯女性外観写真（右）



78歳の超拡大心：牛の心臓(Cor Bovinum)と名づけられた（左）、くる病の骨標本（右）

ウトレヒト大学図書館には、「ターヘル・アナトミア」のオランダ語訳がある。原本は、ドイツ人医師ヨハン・アダム・クムルスによる解剖学書であり、日本では杉田玄白、前野良沢らが翻訳して「解体新書」の名で出版した。ヨハン・アダム・クムルスによるドイツ語の原書「Anatomische Tabellen」は1722年にダンツィヒで初版が出版され、1732年に再版された。その後ラテン語、フランス語、オランダ語に訳された。オランダ語版である「Ontleedkundige Tafelen」は、オランダ人医師ヘラルト・ディクテン（Gerard DICTEN）の翻訳により1734年にアムステルダムで出版された。



ウトレヒト大学図書館所蔵の J.A.Kulmus 解剖書（左）、Ontleedkundige Tafelen の扉絵と背表紙（右）

ポンペ以降、1880年代までに14名のオランダ人医師が来日しているが、その中で10名は当時オランダで唯一の軍医学校であったウトレヒト陸軍医学校出身者である。それま

では職人として徒弟制度で養成されたギルド的外科医とラテン語を介して大学教育を受けた学者的内科医が併存した。それらを融合させた医学が、当時ヨーロッパ各地の陸軍軍医学校で始めて教えられ始めた。ちなみに大正年間に官立の単科医科大学に昇格した日本の地方医科大学を「旧6」と呼ぶが、千葉以外の5校は幕末維新にオランダ医が教鞭をとっている。なお旧ウトレヒト陸軍医学校もウトレヒト大学本館から歩いて4、5分の所にあったが、現在はグランドホテルカルルV世として利用されている。なおウトレヒトを訪問された際は、ウトレヒト大学 de Uithof キャンパスにある大学図書館を訪問されることをお勧めする。大イベント会場ごとき近代建築物にも圧倒されるが、そこにはオランダ語訳「ターヘル・アナトミア」や他の医学稀観書が保管されている。あらかじめ依頼しておけば実物を手に取って見ることができる。



旧ウトレヒト陸軍医学校の建物

8. スペイン・ポルトガル

バルセローナ

スペインは地方ごとに「国」があると言われており、カタルーニャ州都バルセローナも独自に歴史と文化を育んでいる。言語はスペイン語（カスティーリャ語）とは別にカタルーニャ語があり、憲法上ガリシア語やバスク語も含め公用語として4言語が併用されている。建築家ガウディーは晩年強烈なカタルーニャ主義に目覚め、国王に対しても終始カタルーニャ語で語りかけたことは有名である。バルセローナには、ニューロン説で有名な Santiago Ramón y Cajal（以下カハール）も旧宅や教鞭をとった旧バルセローナ大学医学部がある。また世界遺産であるサン・パウ病院がある。

カハールが当時勤務したサンタ・クルー病院（現カタルーニャ図書館）は、バルセローナの大通りと言うべきランブラスから病院通りに入って直近の所にある（カルメ通り47番地）。現在は市立図書館として利用されているが、正門を入ると広い中庭があり、古色蒼然とした風格のある建物である。図書館への階段中央部の端には、鼠径部の傷を指差す

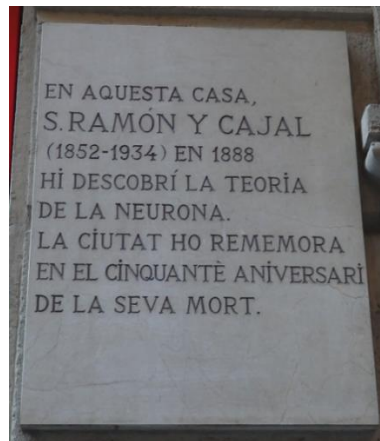
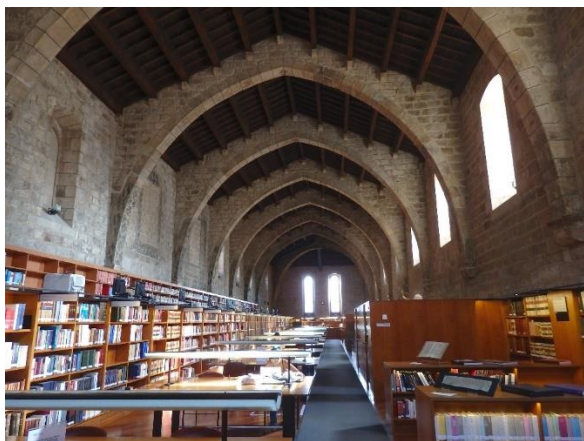
ペストの聖ロッコの像がある。上記のガウディーが市電に轢かれて搬送されたのはこの旧サンタ・クルー病院であり、入院した部屋も見学可能である。研究熱心なカハールは、この病院から歩いて数分の所に居を構えた。旧宅跡（ノータリアート通り7番地）には、「この家でニューロン説を見出した」と説明したプレートがかけられている。当時のスペインでは、真っ当な研究者は自宅に研究室をつくる慣習があった。



旧サンタ・クルー病院入口



現図書館階段中央部の「聖ロッコ」の像



現図書館内部（左）、カハール旧自宅玄関脇の壁に取り付けられたプレート「この家でカハールが“la teoria de la neurona”を見出した」と書かれている（右）

サン・パウ病院は2009年まで病院として使用され、その後老朽化のために閉鎖していたが、2014年から見学可能になった。銀行家パウ・ジルの遺言により、人口増加が著しいバルセロナ市民の幸せのために、市内の6病院（その一つが上記のサンタ・クルー病院）を統合して、新病院を建設するべく14万5千㎡の広大な敷地を確保した。リュイス・ドメネク・イ・ムタネー（1850-1923）が設計し、1902年から1930年にかけて建設された。「芸術には人を癒す力がある」というムタネーの信念に基づき設計し建設されたという。広い中庭で軽度の上り斜面になっており、両側に対照的な2階建て病棟が建てられ、

その周りには狭いながら庭があり、そこに薬草や草花、樹木を植えている。見た範囲ではこのような病棟が6棟建てられ、それぞれ少しずつ外観の形や装飾が異なっている。



サン・パウ病院事務棟とパウ・ジル像（左）、サン・パウ病院各種病棟（右）

ちなみに建設したムンタネーは、教え子であったガウディーの優れた才能にライバル心を持ち、サグラダ・ファミリア聖堂が見えるこの地を選んだという。いつの時代でも、才能ある者が常に平静なる心をもつことは難しいもののようなのである。サグラダ・ファミリア聖堂の正式名称は、「罪滅ぼしの聖家族聖堂」である。バルセローナはガウディーやムンタネーらが才を発揮した建築で有名だが、ピカソやダリが活躍した所でもある。ピカソ美術館には「こども絵は描いたことがない」とする天才ピカソの「科学と慈愛」を見ることができる。この絵画中、医師は「科学」、修道女は「慈愛」の象徴している。

マドリード

16世紀のスペインの医学は世界で最も進歩していたといわれる。現在の医者、病院という概念はなかった。学者（知識を持つ人）と癒す人（外科医など）とに分かれ、両者の間には軋轢があり、病院は貧者、孤児などのための宿泊所（救貧院）であった。王は各地を移動し、首都というものは定まっていなかったが、スペイン・ハプスブルク王朝のフェリペ2世は、3度目の結婚で得た18歳年下の妻、フランス王の長女であるイザベルのために、1561年、マドリードに宮廷を遷し、スペインの首都と定めた。

クリ스티ナ王妃通り、アトーチャ駅（Estacion de Atocha）の広場からすぐの所にソフィア王妃芸術センター（Centro Arte Rein Sofia）、その斜め向かいに王立音楽院があり、小さな小路を隔てたその隣が医師会館である。医師会館の建物（Calle de Santa Isabel 51 Madrid）は、元サン・カルロス大学（マドリッド大学）医学部である。なお医師会館の会議室には、1883年からの歴代医師会長の肖像画が壁にずらりとかかっている。敷地内には他に図書室や大講堂、カハールの大きな立像のある「カハールの庭」があり、その奥にカ

ハール記念講堂がある。カハールにちなんだ記念講堂であり、彼が講義した写真などが掲げられている。



医師会館の玄関脇 カハールの研究していた施設であることを記す記銘板

1904年、カハールは組織学ならびに神経解剖学の歴史的な大著“Textura del Sistema Nervioso del Hombre y de los Vertebrados”を完成した。カハールは、神経系の構造研究に関して、1906年にゴルジと共にノーベル生理学・医学賞を受賞し、今日の神経科学・神経解剖学の基礎を築き上げた巨人である。カハールはゴルジ法を用いて研究し、ニューロン説（各神経は独立した単位であり、接触により刺激が伝導する）を唱えた。一方ゴルジは網状説（神経は網目状に吻合している）を唱え、両者ともノーベル賞を受賞したが、カハールとその後継者たちの業績が現在の神経生理学の基礎となっている。彼は形態の観察によって、神経の機能、伝導まで見通していた。ゴルジの実力を高く評価し援助を惜しかなかったケリカーは、前年の1905年に世を去っていた。ノーベル賞受賞講演でゴルジはカハールを攻撃し自身の網状説を弁護し、ニューロン説への反駁を執拗に試みた。カハールはゴルジに対し敬意を表したが、自分で発見した事実とそれに基づく理論を見事に呈示した。

カハール講堂は、中央に低いスペースのある階段講堂で、入ってすぐ左手の一方は、数段の階段で講壇スペースとなっており、その後壁の黒板の位置には講義するカハールの写真が飾られている。写真のカハールは老いて腰が曲がっているようすで、椅子に座っている。1922年に引退したのだから、おそらく60代であろう。この姿勢で学生たちに背を向けて講義をし、時々振り向いたという。学生たちは、彼が何度振り向くか賭けをしていたが、それを聞きつけたカハールは、ある日、「諸君、きょうは振り向かないよ」と言ったと伝わっている。講堂内の両側壁にはニューロン説の白墨書きや、さまざまな遺品、写真などを展示した飾り筆筒が置かれている。階段講堂は、3方に学生たちの椅子が階段状に並び、講壇の反対側の壁には大きな写真が2枚飾られていたが、1枚はスペインで初めての剖検を行うカハールと数人の助手たちである。また、一方の隅には、古めかしい器具が置かれていたが、カハールが使っていたプロジェクターである。



カハール講堂、「カハールの庭」には、石作りの大きなカハールの全身立像

なおこの元医学部跡から歩いて5分程の所に元カハール研究所（現国立人類学博物館）
ならびにその数軒隣には彼の住居があった。カハールは生涯を通じて、文字通り職住近接
で過ごした。なおソフィア王妃芸術センターはピカソのゲルニカで有名だが、センターが
開設される前はマドリード大学附属病院としてのサン・カルロス病院だったことはあまり
知られていない。1977年に国家により買い上げられ、芸術的歴史的建造物に指定されてい
る。1980年に修築改装が決定され、6年後に今日のソフィア王妃芸術センターとしてオー
プンした。1988年には、勅令により国立美術館に制定された。



カハールが晩年を過ごした住宅の壁に飾られていた銘板。

なお北からマドリッド市内に入る際、道路の左手にカハールの名を冠した病院の建物が
ある。マドリッド自治大学附属ラモン・イ・カハール病院なる近代的な大病院で、彼の名
をとった駅と直結している。病院の裏手の広い庭にカハールの頭部だけの巨大な石像が置
いてあるが、車窓からは一瞬しか見られない。



バス車窓から見たカハール病院

グラナダ

シエラ・ネバダ(Sierra Nevada)山脈の麓にあるグラナダは、ダーロ川をはさんで街で一
番古いアルバイシン地区とアランプラ宮殿（日本ではアルハンブラと言うことが多い）が
ある。ムハンマド・ブン・ユースフ・ブン・ナスルがグラナダ王国を建国したのは 1238
年である。アランプラ宮殿は自らをアル・アフマールと名乗ったこのナスル朝初代王（在
位 1232～1273）によって建設が始まり、7代王ユースフ 1 世（在位 1333～1354）によっ
てようやく完成をみた。当時、この城内にはモーロ人貴族 2000 人以上が暮らしていて、
市場・モスク・住宅街が整備され、貴族の宮殿は 7 つを数えた。



アラヤネスの中庭

市の中心部には旧王立病院がある。この病院はイザベル女王が貧困者救済のために 1400
年代後半に建設を始め、1525 年にオープンしたもので、現在はグラナダ大学医学部の図書
館になっている。スペインでは昔の建物が壊されることなく、形を変えて現在も使われて

いる。グラナダ市内にはひと際大きな建物であるカテドラルがある。モスクを改装した建物である。聖堂内にはいくつかの礼拝堂があるが、とりわけ王室霊廟（Capilla Real）は必見である。中には近代スペインの礎を作ったイサベル女王とフェルナンド王の仰臥石像が祀られている。地下には彼らの棺が安置されている。



旧王立病院正面（グラナダ大学医学部図書館）

トレド

市内にはタベラ病院、正式名は「サン・ファン・パウティスタ病院」（あるいは城壁の外にあるために「アフェラ病院）」と称された病院があった。建物は、スペインのルネッサンス様式の建築を代表する宮殿風建物であり、1541年から1603年にかけて建設された。その設立主旨は、種々の病気に冒された人々の救済（タベラ施療院）と設立者ファン・バルド・タベラ枢機卿の墳墓設置である。現在は美術館として存在するが、どの地図にも病院として記載されている。ガイド付きで見学可能であるが、館内は撮影禁止である。重々しい入り口をくぐり、暗い受付を通り奥の扉を開けると明るい、広々とした中庭とそれを取り巻く回廊、中庭の中央を横切る二階建ての通路が見られる。

館内に戻ると最初に元薬局に案内される。狭いそして暗い部屋、周囲には手作り故に不揃いのガラス容器、また陶器の薬品入れ、正面には多くの小箱を有する古い美しい戸棚あり、調剤した薬は回廊に面した格子のある窓の部屋側の下面に入れ、外の回廊側からそれを取り出す仕組みである。二階に上がると数多くの肖像画やタペストリーが展示されている。肖像画の王族や貴族の顔立ちにはなにか共通したものがあり、特に下顎の突出等、当時の上流階級の複雑な婚姻関係によるものと思われる。更に図書室らしき部屋に入ると、そこには古い病院当時の書類の冊子が展示されている。カルテではなく「管理誌」と説明された。付属の教会には、エル・グレコが最後に描いたといわれる「キリストの洗礼」が教会の正面右の祭壇に掲げられている。



タベラ病院正面



タベラ病院中庭

サンチアゴ・デ・コンポステラ

ガリシア州の Santiago de Compostela は古くからローマ、エルサレムとならぶカトリック信者の巡礼地である。聖ヤコブの遺骸が祀られる大聖堂はカトリック信者の崇敬の的となり、欧州各地から巡礼が訪れる所となっている。その隣は旧王立病院（正式名：Hospital dos Reis Católicos）である。アラゴン王国王太子（後国王）フェルディナンド（Ferdinand, 1452-1516）とカスティーリャ王国の王女イサベル（Isabel, 1451-1504）は敬虔なカトリック信者であった。スペインの巡礼を終え、1486年にサンチアゴ・デ・コンポステラに仮オスピタルを建て、病人、貧乏人、老人、巡礼者を収容し、世話を開始したのが王立病院の始めである。1954年に9か月間改装工事され、スペインの高級ホテルであるパラドール（正式名はパラドール・デ・サンチアゴ・オスタル・レイス・カトリコス）として開業した。

本格的な病棟は、1526年に当時の国王カルロス5世(1500-1558)が竣工させた。従来の修道院附属のオスピタルではなく、王家の経営による新しいタイプの病院で、医師、看病人、司祭が常駐した。1954年のホテルへの転換まで、病人、貧乏人、老人、巡礼者の世話を無料で続け、また医学教育も実施された。正門玄関周辺の柱にある聖人や天使の石彫刻の装飾は見事であり、また入口の左右には王家の紋章の浮彫がある。世界でも有数規模の歴史的建造物である。建物は正方形で内部には4か所の石畳敷きの中庭があり、薬草園として利用されていた。各中庭の中央には井戸、周囲は修道院を思わせる回廊があり、かつて病室だった広間に通じた。なお王立病院の横は現在サンチャゴ医科大学、対角線上には聖ジェロニモ学校と称される貧しい学生のための学舎があった（現薬学部）。



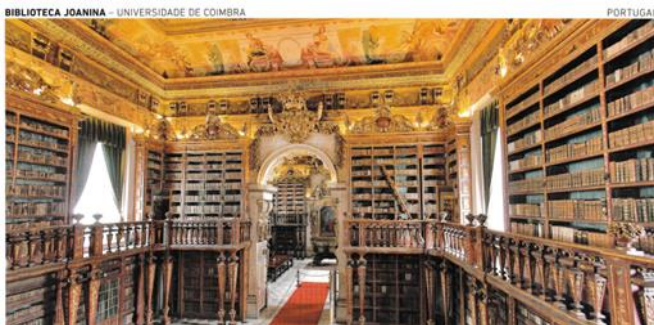
旧王立オスピタル（正式名：Hospital dos Reis Católicos）（左）、パラドール・デ・サンチアゴオスタル・レイス・カトリコス正面玄関と旧オスピタルの門柱装飾（右）



パラドール・デ・サンチアゴオスタル・レイス・カトリコス中庭

コインブラ

ポルトガル中部のコインブラ(Coimbra)の旧市街丘の上には、ポルトガルで最も歴史あるコインブラ大学がある。1290年国王ディオニスによりリスボンに創設された大学は、1308年コインブラに移転し、その後リスボンと何度か移転を繰り返したが、1537年最終的にコインブラに落ち着いた。1911年にリスボン大学が創設されるまで、ポルトガルで唯一の大学であった。1724年に建てられた蔵書30万冊の図書館、チャペル、ラテン回廊などがある。「無情の門」なる鉄の門をくぐると広い中庭がある。



ジョアン図書館内（大学発行絵葉書より）

UNIVERSIDADE DE COIMBRA

PORTUGAL



コインブラ大学中庭（大学発行絵葉書より）、左の黄色壁の建物が図書館



鉄の門



コインブラ大学図書館玄関



大学内講堂



コインブラ大学医学部

コインブラのミゼルコルディアは、1500年の王妃レオノール・デ・ヴィゼウが後援して設置された。教会、博物館、旧入所施設などがある。旧入所施設の規模は大きく、現在コインブラ大学心理学部校舎として利用されている。館内には歴史的な聖物、聖人像、修道女像などがある。



コインブラのミゼルコルディア玄関



ミゼルコルディア内展示



ミゼルコルディア内聖母画など



ミゼルコルディア中庭



ミゼルコルディアから市内を望む

ポルト

ポルトは名前が示す如く港湾の地であり、ポルトガルの首都が最初におかれた所である。1911年に創設されたポルト大学には、優秀な学生が学んでいる。大学医学部と病院(Faculdade de Medicina-Hospital S. João)は、港から北方の丘の上にあるポルト大学医学部の一角に医学史博物館がある。正式名は、Museu de Historia da Medicina Maximiano Lemosである。博物館の名となっているLemosは、ポルト大学を卒業し、その後病理学教授や新設された医学史教授を歴任した。博物館内は、7つほどの部屋と通路に医学史関連の蔵書、医療用器具・器材、印刷物、皮膚科などで用いるワックス教材などが所狭しと展示されている。

日本とヨーロッパの文化の接触が始まるのは、天文12年(1543年)ポルトガルの商船が種子島に漂着してからである。この船には船医が乗り組んでいた筈であり、以降日本でのキリシタンの宣教には、司祭に医師が随行し医療は伝道の有力な補助手段として利用された。この年はベザリウスの「人体の構造」が出版され、コペルニクスが「地動説」を発表した科学・医学史上特記すべき年である。



ポルト大学医学部と病院(Faculdade de Medicina-Hospital S. João)前景



ポルト大学医学史博物館 Museu de Maximiano Lemos



当時の保育器、哺乳瓶

9. ハンガリー・チェコ

ブダペスト

東欧諸国は以前の共産圏時代よりは訪問しやすいのであろうが、現在でも日本からの直行便はない。ハンガリーの首都ブダペスト市内には Ignaz Philipp Semmelweis（以下センメルワイス）の名が入ったセンメルワイス通りと顕彰レリーフなどがある。彼が働いた病院（聖ルカ病院）および銅像、彼の名がついた病院（筆者訪問当時は循環器を専門とする病院）などあり、ハンガリーでは最も名の知れた医師である。ハンガリー人のセンメルワイスはウィーン大学を卒業し、同大学附属病院産科助手として勤務した。産科病棟の産褥熱の原因が、医師が解剖した手で分娩を介助するためと確信し、分娩介助前に塩化カルシウムで手指消毒する必要性を主張した。死亡率は見事に下がったが、頑迷な産科教授は成果を認めず、大学から追放した。そのため失意のセンメルワイスは母国ハンガリーにもどり、ペスト大学医学部（1969年センメルワイス医科大学と改称）産科教授として勤務した。その後精神を病み、1865年8月13日47歳の若さでウィーン精神病院で亡くなった。死因は右指の壊疽からの感染による膿胸と髄膜炎と言われている。ちなみに英国のジョセフ・リスターが石炭酸で複雑骨折の保存的治療を実施したのは、センメルワイスの死の前日である。

センメルワイス医学史博物館は、ブダの王宮の丘の南下にあるセンメルワイスの生家を利用して、1686年に建てられた黄色の大邸宅である。博物館内は、他の医学史博物館同様健康の神ヒュゲイアに始まりヒポクラテス、ガレヌス、アヴィセンナ、パレ、パラセルスス、レーヴェンフックなどの医学史ではおなじみの歴々の資料が展示されている。個人的に興味を引いたのは、センメルワイスの復元された居室で、壁には彼の両親とともに彼の写真が掲げられていた。また1862年に彼の著書「Offener Brief」は、ガイド女史の言では「館内一押しの貴重なる展示品」とのことであった。

市内の聖ロカ病院前の広場には、感謝のまなざしで見上げる母子のセンメルワイス大理石像がある。なおセンメルワイスの墓は市内のケレベシ墓地にある。側面にアスクレピオ

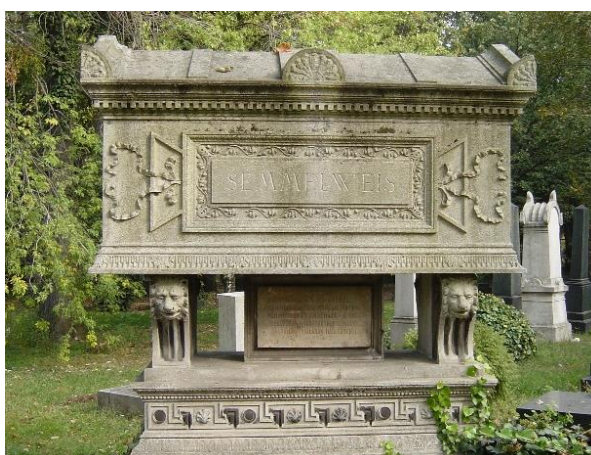
スの杖が彫られた一見の価値ある石棺であるが、遺骨は医学史博物館中庭の壁の中の骨壺に納められている。また市内のマーチャーシュ教会前の広場には立派なペスト塔がある。



センメルワイス医学史博物館



博物館の壁の中にセンメルワイスの遺骨が納められている（左）、博物館玄関ホールでのセンメルワイスのレリーフ（右）



聖ロカ病院前のゼンメルワイス像（左）、センメルワイスの墓（右）



マーチャーシュ教会前の広場にあるペスト塔

プラハ

チェコ共和国は中央ヨーロッパに位置し、ドイツ、ポーランド、オーストリア、スロバキアの4カ国に囲まれた共和制国家である。ハプスブルク家の支配や二度の世界大戦の動乱の歴史を経て、1989年のビロード革命により共産主義体制が崩壊し、民主主義に移行した。人口は1,054万人で、医学部は国立マサリク大学・国立カレル大学にあり、各大学で授与される学位は、EU諸国では自動的に受け入れられる。カレル大学は神聖ローマ皇帝カレルIV世でもあったボヘミア王国のカレル王（1316-1378）が1348年4月7日に大勅書を発布し、パリ大学を規範として設立された。ボローニャ大学、パリ大学に次いで最も古い大学であり、創立期には人文科学、医学、法学、神学の4学部から成り立っていた。

この国の医学者で最も有名なのはJan Evangelista Purkyně（以下プルキンエ）である。ボヘミアの小都市Libochoviceで貧しい農家の長男として生まれた。10歳の時に父親が亡くなり、モラヴィアの神学校や修道会で聖職者になるための教育を受けた。18歳でプラハのカレル大学哲学科に2年間在籍し、その後医学部に入学した。プルキンエは臨床より研究を目指し、特に生理学に興味をもった。卒業後、同大学解剖学・生理学教室の助手として勤務し、光覚についての研究を進めた。彼の自由な考え方が災いし、なかなか地位が得られなかったが、40歳でブレスラウ（旧Schlesienの首都、現ポーランドのWroclaw）生理学教授となった。

プルキンエの研究は類まれな優れた観察と実験に支えられ、実験薬理学、実験心理学、音声学、組織学、胎生学および人類学にわたる。彼の名がつく用語としては、プルキンエ像、プルキンエ現象などの光覚に関する現象、プルキンエの眩暈の法則、プルキンエ小胞、プルキンエ細胞、プルキンエ線維などがある、特に彼の名を不朽にしたのはプルキンエ細胞だが、彼が図示したのは西洋なし形の細胞体と軸索および樹状突起の起始部のみで、複

雑な突起の全貌の解明は 30 年後のゴルジ法の出現を待たねばならなかった。彼の弟子には、Rosenthal fiber で名を残した Rosenthal がいる。プルキンエは、63 歳の時にカレル大学生理学教授に任命されたが、研究からは遠ざかり、教育を通して祖国の科学振興に挺身した。晩年は尿路結石がありその激痛にめげず、1869 年に亡くなるまで学問、文化、政治など多方面にわたり活動した。

市内にはプルキンエの住居跡がある。それを示すプレートには、直訳すると「ZDE ŽIL A ZEMŘEL (ここで生きて死んだ) JAN EV · PVUKYNĚ (プリキンエ) VENOVARNO (献呈) SP · C · LEKARV (チェコ医師会) A (and) VM · BESEDOV (芸術家協会)」とある。この建物の側面通りは、現在プルキンエ通り(PURKYŇOVA)と称されている。なお医学とは直接関係ないが、ケプラーの旧居跡も市内にある。



フラチャニ広場のペスト塔



カレル大学本部



プルキンエ住居跡とそれを示すプレート (写真上部) (左)、プルキンエ通り (PURKYŇOVA) (右)



ケプラーの旧居跡を示すプレート

10. ギリシア

コス

コス島は医学の父ヒポクラテスが誕生し、「医学の神」アスクレピオスの神殿（アスクレピエイオン）があり、医師であれば是非一度は訪れたい所である。大半は飛行機でコス島に到着するが、その空港はヒポクラテスにちなんで名づけられている。



コス島 ヒポクラテス空港

コス島市内中心部には古代アゴラ（市場）の遺跡があり、誰でも自由に歩ける公園になっている。その広場の一角にコス考古学博物館がある。古代の石像が主たる展示品であるが、館内の一番奥にあるヒポクラテスの彫像は必見に値する。右腕は欠損しているが、アスクレピオスの杖を持っていたと推測されている。ヒポクラテスは健康と病気を自然現象として客観的にとらえ、医術を魔術から切り離れた。病気は体を構成する4体液の不均衡でおこり、健康となろうとする自然の力(physics)があるとする四体液説を提唱した。プログノーシスを重視したが、特別な医術がない当時では、自然治癒できるかどうかの見極を重視した。治療には薬用植物が用いられ、「ヒポクラテス全集」にはケシ、サフラン、シヤクヤク、ゲンチアナ、カンソウなどをはじめ300近い薬用植物があげられ、その効能や使用法が記されていた。「vita brevis, ars longa, occasio praeceps, experientia fallax,

judicium difficile」はヒポクラテスの言である。

この博物館から徒歩で数分のところに、ヒポクラテスの木（プラタナスの樹）がある。2400年前にヒポクラテスにより植えられたと信じられている。この樹の下でヒポクラテスは弟子たちに医学を講じたとされている。この樹の若木を日本の医学者が本国に持ち帰りいくつかの病院中庭に植樹された。



ヒポクラテスの木（プラタナスの樹）

現代のコス島は観光リゾート地に様変わりしているようであるが、本来は古代医術の首座を占めた島である。コス島のアスクレピエイオンは、コス市近郊の丘陵地帯のはじまるあたりで、鉱泉からもさほど離れておらず温暖で健康に良い高台に築かれている。この地の地質調査によると、破碎状石灰礫岩(ブレッシア)がドロマイト化しており、湧き出す鉱泉がミョウバンや石膏に富むことが分かった。ミョウバンや石膏の主成分はマグネシウムであり、この泉の水を飲めば胃腸病や高血圧に効果があったと思われる。現代の観点からは、アスクレピオス神殿は、幾つかの宗教的装飾をもった一種のサナトリウムである。

糸杉に縁どられた並木道を入り口に向かって歩を進めれば、木立を洩れた光が影と織りなす縞模様のお陰で、寛ぎに満ちた穏やかな気分となる。患者はそこに宿泊し、処置を受けた。処置は心理学的なものであり、アスクレピオスの業績、その神殿での成功例や神殿の治療薬の講話も行われた。また祈りと生贄、鉱泉入浴に続いて油の塗布やマッサージなどが行われた。患者は聖なる場所で眠りにつき、夢を見ればその夢の解釈が行われた。聖なる蛇がどのような場所をなめまわしたか、あるいは脱血あるいは食事による治療を続けるとどのように治っていくかをガイドから説明された。今でも暗示が「医療的效果」を強めることはあると思われる。

筆者が同行の先生方とコス島を訪れた際には、あらかじめ当地で「ヒポクラテスの誓い」の儀式をツアーの中に組んでもらっていた。誓いの儀式は、アスクレピオス神殿の方から寂しい葦笛の音が鳴り、白い純白の衣装をまとった女性がバラをかごに携えてしずしずと階段を降りて来る。少し体を低くさせながら降りてくる姿は、清楚そのものであった。最

後には月桂冠をかぶり両側に巫女をたずさえた赤衣の男性がつきしたがった。その後階下の祭壇まで歩み寄り、「ヒポクラテスの誓い」を読み上げた。欧州では、前述したようにモンペリエ大学医学部などで卒業式にこの誓い儀式が実施されている。“*vita brevis, ars longa, occasio praeceps, experientia fallax, judicium difficile*”はヒポクラテスの言である。



アスクレピオス神殿第2の高台アーチ、アーチ下部には噴水や貯湯池がある、右方は祭壇に通じる階段（左）、アスクレピオス祭壇から階下のローマ人の神殿と浴場を望む、遠景の土地はトルコ（右）



ヒポクラテスの誓いの儀式（左、右）



ヒポクラテス像 (図中央)



アスクレピオス像



博物館内大広間 (アトリウム) のモザイク絵、アスクレピオスの到来を迎えるヒポクラテス



コス市博物館内のヒギエイア



エフェソスのアルテミス像 (ローマ時代)

エピダウロス

アテネから 80km ほどの距離であり、コリントス地峡からサロン湾を左に見ながら南下した所にある。コリントス地峡から南へ、さざ波が光り輝くサロン湾の広がりを見

て松林の起伏を抜けていくと、一時間ほどでパレア・エピダウロスの村に出る。古代には有力ポリスの一つであったエピダウロスがあり、海に突出する小高い岬がアクロポリスとなっている。この村から西に向かって10キロほど谷を分け入ったところに、病を癒す神として広く崇拜されたアスクレピオスの広大な神域があった。このアスクレピオスの神域が「病院」の始まりといわれている。アポロンの息子であるアスクレピオスは、手に蛇の巻きついた杖を持つ「医の神」である。ギリシア全土に300以上の神殿があったと記録されているが、現在数箇所のアスクレピオス神殿跡が知られている。エピダウロスの史跡は大規模で保存もよく、一度は訪れたかった史跡である。

アスクレピオスはエピダウロスで生まれたと考えられており、あらゆる治療法に通じ、死人でさえも生き返らせた。ヘレニズム時代のギリシア時代の各地でアスクレピオス信仰が広がり、それぞれの聖地にはエピダウロスからこの神を勧請したと伝えられている。観光としてはエピダウロスの劇場が有名であるが、本来は治療を求めて集まってきた参詣者のために構築されたものである、エピダウロスは前4世紀末から前3世紀にかけて最盛期を迎え、4年に1回開催のアスクレピオス祭では運動競技や演劇が行われた。ちなみにアスクレピオス神殿は治療崇拜の中心であり、エピダウロス以外では、コス、クニドス、ペルガモンなどが最も盛大に人を集めた。

エピダウロスの遺跡には、治療を願う参詣者のための宿泊施設、沐浴などのための浴場、犠牲獣の肉が供されたギュムナシオン、音楽堂、運動のためのスタディオンなどの施設の集合体であり、現代風に言えば「健康ランド」と称すべきと思われる。参拝者は数日の入浴で身を清め神に祈った後、初めて神殿に入ることが許された。病人は神職による祈祷を受け、神の像のもとで一晩睡眠し、神が病気を治す夢を見て神殿を後にした。その夢をもとに神職が判断し、治療法を定め、あるいは睡眠中に神の装束をつけた神職が現れ治療した。なおアスクレピオスに捧げる祭典では運動競技会と音楽コンテストが行われ、そのための競走場、浴室、体育場、劇場などが発掘されている。



エピダウロス神殿跡

エピダウロス博物館では古代ギリシア時代の医療器具が展示してあり、細かいピンセットやハサミなど色々な器具がある。その時代は治療を受けて良くなると自分の病変部位の石像を神殿に奉納する風習があったので、人々が奉納した自分の病変部位のレリーフが多

数展示してある。医神アスクレピオスの石像もある。博物館から 800m くらい離れた場所には大きな円形劇場がある。劇場の 2/3 は上部まで 55 段の石造りの観客席になっており、14,000 人が収容できた。劇場の底の中心部に立つと声が劇場全体によく響いた。



博物館内各アスクレピオス像



エピダウロスの劇場、座席数は 1 万 5 千席

オリンピア

オリンピックの発祥の地である。オリンピア遺跡入口を目指して緑の木立の中を進むと、低木はほとんどがオリーブの木で、ところどころに深緑の空に伸びる松が印象的である。遺跡はクロニオン（またはクロノス、クロノスはゼウスの父の名）の丘の麓に位置する。紀元前 10 世紀頃から住居地区として存在し、B.C.776 年に第 1 回古代オリンピックが開催された。その後 A.D.393 年の最終回までの約 1200 年の間に建造物も次第に増設され、時代的段階的変貌を重ねている。聖域の南側中央にあるゼウス神殿跡は、ペロポロス半島最大であり、古代オリンピア競技が捧げられた。スタディオンは、古代ギリシア時代（BC8 世紀頃）からローマ時代までのオリンピック 1200 年の間に 5 度にわたり改修されたとき、現存する遺跡は BC4 世紀中頃までに完成された第三期のものである。スタディオン遺跡には徒競走トラック、そのスタート点とゴール点に埋められている敷石（スタートで選手が足をかける溝が見られる）、南土手にはヘラノディカイと呼ばれる審判席、その向かい北側正面土手にディミトラ・ハミニ（女神）の祭壇（巫女が着席したときされる）が見られる。

元来スタディオン（ギリシア語: $\sigma\tau\acute{\alpha}\delta\iota\omicron\nu$, ラテン語: stadion）とは、古代ギリシアおよびローマで使用されていた距離の単位で、人の歩行により測られたとされる。古代オリンピック競技では、石ブロックのスタートラインから一直線に1スタディオンの距離を走る短距離走＝スタディオン走が基本とされた。伝説ではヘラクレスの足の大きさを600倍した距離（継ぎ足歩行で測る）をオリンピックの徒競走距離に定めたとされ、現在遺構に残るスターティングブロックとゴール地点のブロックから1スタディオン＝192.8mとされる。現在ギリシアの他の地域にもスタディオン遺跡が残るがデルフォイやアテナイは178m、エピダウロス181mと差が見られるのも、人の足のサイズの違いのためとされている。また、このスタディオン走トラックとそれを囲む観客席を含めた競技施設をスタディオンと呼ぶようになり、現在のスタジアムの語源になっている。



ギムナシオン（体育練習場）遺構、スタディオン競争練習場などの運動場の周りを4棟の列柱廊館が囲んでいたとされる



ゼウス神殿跡（左）、スタディオン遺構、スタディオン東端からゼウス神殿のある神苑（スタディオン入り口方向）を望む（右）

デルポイ

コリントス湾の北岸では、夏も雪をいただくパルナッソス山が、神々しい姿でそびえ立っている。アポロンの聖域はパルナッソス山南面にあり、古代最も有名な神託所であった。

ここが世界の中心と考えられたのは、ギリシア神話にさかのぼる。自らが支配する世界の中心の場所を探ろうとしたゼウスが、大地の東西の両端から二羽の鷲を放つと、その二羽がデルフィの上空で落ち合って舞い降りたとされる。その神聖なシンボルの一つがオムパロス（へそ）である。この聖域がギリシアで類まれなのは、真の意味で国際聖域だったからである。古代ポキスの領域にありながら、ギリシアの12の都市の代表24名からなる委員会（隣保同盟=アンフィクチュオニア）の管理下にあった。なおデルポイから車で10分ほどの街名がついたアラホバ街道には、癌の細胞診断の父と言われているパパニコロウ（George Nicolas Papanicolaou）の像がある。



オムパロス、神殿に通じる途中路脇にあるレプリカ（左）、博物館内の本物（右）



アポロ神殿、巫女ピュティアの口を通して神託が告げられた聖域



パパニコロウ（George Nicolas Papanicolaou）像

アテネ

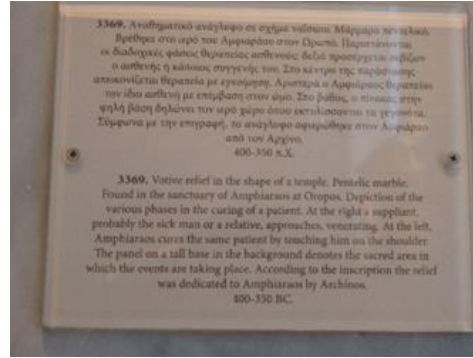
アテネ国立博物館には、ギリシアにある各神域遺跡から出土した「本物」が展示されている。例示すると、エピダウロスの医神アスクレピオスの像やミケーネ円形墓から発掘された黄金のマスクなどである。



アテネ国立博物館前景（左）、エピダウロス神域から出土された医神アスクレピオスの像（右）



ミケーネから発掘された黄金のマスクなど



前4世紀奉納された浮彫彫刻、オロポスにある英雄アマフィアラーオスの聖所で夢占いと治療をする医神アンフィアラーオス、奥では眠っている患者の肩を蛇が噛み、前方では神が同じ患者の同一個所を治療している（左）、「アルキノスがこれをアンフィアラーオスに献納した」と記された碑文（右）



多産の女神アルテミス像（エフェソス出土）

アテネのアクロポリスは、海拔 156 メートル、周囲からの比高 70 メートルほどの石灰岩の丘である。新石器時代から集落が営まれ、歴史時代に入るとアテネの最も重要な聖域として発展した。頂上にあるバルテノン神殿が有名であるが、医学に関係深いのはアクロポリス南麓にあるアスクレピオス神殿である。ペロポネソス戦争が始まってまもなく、アテネには疫病が流行し、ペリクレスなど多くの市民が命を落とした。「ニキアスの和」により戦争が小休止した前 420 年、テレマコスがエピダウロスから医神アスクレピオスをアテネに勧進した。



アスクレピオスの神域



パルテノン神殿



プロピュライア：Propylaea=pro（前）+pylos（門） pylos（幽門）=pylos（門）+uros（番人）の意である



アカデミー、プラトンとアテナ女神像（左図左）とソクラテスとアポロン像（左図右）、アカデミー内講堂（右）

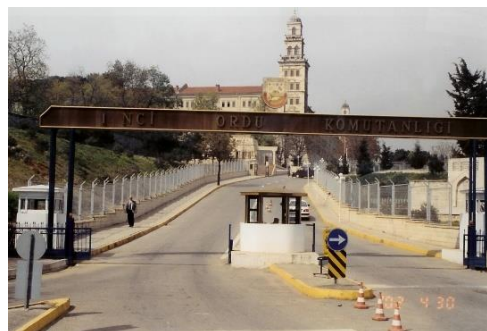
プラトン（紀元前 427～紀元前 347 年）はアテナの名門に生まれた。本名はアリストクレスだが、体格が立派で大きかったので、「大」「広い」という意味のプラトンと呼ばれた。アテナイ郊外のアカデモスに学園を創設し、自分の理想と目的にかなった教育活動を行い、多くの人材を養成した。この学園は全寮制の学校で、学則を作り、講義室、討論室、博物館を設備し、共同生活をしながら研究・教育が行われた。この学園の名は地名にちなんで「アカデメイア」と称された。入り口には「幾何学を解せぬ者は、入るべからず」なる言

葉が掲げられていた。プラトンは哲学を学ぶためには第一に数学的な要素が必要と考えたからである。ギリシア全土から優秀な哲学者や科学者が集まってきたが、その中で最も傑出した弟子がアリストテレスである。

11. トルコ

イスタンブールを訪れる誰も見学するトプカプ宮殿からボスポラス海峡を眺めると、アジア側に白い建物が見える。18世紀後半セリム3世が建てた兵舎で、現在も「セリミエ兵舎」と呼ばれている。この兵舎に、1854年10月21日ロンドンからコンスタンチノーブルに38人の看護師を率いてナイチンゲールが出発した。ここがクリミア戦争で送られてくる英国の戦傷兵を彼女らが介護したとされる当時のスクタリ野戦病院である。両側に塔がみえ、その左側にナイチンゲール博物館がある。現在トルコの軍団司令部が置かれているため、司令部に予め許可を取らないと入れない。

博物館の4階にナイチンゲールが居間として使用した部屋があり、執務に使った机などが置かれている。他に彼女直筆の手紙や関連する写真なども展示されている。当時の病院は、黒海からの船で負傷兵が送られてきたが、英国兵に限られていたことは知られていない。病院は3階からなる巨大な長方形の建物で、閲兵場にもなっていた中庭を取り囲んでいた。各階に多くの負傷兵が収容されていたが、長方形の建物の四辺をまわると1つの階で732メートルにもなる。ナイチンゲールらが派遣された頃（1854年11月初め）には負傷兵の搬送は増加し、3週間で患者数は2300人にもなった。病院への必要物資は届いておらず、洗面器やタオル、石鹸などもなかった。病院環境は劣悪で、彼女の赴任の4ヵ月間換気のできる所はなかった。蔓延する赤痢、跋扈する虱、ほとんど成功しない切断手術のため、最多死亡は1日70人にもなった。



旧スクタリ病院、左の塔にナイチンゲール博物館（左）、正門入り口（右）

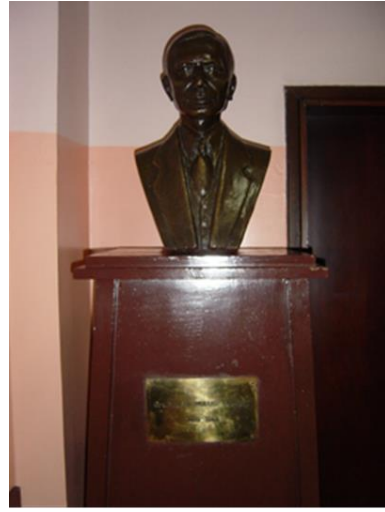


博物館入口表札（左）、博物館内「病人にランプをかざすナイチンゲール」像（右）

なおイスタンブールには、Hulusi Behcet（以下ベーチェット）が勤務したイスタンブール大学の皮膚科学教室がある。彼は初代の皮膚科長として15年間勤めた。外来奥には皮膚科長室があり、筆者が訪問した際も使用されていた。ベーチェット病はシルクロードに沿った地域に発症していることからシルクロード病とも言われており、日本人にも罹患者がいる。「同病相哀れむ」トルコはきわめて親日的な国である。テレビなどで目にするグラッドバザールを突き抜けた裏手に医学部と病院がある。ベーチェットはブタペスト、ロンドンで研究した後、初代の皮膚科長としてイスタンブール大学皮膚科学教室に15年間勤め、1936年にベーチェット病を報告した。2008年に同好の先生方と訪問した際には後任の女性教授が説明がてら外来を案内してくれた。ちなみにベーチェットは、彼女の発音ではベーチェットよりベーシェットと聞こえた。外来の廊下には教授の胸像が置かれていた。外来奥には、皮膚科長室（ベーチェットが在室した教授室）があり、現在も使用されている。大学内の図書館は、彼の名前を冠して「ベーチェット図書館」と称されている。

ベーチェット病は西ヨーロッパやアメリカでは稀である。最多の頻度を示すトルコでは10万人当たり100人以上発症し、日本、韓国、中国、イラン、サウジアラビアなどでは10万人当たり20人前後と報告されている。西欧では50万人あたり1人とも言われ、医療先進国であるアメリカにおいてさえこの疾患についての治療経験は乏しい。自己免疫疾患の中では珍しく男性に多い。

イスタンブール大学本部の北側にはスレイマニエモスクがあり、その後方の道路に面してスレイマン1世が16世紀半ばに神学校、病院ならびに医学校、貧者のための給食所跡などの「スレイマニエ施設群」がある。中世のヨーロッパは戦乱が続き、学問はほとんど停滞し医学は衰退した。一方アラビア医学はギリシアやローマ医学を継承し、イブン・シーナー（アヴィセンナ）など中世の優れたアラブの医学者たちによる発見や発明は、現代医学の基礎になっている。医学史の観点からも欧州一辺倒に陥らず、イスラム医学を再認識する機会としてイスタンブール訪問を勧めたい。



イスタンブール大学正門（左）、皮膚科学教室内のベーチェットの胸像（右）

ペルガモン

ペルガモンは医学に多大なる影響を与えたガレノスが生まれた地である。トルコイズミールからエーゲ海岸沿いの国道を 2 時間ほど行くと、ほどなく小高い丘があるペルガモン（現ペルガマ）遺跡群が見えてくる。アレキサンダー大王亡き後、分割された諸王朝の一つで、リュシマコスがこの地を開いた。そこにはギリシア文化に倣い、アスクレピエイオンとアクロポリスが建設された。アスクレピオンはヒポクラテスの時代から 200 年ほど後に作られ、ヘレニズム期に栄えた医療施設であった。当地のアスクレピオス信仰は、紀元前 4 世紀にギリシアのエピダウロスから導入され、アスクレピオスを祭る神域がつけられた。ローマ帝政期には、当時の最先端の医療技術を集めた総合療養センターであった。

現在神殿の入口までは、聖なる道とその両側に並んでいた柱廊の大理石列柱が残っている。病に悩み救いを求める人や、病が癒えた後感謝を伝えたい人などが歩いた。赤紫色の安山岩の敷石を踏んで西に向かえば、神殿の前庭に蛇と腕が彫刻された石灰岩の「聖蛇の柱」がある。ガレノスに診療を拒否された重病患者が腕で蛇毒を飲んだところ治癒したことに由来した柱である。この結果を知ったガレノスは、アスクレピオスの神託だと信じ、2 匹の蛇を医神の使いとして崇敬し、以後アスクレピオスの象徴として用いたと傳承されている。大地母神の使者として生命力の象徴である蛇は、医療の世界では常に再生と復活のシンボルとして崇拜され、古代のアスクレピエイオンでは蛇が飼われていたとされる。

ギリシアのアスクレピエイオンとしてコス島やエピダウロスは紹介したが、どこの神域でも神殿に加え図書館跡、野外劇場、聖なる泉などがあった。病める人は神殿に入り、貢ぎ物をささげ、その後聖なる地下道を通して治療室に入った。地下道の岩組のトンネルの天井には、5 メートル間隔で穴が開いており、地下道を通る患者たちに向かって「あなたは治る、アスクレピオスの恵みで快癒する」と囁いて、暗示療法をする仕掛けとなっている。奥の治療室では、沐浴、食事療法、薬草療法に加え、夢の中で神に会って心癒をえる

一種の催眠療法（暗示療法）が実施された。これら療養施設の反対側には円形劇場で気晴らしの観劇を行い、総合的なリクリエーションも試みられた。この意味で、アスクレピエイオンは心身調和と統一を目指す保養施設であった。医療技術が未発達な時代であり、当時できることは限られていた。ちなみに神殿入り口には、「これより先、死は入ることを許さず」と書いてあったとのことである。

なおこの神殿から聖なる道を振り返ると、小高いアクロポリスが遠望できる。上中下と3つの街に分かれ、王城、神殿、大劇場、図書館、体育館、商店街などがあった。ベルリンのペルガモン博物館にはゼウス神殿があるが、なんとこの地から神殿ごと運び去ったドイツ人には恐れ入った思い出がある。



アスクレピエイオンの聖なる道



アスクレピエイオン外観、右に北回廊と劇場、中央に地下道入口（左）、アスクレピオス神殿前庭の「聖蛇の柱」（右）



地下道入口



地下道



治療棟外観



南回廊（手前）とアスクレピエイオン内部、奥には劇場（左）、北回廊から見たアクロポリスと頂上の野外劇場（右）

エフェソス

エフェソスの町は紀元前 11 世紀にイオニア人によって建設され、紀元前 6 世紀にはエーゲ海貿易と殖民によって大いに繁栄した。エフェソス遺跡内には、アゴラ（広場）、1500 人を収容した音楽堂、ヘラクレスの門、トラヤヌスの泉、ハドリアヌス神殿、ケルスス図書館などが往時の繁栄を偲ばせる。ケルスス図書館は、2 世紀頃南アジア総督ケルススが父親の埋葬供養と記念のために建設した。1 階の円柱はイオニア式、2 階の円柱はコリント式になっており、当時世界で最も美しい図書館であった。この図書館のある角を曲がり、大理石通りを歩いて行くと、右手の斜面に紀元前 3 世紀に建設された大劇場がある。なお興味深いことに、当時にも水洗式トイレがあった。大理石のベンチに穴が開いているだけで仕切りはなく、下には水が流れる水洗式で、腰かけて議論を楽しめた。



ケルスス図書館



水洗式トイレ



24,000 人収容できた大劇場

ロードス島

アフロディティが貝にのって流れ着いたとされるのが、ロードス島である。第 1 回十字軍の後、聖地エルサレムを守るため聖ヨハネ騎士団が結成されたが、その騎士団が駐屯した地である。聖ヨハネ騎士団長の館は豪華絢爛な建物であった。1930 年に修復され、当時のムッソリーニが別荘として私用した。この館のそばには、考古学博物館がある。「波の泡から生まれた瞬間の片膝を地面に着いたアフロディティ像などがある。



アフロディティ像



アスクレピオス像

アフイヨン

トルコ西部、エーゲ海地方のアフイヨン（Afyon）県は略称であり、正式には Afyonkarahisar（アフイヨンカラヒサル）県である。県都アフイヨンカラヒサルからバスで真西に1時間ぐらい行った所に、目的の町 Bolvadin はある。Afyon はペルシャ語で阿片を意味する“afyon”から取引の中心地として名づけられた。ここにある阿片工場（AFYON ALKALOİDLERİ FABRİKASI）の入場ゲートでは、係りの守衛が厳重に出入を管理している。工場の中心は抽出・精製施設(Extraction Unit)と誘導体製造施設(Derivatives Unit)の2部門に分けられている。これらの施設への入場チェックは特に厳重であり、写真機や携帯電話機などの通信機器の持ち込みは禁止である。阿片の原料となるケシは *papaver somniferum*（眠れるケシ）という種類で、阿片の主要成分モルヒネや誘導体のヘロインなどが作られる。



阿片工場（AFYON ALKALOİDLERİ FABRİKASI）の入場ゲート（左）と工場外観（右）

参考文献

本稿の記載した所は、主に全国公私病院連盟主催の「医学史を巡る旅」ならびに欧州医学史研究会主催の「医学史を巡る旅」で訪問した医学史跡である。それらを千葉大学医学部同窓会であるものはな同窓会報に連載したが、その「医学史巡り」を加筆訂正し各国別に整理したものである。したがって、本稿に記載されないが訪問すべき箇所も他に多々あることはご承知願いたい。なお筆者が報告した文献は、下記に列挙した。またその中でギリシア医学史の旅（平成 28 年 11 月 3 日～9 日）、スペイン医学史の旅（2015 年 9 月 4 日～11 日）、マルタ・ローマ・ナポリ医学史巡り 2014（2014 年 9 月 8 日～15 日）、ドイツ・チェコ近代医学史の旅 2013（2013 年 6 月 7 日～15 日）の動画は、本誌と合わせてものはな同窓会国際交流欄 <https://inohana.jp/nonline/international/index.html> でご覧いただきたい。

1. 英国

杉田克生 ロンドン科学博物館訪問からの感染症一考察(その 2)-アレキサンダー・フレミングが友人に渡したペニシリン標本- STETHOSCOPE No.237、p7-10, 2020, (2020 年 9 月 30 日発行)

杉田克生 ロンドン科学博物館訪問からの感染症一考察 - STETHOSCOPE No.236、p3-6, 2020, (2020 年 6 月 30 日発行)

杉田克生 ウィリアム・ハーヴィを巡る旅再考 STETHOSCOPE 2019, No.232、p16-19, (2019 年 7 月 20 日発行)

杉田克生 ジョン・スノー史跡再訪 STETHOSCOPE 2019, No.230、p12-14, (2019 年 4 月 10 日発行)

杉田克生 エジンバラ学派のベル教授達とコナン・ドイル 日本医事新報 2016, No4832, p71-72 (2016 年 12 月 3 日発行)

杉田克生 コナンドイル卿とジョセフ・ベル教授 STETHOSCOPE 2016, No.222、p22-23, (2016 年 9 月 30 日発行)

杉田克生 ホジキンリンパ腫の倒立標本 日本医事新報 2013, No4651, p76-78 (2013 年 6 月 15 日発行)

杉田克生 王立内科医師会ならびに聖バーソロミュー病院博物館を訪ねて 英国医学の歴史を巡る旅視察報告書、全国公私病院連盟 pp26-29, 2010 (平成 22 年 3 月発行)

石田純郎 世界散歩 病院史跡を巡る旅⑫ カンタベリーのイーストブリッジ・ホスピタル他 大塚薬報 No.715, 2016

2. イタリア

杉田克生 ティベリーナ島のアスクレピオスの杖 STETHOSCOPE 2016, No.220、p15-17, (2016 年 4 月 10 日発行)

杉田克生 不治の病者の聖母病院とピオ・モンテ・デッラ・ミゼルコルディア聖堂
STETHOSCOPE 2014, No.217、p14, (2015年5月10日発行)

杉田克生 ガリレオの生涯ーピサ、パドヴァ、フィレンツェ STETHOSCOPE 2013,
No.208、p3-7, (2012年12月発行)

杉田克生 ガリレオ“Publish and Perish”の生涯 日本醫事新報 2012, No4625, p92-95
(2012年12月15日発行)

杉田克生 ルイジ・ガルヴァーニとアレッサンドロ・ヴォルタ STETHOSCOPE 2012,
No.206、p6-9, (2012年6月発行)

杉田克生 ソルフェリーノ 「北イタリア医学の歴史を巡る旅」視察報告書 全国公私病
院連盟 p20-21, 2006年(平成18年3月発行)

杉田克生 カンパーニャ州見聞記 千葉県小児科医会会誌 2005, No. 36,p28-30 (平成17
年12月25日発行)

杉田克生 イタリア・カンパーニャ州医学見聞記 日本醫事新報 2005, No4253, p42-44
(2005年10月29日発行)

星和夫, 杉田克生 STETHOSCOPE 日本医学切手友の会会報 特別号 「マルタ・ロー
マ・ナポリ医学史の旅2014 報告書」 平成27年4月発行 日本医学切手友の会

西村忠郎 イタリア医学の歴史を概観する 耳喉頭頸 77;474, 2005

3. フランス

杉田克生 動物磁気理論など疑似科学が生まれる時代背景 - リヨン大学医学・薬学歴史博
物館訪問からの一考察 - STETHOSCOPE No.234・5、p3-5, 2020, (2020年4月20日
発行)

杉田克生 クロード・ベルナル博物館 STETHOSCOPE 2019, No.233、p15-17, (2019
年11月10日発行)

杉田克生 モンペリエ大学医学部見聞記 日本醫事新報 2011, No4534, p110-112 (2011
年3月19日発行)

杉田克生 モンペリエ大学医学部博物館を訪ねて pp26-29 「南フランス医学の歴史
を巡る旅視察報告書」、全国公私病院連盟 (平成23年3月発行)

杉田克生 ガリレオの生涯ーピサ、パドヴァ、フィレンツェ STETHOSCOPE 2013,
No.208、p3-7, (2013年2月発行)

杉田克生 ジェノヴァのジェンナー大理石像を訪ねて STETHOSCOPE 2010, No.198、
p8-11, (2010年3月発行)

4. ドイツ

杉田克生 シーボルトを巡る旅 再考 STETHOSCOPE 2018, No.230、p12-14, (2018年
12月発行)

杉田克生 レントゲンの生誕地レンネップならびに終焉の地ミュンヘンを訪ねて
STETHOSCOPE 2018, No.228、p19-20, (2018年3月31日発行)

杉田克生 ハイน์リッヒ・シュリーマンを死に至らしめた真珠腫性中耳炎 日本醫事新報
2015, No4777, p72-74 (2015年11月14日発行)

杉田克生 エーベルトの穿孔性虫垂炎からめぐらした弁証法的空想 日本醫事新報
2013, No4663, p92-94 (2013年9月7日発行)

5. オーストリア

杉田克生 グラーツ見聞記 栄光のウィーン医学を偲ぶ旅視察報告書 2008、pp22-27
(平成20年3月発行)

杉田克生 オーストリア・グラーツ市医学見聞記 日本醫事新報 2008, No4369, p84-85
(2008年1月19日発行)

6. スイス

杉田克生 チューリッヒ時代のレントゲン STETHOSCOPE 2017, No.225、p16-17,
(2017年6月30日発行)

7. オランダ

石田純郎 蘭医学の故郷 ライデンその一 ミクロスコピア 22(3), 2005

石田純郎 蘭医学の故郷 ライデンその二 ミクロスコピア 22(4), 2005

8. スペイン・ポルトガル

杉田克生 スペイン医学史の旅 STETHOSCOPE 2015, No.219、p16-19, (2015年12月
31日発行)

萬年甫編訳「神経学の源流2 ラモニ・カハール、東京大学出版」

萬年甫 脳の探求者ラモニ・カハール スペインの輝ける星 中公新書

9. ハンガリー、チェコ

杉田克生、杉田記代子 ドイツ・チェコ近代医学史の旅 2013 STETHOSCOPE 2013,
特別号、p4-6, (2013年11月発行)

星和夫、杉田克生編集 ドイツ・チェコ近代医学史探訪 2013 報告書 STETHOSCOPE
平成25年11月発行

10. ギリシア

杉田克生、杉田記代子 コス島のアスクレピエイオン ギリシャの医跡を巡る旅視察報告
書 2007、pp33-35 (平成19年9月発行)

杉田克生 コス島アスクレピエイオンでの「ヒポクラテスの誓い」 STETHOSCOPE
2007, No.189, pp9-13 (2007年9月30日発行)

11. トルコ

杉田克生 「阿片」の語源になった Afyyon を訪ねて 日本醫事新報 2009, No4446, p96-98 (2009年7月11日発行)

杉田克生 イスタンブール医学部皮膚科 Behcet 記念像ならびに旧スクタリ病院内ナイチンゲール博物館を訪ねて 「医学の歴史を巡る旅 (トルコ9に参加して)」 視察報告書 全国公私病院連盟 p20-21, 2009年3月発行

欧州医学史探訪

<https://doi.org/10.20776/900121550>

発行日：2023年6月1日

著者：杉田克生

発行所：千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター

〒260-8670 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

電話番号：043-226-2975

<https://www.m.chiba-u.ac.jp/class/rccmd/>

ISBN978-4-9913125-0-2

ISBN978-4-9913125-0-2



欧州医学史探訪

千葉大学子どもまのころの発達教育研究センター